

永光寺遺跡

— 境内地の発掘調査 —

1997年

石川県立埋蔵文化財センター

永光寺遺跡

— 境内地の発掘調査 —

1997年

石川県立埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は石川県羽咋市酒井所在の、石川県指定史跡永光寺の境内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本件は、石川県土木部砂防課が主管して石川県羽咋土木事務所が事業を実施した、永光寺川の通常砂防（荒廃）工事に係る発掘調査である。
- 3 調査は1991年度から1996年度まで石川県立埋蔵文化財センターが実施し、調査に係る経費は石川県土木部砂防課が負担した。
- 4 現地調査は以下の職員が担当した。
1990年度 平田天秋
1991年度 小嶋芳孝・柿田祐司
1992年度 垣内光次郎・石井由美
1993年度 木立雅朗・澤田まさ子・白田義彦
1994年度 木立雅朗・端猛
1996年度 垣内光次郎・林大智
- 5 報告の執筆は当該年度の担当者がおこない、文末に文責を記した。
- 6 永光寺関係の文献資料に関する考察を石川県立図書館の室山孝主査にお願いし、玉稿をいただいた。
- 7 現地調査では、羽咋市酒井地区のみなさんのご協力を得た。
- 8 調査に当たっては、曹洞宗永光寺・羽咋市教育委員会のご協力を得た。
- 9 本書では、遺構の表記を以下によりおこなった。
SK土坑 SD溝 SP小穴 SX性格不明の遺構
- 10 調査で出土した遺物や図面・写真等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

第1章 位置と環境	1
第2章 史跡現状変更手続きと発掘調査の経過	2
第3章 1990年度の調査（第2次調査）	8
第4章 1991年度の調査（第3次調査）	20
第5章 1992年度の調査（第4次調査）	46
第6章 1993年度の調査（第5次調査）	52
第7章 1994年度の調査（第6次調査）	70
第8章 1996年度の調査（第7次調査）	73
付 章 利生塔跡の測量調査	76
第9章 中世永光寺の諸相	102

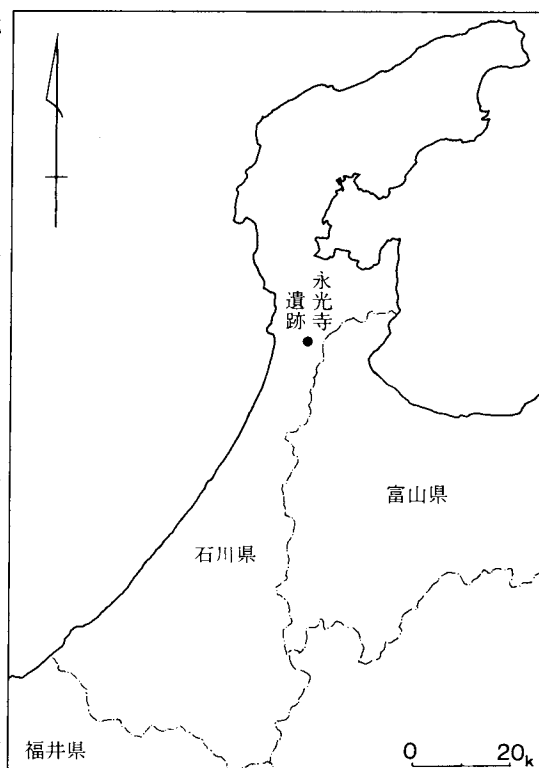
第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

永光寺遺跡は、石川県羽咋市酒井町・本江町寺境に所在する曹洞宗洞谷山永光寺に関わる遺跡である。永光寺は酒井川の支流永光寺川の河畔山腹上にあり、境内には歴代住職の墓地の他に中世の板碑や五輪塔の立つ墳墓などがある。境内は県史跡に指定され、中世末期から近世文書を多数含んだ永光寺文書は県指定文化財に指定されている。本遺跡は、大伴家持が748年(天平20年)に能登巡回にあたって参拝した気多神社より東約6Km・北へ約2Kmにあり、香島津(七尾市)からは南へ約13Km・東約10Kmに位置する。

羽咋市は日本海の外浦に面し、北西の眉丈山系と南東の石動山系の2つの山系に挟まれた形で所在する。第三紀に地殻の隆起により上記2つの山系が形成され、南方に飯山断層帯と北方には眉丈山断層が生じた。これにより邑知地溝帯が形成された。第四紀完新世に入ると、縄文時代前期の海進により「邑知入り江」ができ、四柳～下曾祢～金丸付近まで海となった。その後、入り江の中に砂が堆積したこと、海退、河川の堆積作用などによって、羽咋砂丘等の形成により入江が閉塞されて邑知潟が形成された。邑知潟は菱湖とも呼ばれ、昭和初期には787haあったが、1946年(昭和21年)から行われた干拓事業で465haとなり、現在では86haとなった。地溝帯の北西部には、石塚川・二宮川・長曾川等の中小河川によって形成された複合扇状地が形成されている。

本遺跡の所在地である酒井町・本江町寺境は、『能登志徴』によると「今は二ヶ村に別れ、永光寺の門前をば寺酒井と呼べり此の地名はいにしえ酒井てふ井ありし故の名にや」とあり、中世には酒井保と呼ばれた。酒井から邑知潟を通れば、直線距離で5Kmで日本海へ至る。本遺跡は、石動・宝達山系の碁石ガ峰(標高461m)山麓西端の標高100～150mの傾斜地に立地している。西へ約3Kmで富山県との県境である。現在も国道415号線を利用して飯山町経由で、富山県氷見市との往来が頻繁である。酒井町で邑知潟に注ぐ酒井川・永光寺川は、永光寺の境内で急勾配で細流であるため度々氾濫し、その都度対岸を削り流れを変えている。5次にわたる石川県立埋蔵文化財センターの発掘調査も、土砂が国道159号線にまで到達する、1989年(昭和64年)の洪水に起因した災害対策事業に端を発するものである。



第1図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

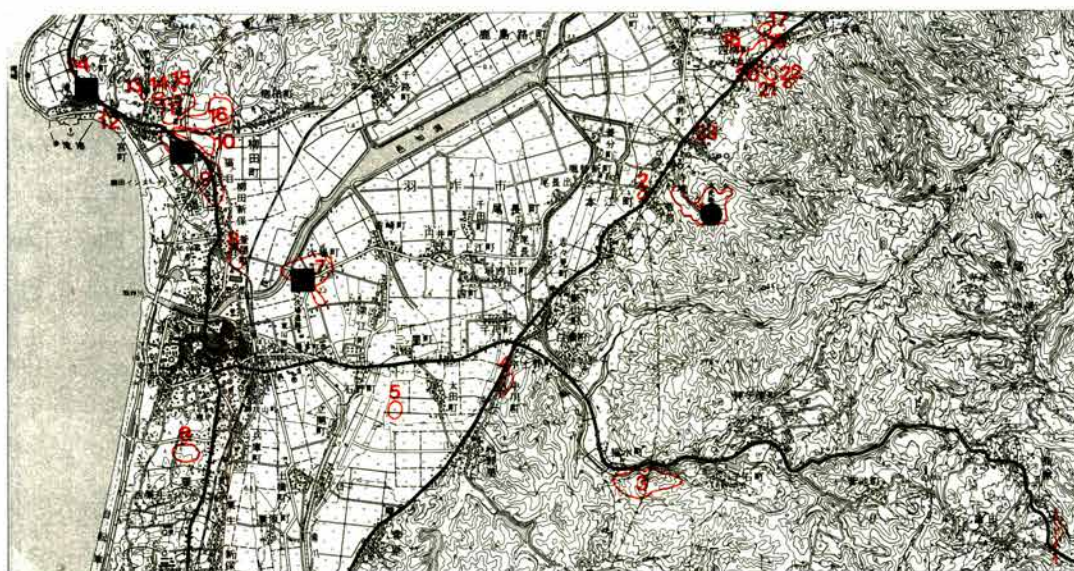
前節で述べた本遺跡の周辺には、種々の遺跡が存在する。眉丈山系に立地する上棚遺跡から、1993年に旧石器時代の広義のナイフ形石器が表採されている。寺家遺跡（9）からは、縄文前期の北白川下層II式の爪形文を2条に横走させる土器が出土している。シジミなどの淡水貝を主とする四柳貝塚（20）は、縄文中期新崎～上山田式の土器を出土し、「邑知入り江」を介して入手した淡水魚介類を食糧として生活がされていたようである。弥生時代には、邑知潟沿いの微高地上に立地する吉崎・次場遺跡（7）が稲作を基盤として、初期農耕社会を形成している。この遺跡は、1975～77年の羽咋市教委の発掘調査で幅約3mの環濠が確認されており、古墳時代初頭まで営まれた中核的な大集落跡である。地溝帯内の各集落は、生産性の向上とあいまって弥生後期にその数がピークに達している。古墳時代には、地溝帯と日本海に面する段丘上や砂丘上にムラが営まれ、海上交通や水利を意識した古墳も多く築造された。5世紀初頭に築造された滝大塚古墳（24）が、日本海側最大級（墳長約90m）の帆立貝形前方後円墳であることを1995年度に羽咋市教委が確認している。眉丈山系では、雨の宮1・2号墳がある。雨の宮1号墳は2段築造で葺石を施し、粘土郭から石釧等多数の副用品が1996年に検出されている。石道山系では眉丈山系とほぼ同時期に亀塚古墳や小田中親王塚古墳が作られている（伊藤1995）。

1990～91年の市教委の調査で、墨書土器・円面硯等を出土している四柳白山下遺跡（19）では、1995年からの（社）石川県埋蔵文化財保存協会による調査でも、古代の建物や寺関係の建物に関連する帯金具・木沓・墨書土器等も出土している。また大町C遺跡からは1991年当センターの発掘調査で、五段横板井籠組井戸や「大町」の墨書を持つ土器等を検出している。上記の二遺跡は、古代北陸道「撰才駅」にまつわる可能性を持つ地点である。中世では、四柳宮の腰古銭遺跡（18）からは渡来銭36貫が出土している。

本遺跡は、冒頭に紹介したように曹洞宗洞谷山永光寺の境内である。永光寺開山の瑩山紹瑾は道元の弟子で、始め加賀大乘寺に二世として住持した。その後、羽咋郡の地頭酒匂氏の嫡女、平氏女と夫の海野三郎滋野信直が瑩山を招き、酒井保に1313（正和二）年に茅屋をむすぶ。また平氏女と海野三郎が、山野・田畑などを1319（文保二）年瑩山に寄進した。

永光寺の伽藍配置は、左右対象の独自様式を持っている。伽藍配置は中央に山門、右に庫裏・客殿・方丈・食堂・東司、左に選仏堂、その上に法堂、更に廊下を登って開山堂、頂上に五老峰（五人の高僧の遺品を納めたもの）というもので、足利尊氏・直義兄弟より寄進を受けた利生塔1339（暦応2）年の遺構も残っている。

1344年（康永3年）比丘浄詔が「羽咋湊保」北方の田地を継ぎ、1347（貞和3）年禅傑無底良が「羽咋湊保」吉崎の田地を灯明料として、永光寺に寄進している。「湊保」については、「国中四郡庄・郷・保公田々数目録」（「能登太田文」）によれば唯一「湊」のついた国衙領として記載されており、日本海に開かれた、要港であったことがうかがえる。鎌倉末期から南北朝期において永光寺の多くの雲水たちが、羽咋湊から日本海に漕ぎ出していった（東四柳1995）。「湊保」が曹洞宗雲水の諸国行脚の湊として利用されたことは、諸国の物資がこの地にもたらされることに



第2図 永光寺周辺の中世等の遺跡 (S = 1 / 100,000)

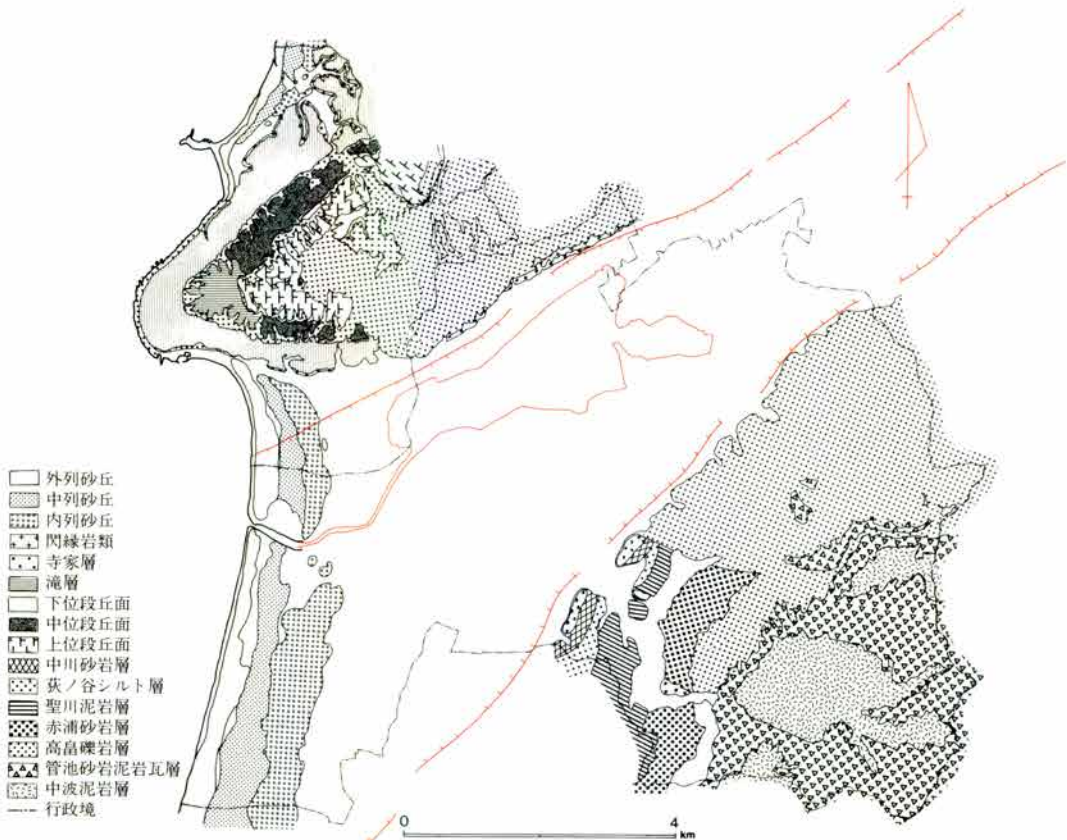
番号	名称	所在地	種別	時代	出土品
1	永光寺遺跡	羽咋市酒井町	寺跡	中世	陶磁器
2	若部遺跡	羽咋市若部町	散布地	平安～中世	須恵器、珠洲焼
3	福水朝日山遺跡	羽咋市福水町	寺跡・墳墓	中世	板碑
4	中川中世寺院跡	羽咋市中川町	寺跡	中世	
5	太田ツツミダ遺跡	羽咋市太田町	散布地	平安～中世	須恵器、土師器、漆器
6	千里浜遺跡	羽咋市千里浜町・ 兵庫町	散布地	弥生～中世	弥生土器、石包丁、須恵器、 土師質土器
7	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次 場町・鶴多町	散布地	弥生～中世	土器、土製品、石器、木器、 玉、鏡
8	釜屋倉ノ下遺跡	羽咋市釜屋町	散布地	平安～中世	須恵器、土師器、珠洲焼
9	寺家遺跡	羽咋市寺家町・柳 田町	祭祀	縄文～中世	縄文土器、弥生土器、須恵 器、土師器、中世陶磁器、 銅製品、鉄製品、三彩、ガ ラス製品
10	柳田猫の目遺跡	羽咋市寺家町・柳 田町	散布地	縄文～中世	土器、石器、木器、金属製 品
11	気多社僧坊群遺跡	羽咋市寺家町	散布地	縄文～中世	土器、石器、金属製品
12	不動寺院跡	羽咋市一ノ宮町	寺跡	中世	板碑、五輪塔
13	気多1号中世墓	羽咋市寺家町	墓	中世	石室
13	気多2号中世墓	羽咋市寺家町	墓	中世	石室
14	寺家中世墓	羽咋市寺家町	墳墓	中世	
15	大楽寺中世墓	羽咋市寺家町	墳墓	中世	須恵器、珠洲焼、人骨
16	柳田台地遺跡	羽咋市柳田町	散布地	縄文～中世	
17	大町ダイジングウ遺跡	羽咋市大町	散布地	中世	
18	四柳宮の腰古銭遺跡	羽咋市四柳町	散布地	中世	甕、北宋・明銭36貫
19	四柳白山下遺跡	羽咋市四柳町	集落跡	奈良・平安	墨書土器、円面硯、羽口
20	四柳貝塚	羽咋市四柳町	貝塚	縄文	土器、石匙、磨製石斧
21	四柳中の堂遺跡	羽咋市四柳町	散布地	縄文・古墳	縄文土器、石器、土師器
22	四柳中世墓群	羽咋市四柳町	墓	中世	五輪塔、板碑、四耳壺
23	酒井中世墓群	羽咋市酒井町	墓	中世	五輪塔、板碑
24	滝大塚古墳	羽咋市滝町・一ノ 宮町	古墳	古墳	円筒埴輪、勾玉、須恵器

表1 永光寺周辺の中世等の遺跡

もなった。しかし、14世紀末ないし15世紀初頭になると、飛砂による大規模な砂丘地の埋没という地形変化（前述 寺家遺跡発掘調査報告書）のため湊津としての機能を失っている（前述 東四柳）。羽咋湊が機能を失ったことにより、永光寺も邑知潟を通じての物流機能が縮小され俄山によって門前町の総持寺に能登曹洞宗の拠点が移転されている。1468（応仁2）年に炎上し、1579（天正7）年上杉氏による焼き討ちにより諸堂が焼亡、絵図文書等に残る寺境争い、藩政期前田家の禅宗対策等の諸事を経て現在に至る。石動山系にひっそりと残る現在の伽藍は、1883～1909（明治16～42）年に弧峯白巖により大修理されている。（沢田まさ子）

[参考文献]

- 『羽咋市史』羽咋市教育委員会1973年
- 『能登街道Ⅰ』石川県教育委員会1996年
- 橋本澄夫「次場の稲づくりのムラ」『石川県の歴史』河出書房1988年
- 森田平次『能登志徴』上編復刻2ー2 石川県図書館協会1969年
- 小嶋芳孝他『寺家遺跡発掘調査報告書Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター1988年
- 伊藤雅文「能登・加賀」『全国古墳編年集成』石野博信編 雄山閣出版1995年
- 東四柳史明「日本海交通の拠点能登」『中世の風景を読む6』新人物往来社1995年



第3図 羽咋市周辺の地質図（藤1973より加筆）

第2章 史跡現状変更手続きと発掘調査の経過

1985（昭和60）年6～7月の集中豪雨で永光寺川が氾濫し、永光寺境内の参道周辺や、下流の羽咋市酒井町一帯が深刻な被害を受けた。この水害をきっかけに永光寺川の砂防工事が計画され、石川県土木部砂防課の主管で羽咋土木事務所が工事を開始した。

その後、1990（平成2）年4月17日付羽土木発第127号で埋蔵文化財の分布調査について依頼があり、また、6月18日付羽土木発第207号で埋蔵文化財（永光寺遺跡）の発掘調査依頼が、羽咋土木事務所長から県立埋蔵文化財センター所長あてに行われている。これを受けて県立埋蔵文化財センター所長は、8月10日付埋文収第120号で羽咋土木事務所長あてに発掘調査計画書を提出している。また、8月23日付羽土木発第356号で発掘通知（57条の3）が県知事から教育長あてに提出され、8月27日埋文収第153号で県指定史跡永光寺にかかる現状変更申請を行うことと、発掘調査が必要な旨を通知している。8月27日付埋文収第153号で文化財保護法98条の2の発掘通知を提出し、9月3日～12月7日にかけて約500㎡の調査を調査第一課長平田天秋が担当した。

県指定史跡永光寺境内の工事にかかる現状変更許可申請書は、1990（平成2）年9月27日付羽土木発第177号で羽咋土木事務所長から県教育長あてに提出されている。この申請に対し、石川県教育委員会は1990（平成2）年10月22日付石川県教育委員会指令教文第20号で、事前に発掘調査を実施し、自然景観・歴史的景観の保全に留意し、工法の変更の際は事前に協議することなどの条件を付して、現状変更を許可している。

1991（平成3）年度は、5月8日付羽土木発第163号で、羽咋土木事務所長が県立埋蔵文化財センター所長あてに埋蔵文化財の分布調査を依頼している。これを受けたセンターは、6月17日に分布調査を実施し、6月25日付埋文収第84号で所長から羽咋土木事務所長に永光寺川下流域の遺跡分布範囲を確認した旨を回答している。また、5月8日付羽土木発第164号で羽咋土木事務所長から所長あてに発掘調査の依頼があり、6月1日付埋文収第83号で所長から砂防課長あてに発掘調査計画書を回答している。6月12日付埋文収第83号で発掘通知（98条の2）を通知し、6月17日～8月9日にかけて約800㎡を対象に、調査第一課専門員小嶋芳孝と嘱託柿田祐司が調査を担当した。

1992（平成4）年度は、5月1日付羽土木発第25号で羽咋土木事務所長から所長あてに発掘調査が依頼されている。5月6日付埋文収第62号で発掘通知（98条の2）を通知し、5月11日～6月5日にかけて約450㎡を対象に調査第一課主事垣内光次郎と主事石井由美が調査を担当した。

1993（平成5）年度は、9月28日～11月5日にかけて、約500㎡を対象に調査第一課主事木立雅朗・主事沢田まさ子・嘱託白田義彦が調査を担当した。

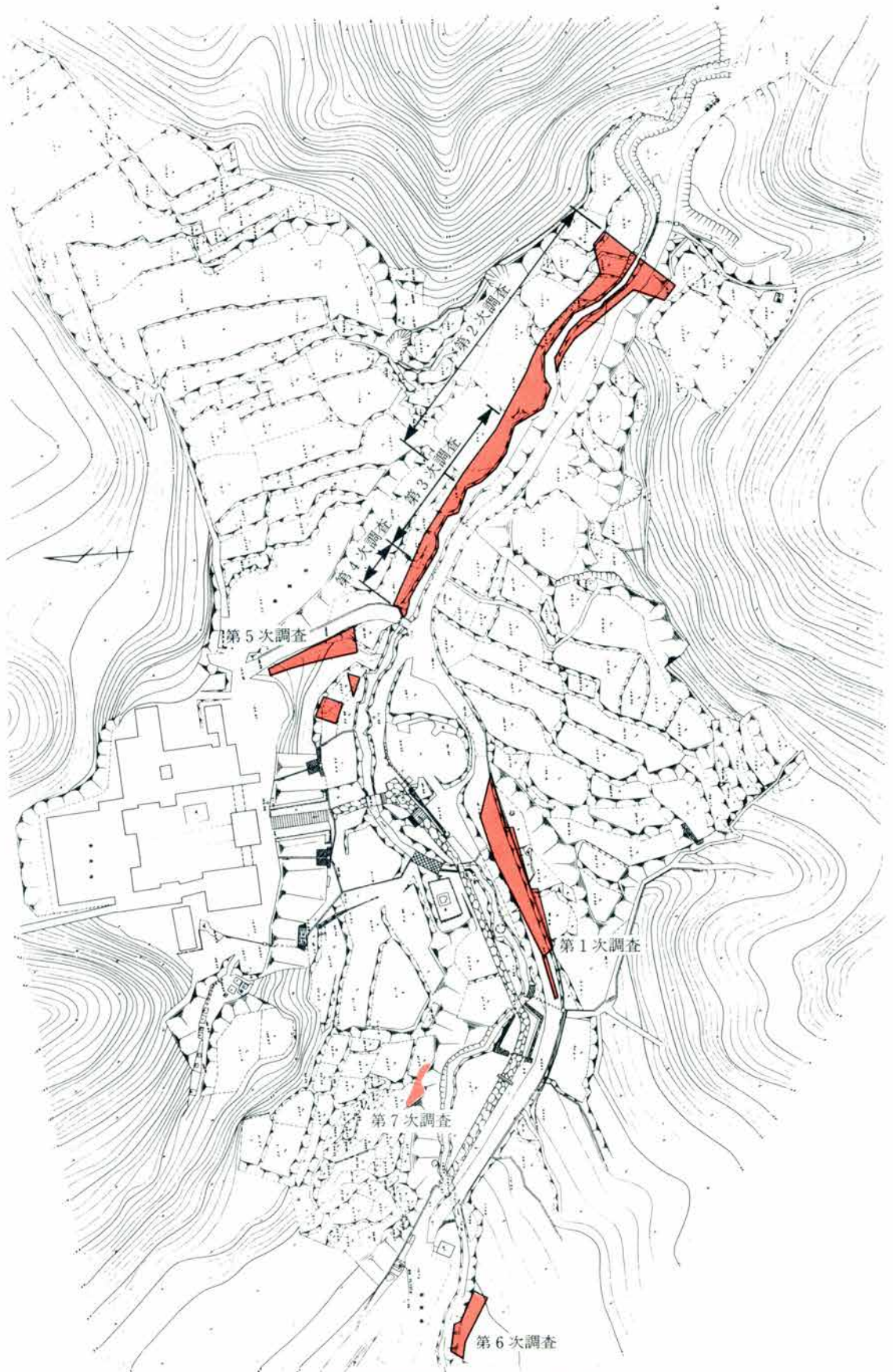
1994（平成6）年度は、5月24日付羽土木発第448号で、知事から文化庁長官あてに発掘通知（57条の3）が提出され、5月24日付埋文第338号で教育長から知事あてに発掘調査が指示されている。5月24日付埋文第339号で、発掘通知（98条の2）を教育長から文化庁長官あてに提出し、5月24日～6月30日にかけて約120㎡を対象に調査第一課主事木立雅朗と主事端猛が調査を担当した。

1995（平成7）年7月25日付羽土木第367号で、県指定史跡「永光寺」の現状変更（永光寺川改修工事）の施工内容の変更について羽土木事務所長から県教育委員会文化課長に協議があった。内容は、川幅を5mから4.4mに縮小し、落差工の設置を二箇所から一箇所に変更するというものである。これを受けて、8月24日付教文第1313号で、文化課から羽土木事務所長あてに現状変更施工内容の変更については差し支えない旨を通知している。

1996（平成8）年度には、4月9日付羽土木第34号で羽土木事務所長から所長あてに調査依頼があり、4月12日付羽土木第75号で知事から文化庁長官あてに発掘通知（57条の3）が提出されている。これを受けて、4月12日付教文第99号で教育長が発掘調査の必要な旨を通知し、4月15日～26日にかけて200㎡を対象に調査第二課主任主事垣内光次郎と主事林大智が調査を担当した。（小嶋芳孝）



永光寺境内地の航空写真



第4図 調査区位置図 (S = 1/2,000)

第3章 1990年度の調査（第2次調査）

1 調査経過

9月6日に現場事務所(プレハブ)を設置し、9月13日より本年度調査区の草刈りを開始する。低木、竹、雑草が繁茂し、また暑さもあって難航する。VI-1区北西隅では、珠洲甕片、天目茶碗片などを表面採集した。10月1日にIII区の表土剥ぎを開始し、12月7日で現地調査を終了した。

2 遺構の調査状況

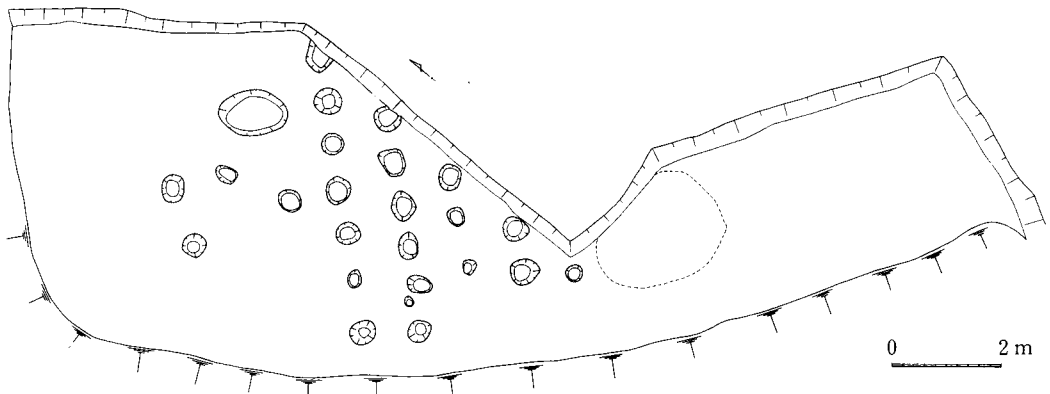
III区は、東西約30m、南北約20mの平坦な面で、南側は川のためはかなり削り取られている。北東側上部では、川の氾濫で土砂の堆積がある。北西隅には、V区にかけて鍵状の通路状の幅約2mの平坦面が認められる。約0.3~0.4mの表土(黄褐色砂)を除くと、地山(黄褐色粘砂)に至る。遺構は、検出されなかった。遺物では、南東隅で氾濫土に混じって棧瓦片が検出されている。

IV区は、本体から南東にのびる通路状の部分を調査した。土砂の堆積状況はIII・IV区と同様で、遺構の検出はなかった。

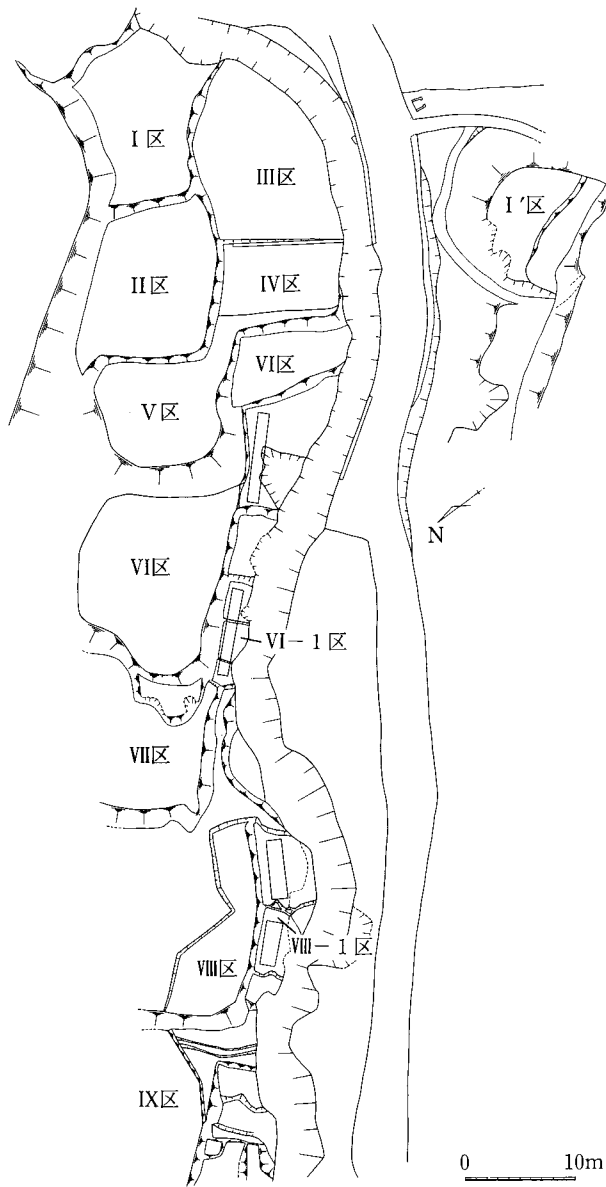
VI-1区とした調査区は、VI区とVII区を連結する通路状の平坦面で、東西約20m、南北約2~3mである。中位に約0.1mの段差が認められる。南西側では、川のために所々削り取られている。堆積土は黒褐色土で、厚い部分では約1mを越している。遺物では、中世土師器、珠洲などが採集される。西側(下流)に多い。遺構の検出はなかった。

VIII区は、東西約30m、南北約40~50mの非常にしっかりした平坦面である。IX区との比高は約2~3mを測る。南東隅には、川の氾濫土が厚く堆積していた。包含層の黒褐色砂土には、中世土師器、珠洲、瀬戸、美濃片が多い。遺構、遺物等の詳細については、次年度の報告を参照されたい。

VIII-1区は、VIII区南西側下段の幅約3~4mの通路状の平坦面で、川の氾濫のためかなりの損壊を受けている。氾濫土(白色砂)が厚く堆積し、取り除くと黒褐色砂土の包含層が4~50cm



第5図 VIII区上面の遺構



第6図 1990年度の調査区

認められ、岩石混じりの河底となる。Ⅷ区の法面から本区にかけて遺物は多い。西側隅から境内に通ずる道路と推定される。

I'区は、左岸にあり、川との比高約5mを測る。東西約5m、南北約1～3mの不整形な面で、南側平坦面の腰曲輪状のものである。黒褐色土の埋土をもつピット3を検出した。径0.3～0.5m、深さ0.5～0.7mを測る。遺物の出土はなく、埋土も軟らかく樹木痕の可能性が高い。

(平田天秋)

3 遺物

遺物の記述については各調査区ごとにある程度時期的なまとまりが認められるので、調査区ごとに述べることにする。

第Ⅰ区出土遺物（第7図）

1は白磁の皿底部である。時期は15世紀前半であろう。2・3は磁器の碗である。外側面に染付による文字が見えるが、これはおそらく「洞谷山」と書かれているものと考えられる。在地で注文生産されたものと見られるが、その時期は19世紀代であろうか。4は越前焼の播鉢である。時期は16世紀代である。

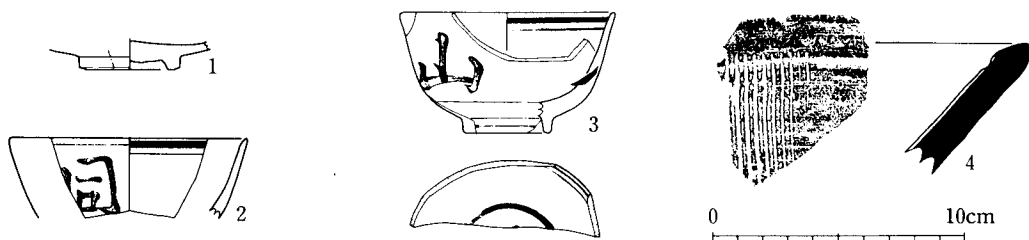
なお、2・3は93年度調査のA区平坦面より出土したものである。

第Ⅵ区出土遺物（第8図）

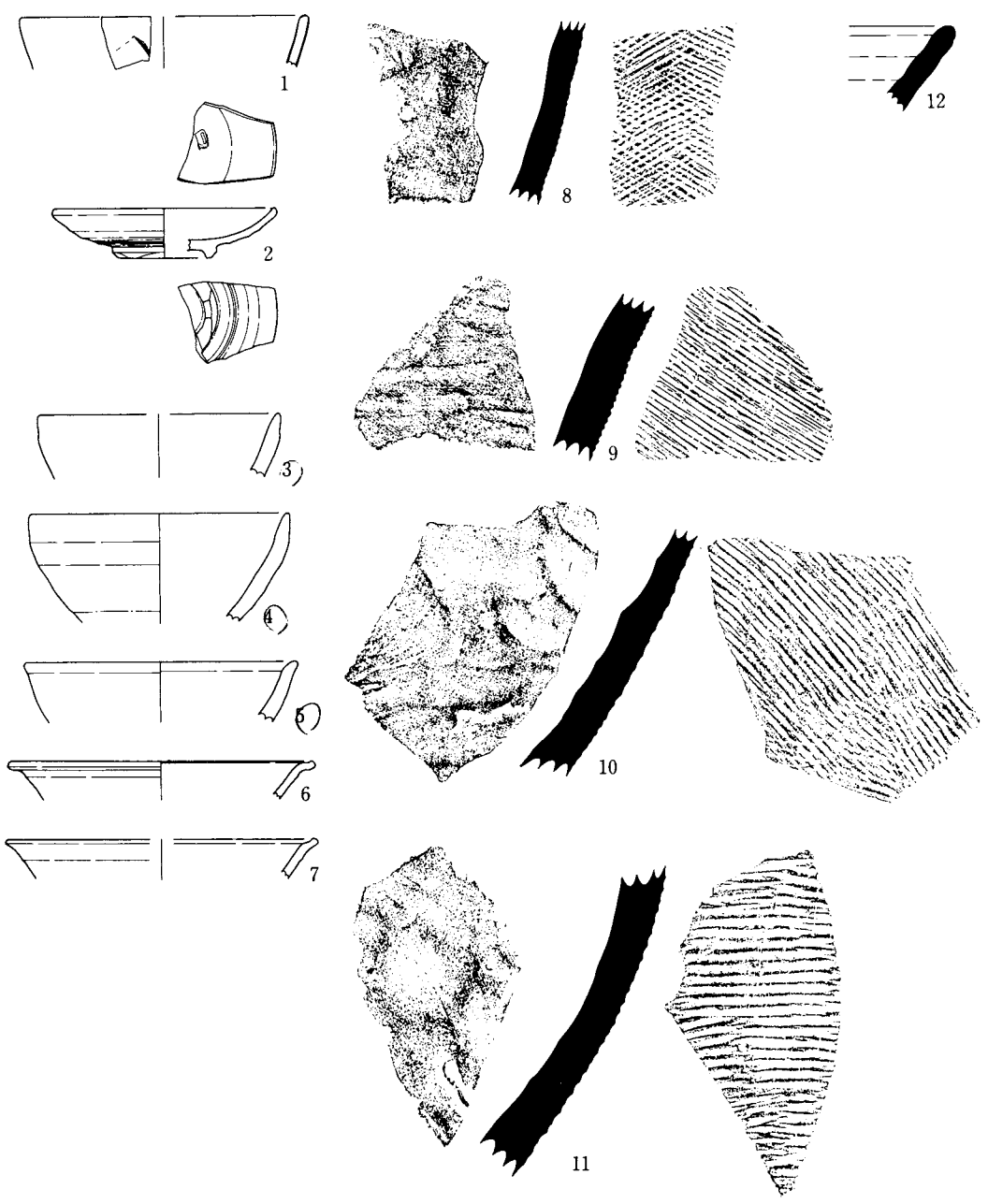
1は青磁碗の口縁部破片である。連弁が若干確認でき、時期は14世紀代と考えられる。2は白磁である。有台の皿で、内面だけでなく底部外面にも施釉されている。時期は15世紀前半代のものと考えられる。3～5は瀬戸美濃の天目茶碗である。6・7は唐津の溝縁皿である。時期は17世紀の前半代と考えられる。8～12は珠洲焼であり、12の鉢を除けばすべて甕の体部破片である。12の時期は15世紀代であろう。

第Ⅶ区出土遺物（第9図）

1は陶器でおそらく壺の口縁部になるものと思われる。その産地は壺の口縁部の形態および胎土から信楽の可能性もあり、そうであれば16世紀後半代のものであろう。2は珠洲焼の鉢口縁部



第7図 第Ⅰ区出土遺物



0 10cm

第8图 第VI区出土遺物

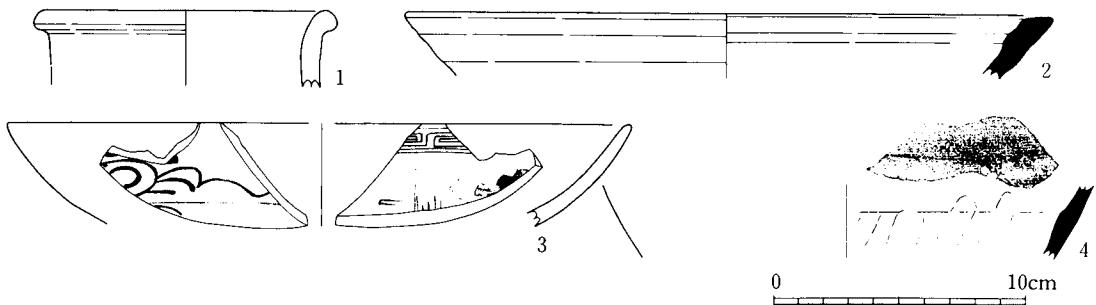
破片。時期は14世紀後半から15世紀代と考えられる。3は磁器で大鉢になると思われる。4は珠洲焼のおそらく壺の体部下半部と思われる。

第Ⅷ区出土遺物（第10図）

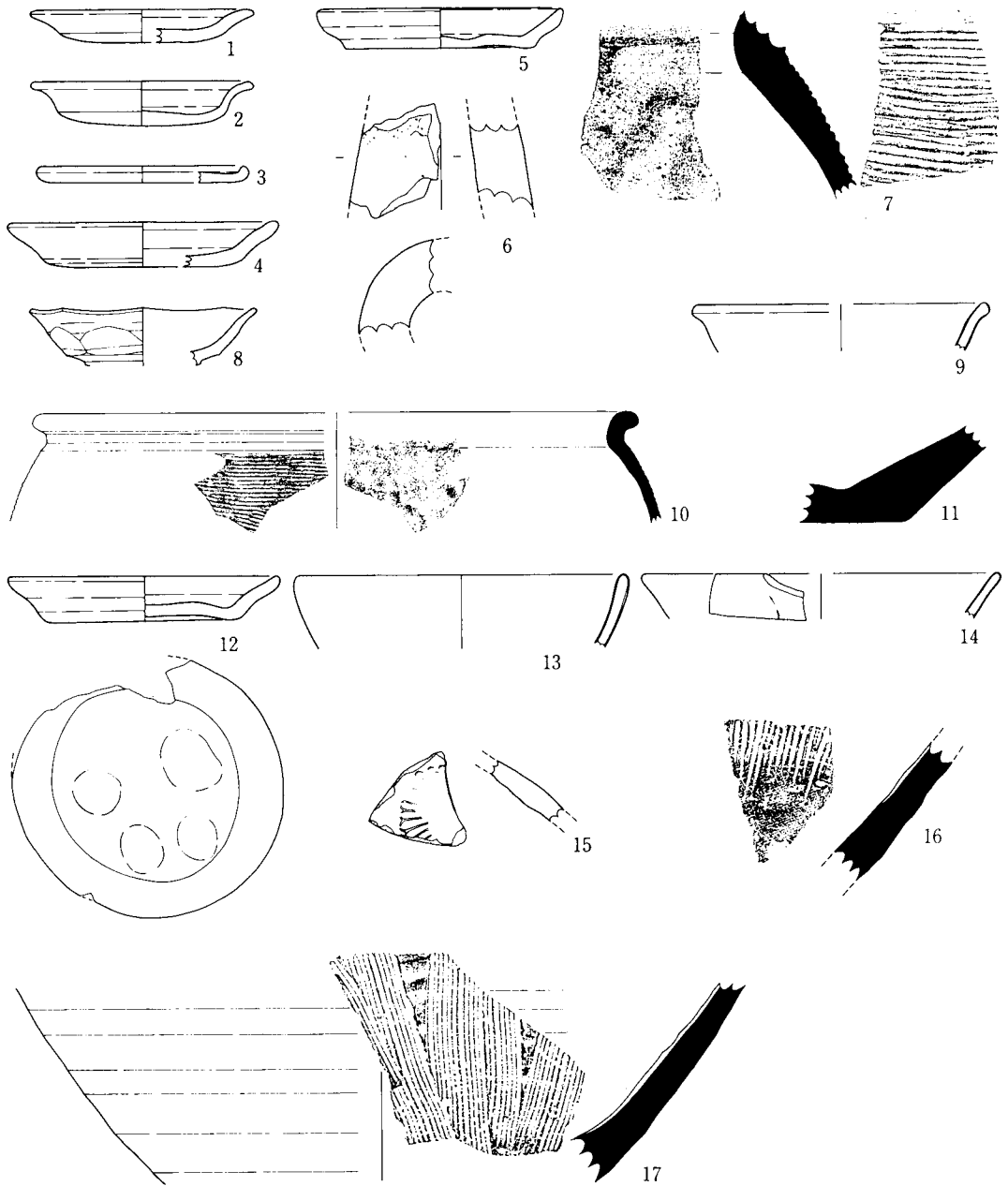
1から5は土師器皿。時期は15世紀前半から中葉といったところか。6はフィゴの羽口。7は珠洲焼の甕体部破片。8は白磁の多角杯。時期は14世紀後半代であろう。9は青磁の碗。10は珠洲焼甕。時期は14世紀前半代か。11は越前焼の甕底部破片と思われる。12は土師器皿。外面には明瞭に指頭圧痕が確認できる。時期は14世紀末葉から15世紀前半代か。13・14は青磁碗。14には蓮弁が見える。時期は14世紀代であろう。15は瀬戸美濃の瓶子の肩部破片であろう。16・17は珠洲焼の鉢体部下半の破片である。卸し目が割合密に入られていることから考えると、その時期はおそらく15世紀代であろう。またこの調査区からは実測図には示していないが、鉄製のくさびが1点出土している。

第Ⅸ区出土遺物（第11図）

1から22は第2層（第Ⅷ区法面）から出土している。23から25は裁ち割内から出土している。1から3は土師器皿である。4から7は白磁の皿である。9は白磁の口禿の碗で、時期は14世紀前半代であろう。4から7の時期は14世紀後半代であろう。8・10は青磁である。10は碗で、へう書きで蓮弁が表現されているもので、時期は15世紀代であろう。11は青磁の碗底部破片である。12は肥前磁器で、碗の底部破片である。「太□年□」の裏銘が見える。13は瀬戸美濃のおそらく瓶の体部下半部の破片と思われる。14から21は珠洲焼。14は甕口縁部破片である。時期はおそらく14世紀前半代であろう。15は甕体部破片。16は甕底部破片。17から20は鉢である。17は底部破片である。18は口唇部に波状文を入れている。口縁端部を外方に引き出して仕上げる特徴からして時期は15世紀前半代と考えてよいものである。19も18と同様の特徴を持っており、時期も同時期と考えられる。20は体部下半の破片だが、卸し目が密に入られていることからこれも15世紀代と考えてよいものだろう。21は甕の底部破片と考えられる。22は瓦質土器の破片である。23は珠洲焼の壺の体部破片と思われる。特徴的な叩き目文を持ち、同様の文様は大畠2号窯で出土している。24は珠洲焼の鉢体部下半部の破片である。卸し目が密に入っていることなどから、15世

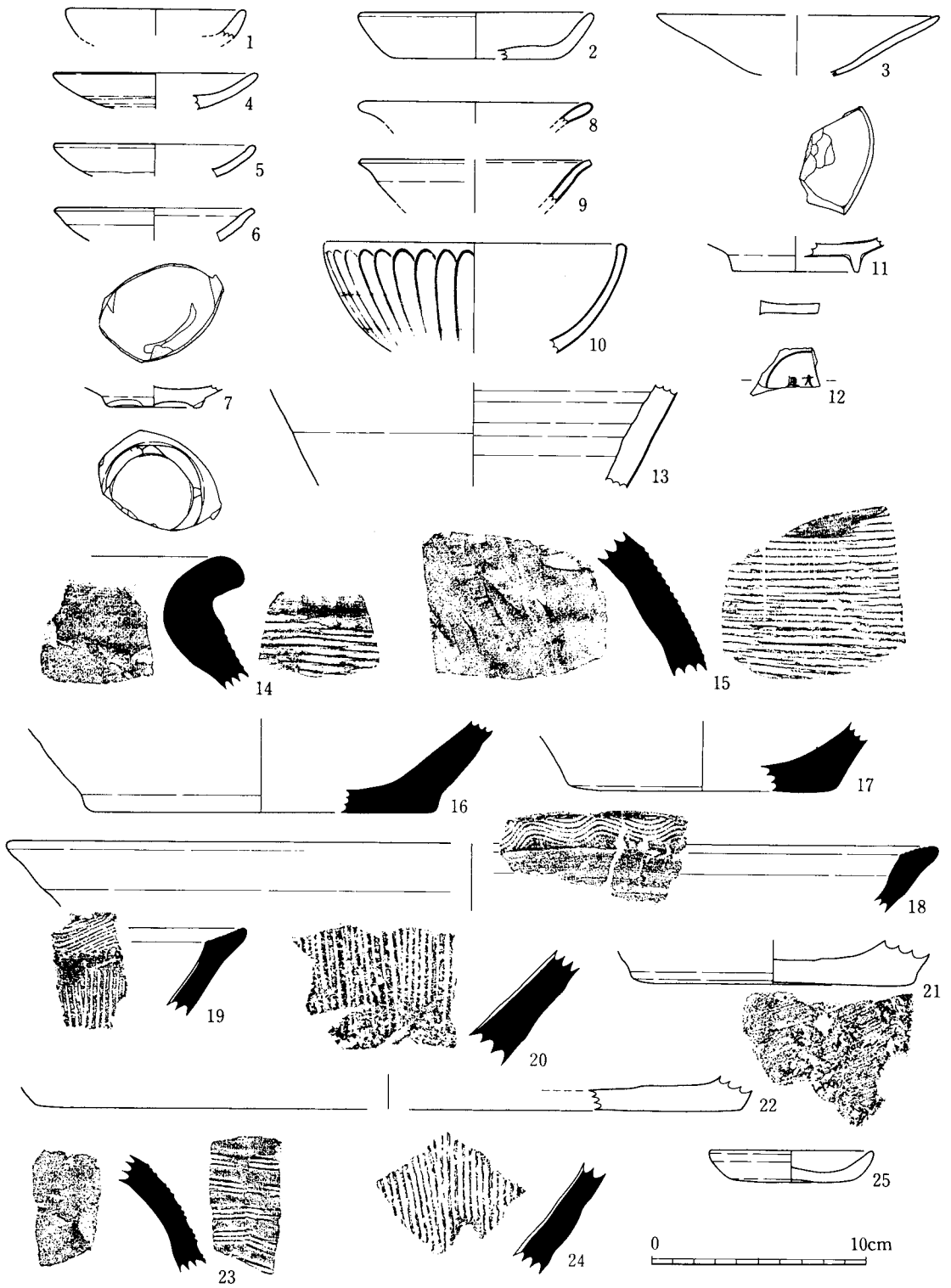


第9図 第Ⅶ区出土遺物

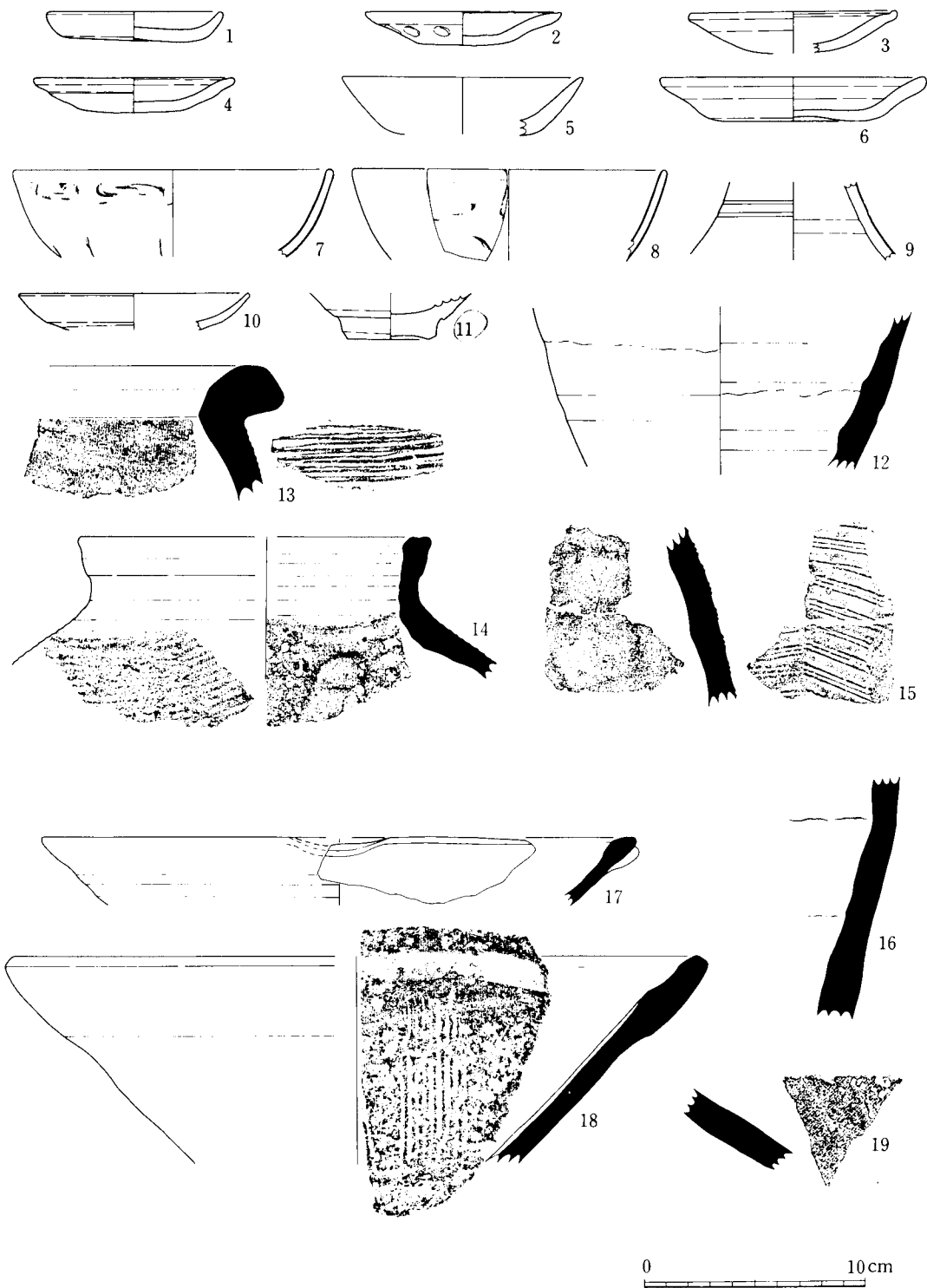


0 10cm

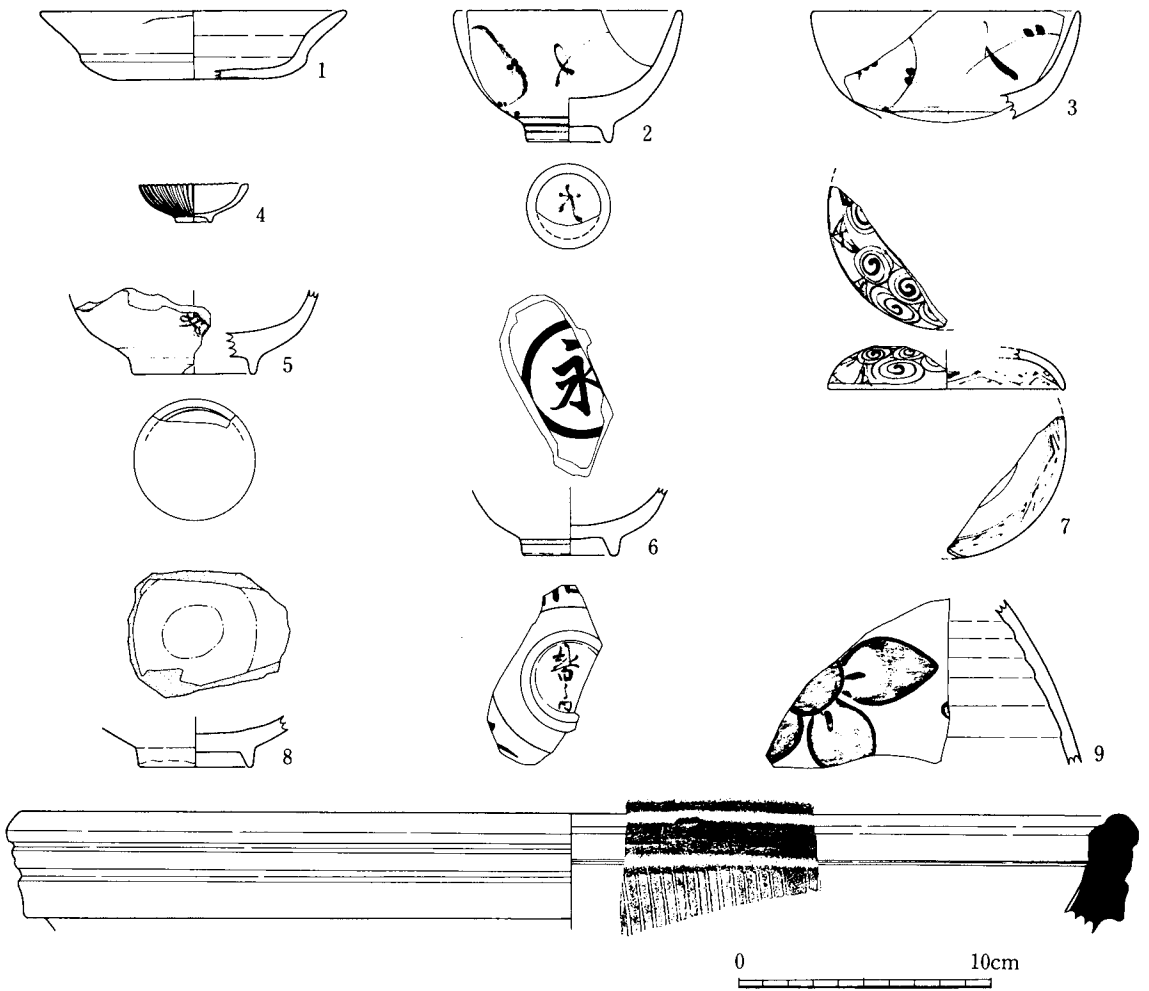
第10图 第八区出土遗物



第11图 第IX区出土遺物



第12图 第X区河道出土遺物

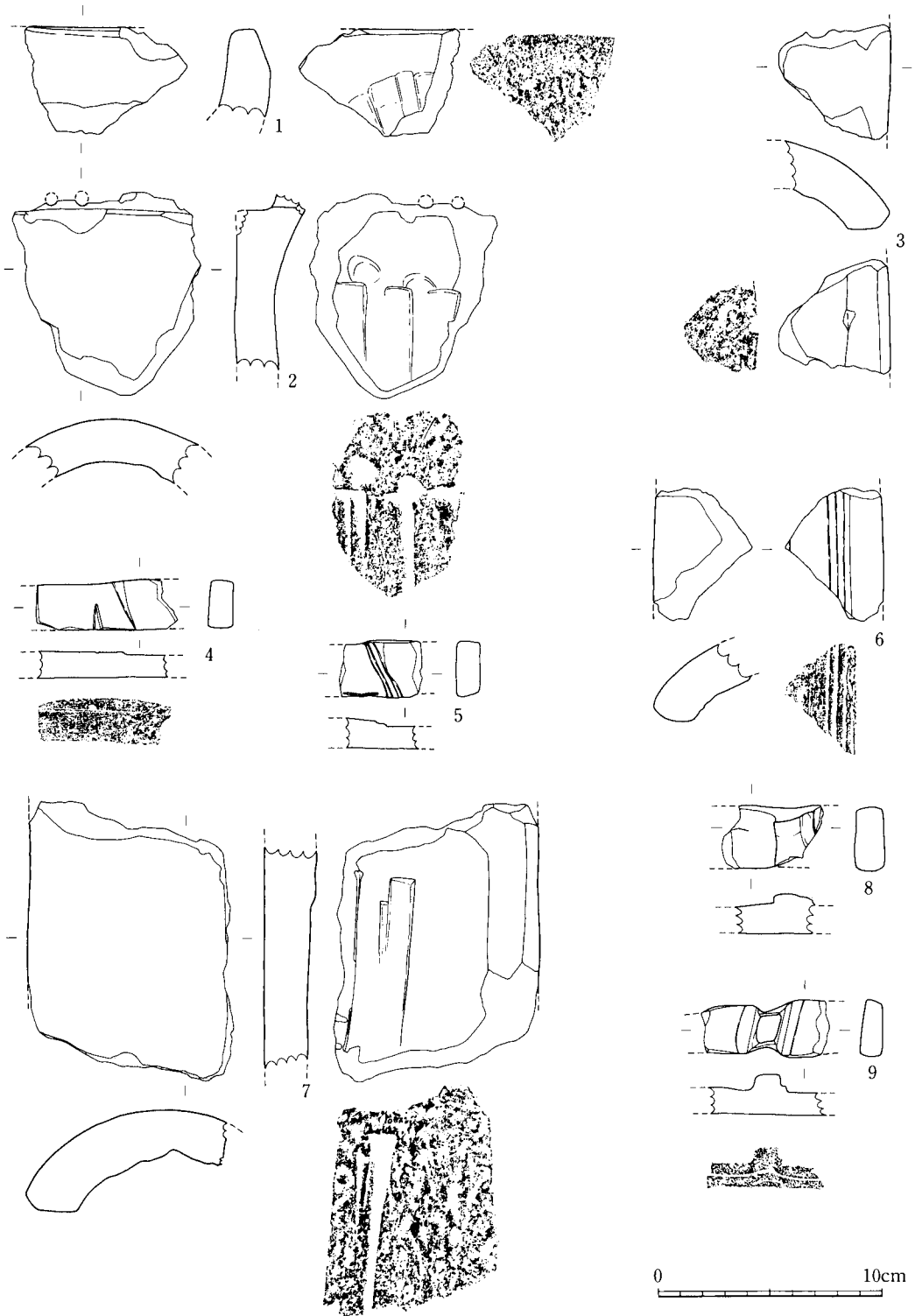


第13図 参道表採遺物

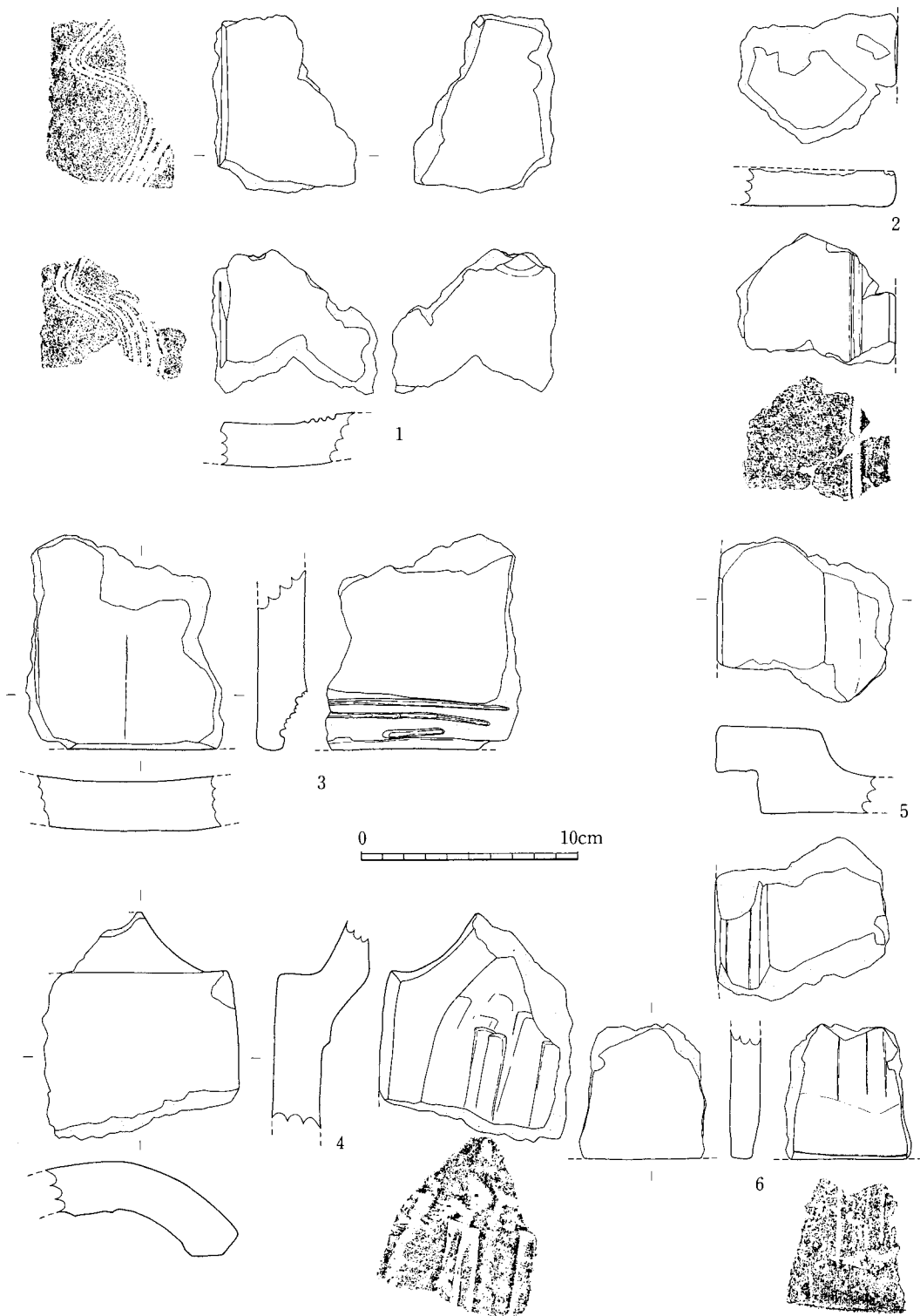
紀代のものであろう。25は土師器皿である。胎土に砂礫を多く含む。

第X区出土遺物（第12図）

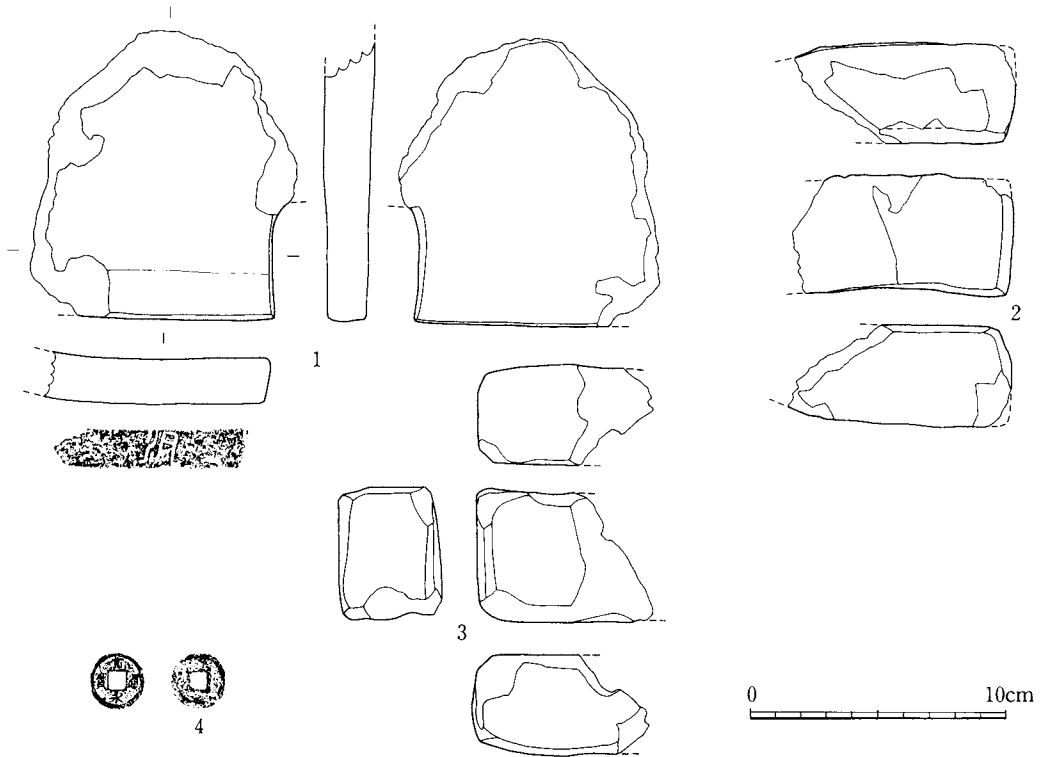
1から6は土師器皿である。時期はおおむね16世紀代に入るものであろう。ただし5は古代の無台碗の可能性もある。また6は15世紀代のものであろう。7・8は青磁の碗。口縁部外面には雷文が見られる。その時期は15世紀前半代であろうか。9は瀬戸美濃の瓶頸部破片である。10は白磁の皿。11は瀬戸美濃の天目碗の底部破片。12は珠洲焼の壺体部破片。13から17は珠洲焼である。13は甕の口縁部破片であり、その時期は14世紀代である。14は壺口縁部破片。15は壺の体部破片である。前述した第IX区でも同じ叩き目文様を持った破片が出土している。16は壺の体部破片。17は鉢口縁部破片。片口部がわずかに確認できる。時期は15世紀前半代であろうか。18は土師器の播鉢である。その胎土は土師器皿と非常に似通っており、おそらく近隣で製作されたものと考えられる。19は壺ないし甕の体部破片と考えられる。胎土をみると珠洲焼ではないと考えられる。わずかに外面に格子目文が見られる。



第14图 第IV·VI·VIII区出土瓦



第15图 第I·IV区出土瓦



第16図 第VI・VIII区出土瓦、第4区出土銭貨

参道表採遺物（第13図）

ちょうど93年度調査の部分に当たる。1は土師器皿。2・3・5は肥前磁器で、時期は18世紀後半であろう。4は紅皿。6は底部内面に永光寺の「永」の文字が見え、底部外面にはおそらく人名が書かれているものと思われる。注文生産によって在地で製作されたと考えられる。時期は19世紀代であろうか。7は磁器の蓋。8は肥前磁器の底部破片である。9は肥前磁器の瓶体部破片である。10は口縁部の形態から備前焼の播鉢と考えられる。

瓦（第14～16図）

第14図の1・2・3・6・7は丸瓦の破片である。4・5・8・9は道具瓦といわれるものである。出土地区は1・2が第IV区、3から8が第VI区、9が第VIII区である。

第15図の4・6は丸瓦である。1・2・3・5は平瓦である。出土地区は1が第I区、2から6が第IV区である。

第16図の1は平瓦、2・3は道具瓦である。4は寛永通寶。出土地区は1・2が第VI区、3が第VII区、4が第IV区である。1の平瓦には「洞」の刻印が押されている。

これら瓦はすべて赤瓦である。「洞」の刻印があることから見ても、注文生産品であると見られる。時期については現段階では不明である。

（柿田祐司）

第4章 1991年度の調査（第3次調査）

地区は90年度調査の地区割りを踏襲している。以下各地区ごとに遺構・遺物について述べることとする。

1 遺構

遺構はⅧ区とⅫ・Ⅼ区を除けば目立ったものは検出していない。そこでⅧ区とⅫ・Ⅼ区について述べることとする。

第Ⅷ・Ⅷ－1区の遺構（第18～20図、第22図）

ピット・土坑等を多数検出しているが、建物として復元できたのはSB01のみである。それは遺跡の末端部分を調査している関係上、その大部分が調査区外に伸びてしまうからである。また第Ⅷ－1区との境には石垣状の遺構がある。

SB01は2×2間分を検出しているが、実際は大部分が調査区外に伸びているものと考えられる。柱間は東西方向に約2.2m、南北方向に約1.9mである。この建物の時期は柱穴内から出土する遺物の年代から、14世紀後半段階には存在し15世紀の中頃以降には存在していなかったものと考えられる。

第Ⅻ・Ⅼ区の遺構（第21図）

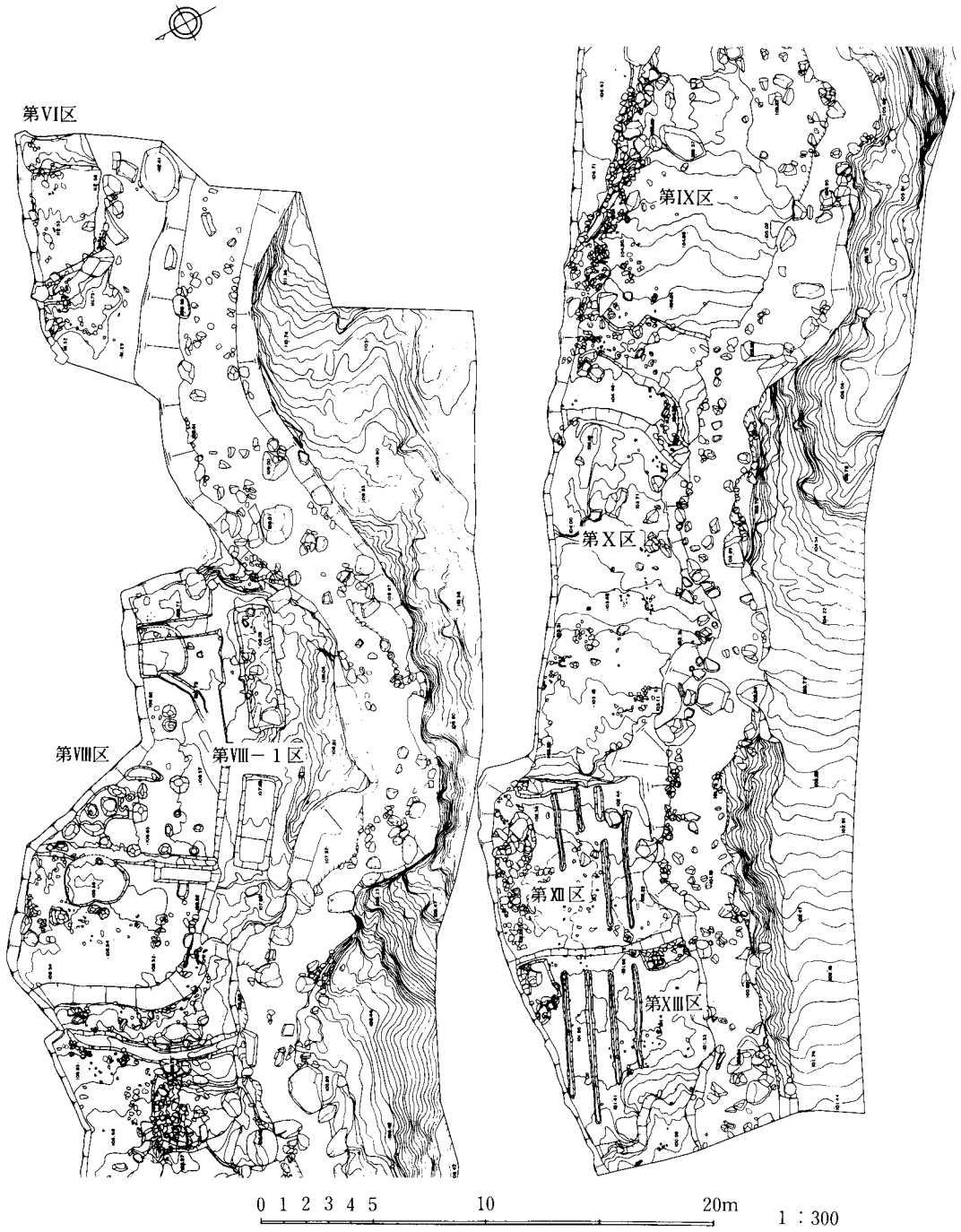
畑の畝溝と考えられる溝を両地区とも4条ずつ検出している。深さは約10cm程度と浅いものである。この畑については太平洋戦争中に耕作されていた可能性がある。

2 遺物

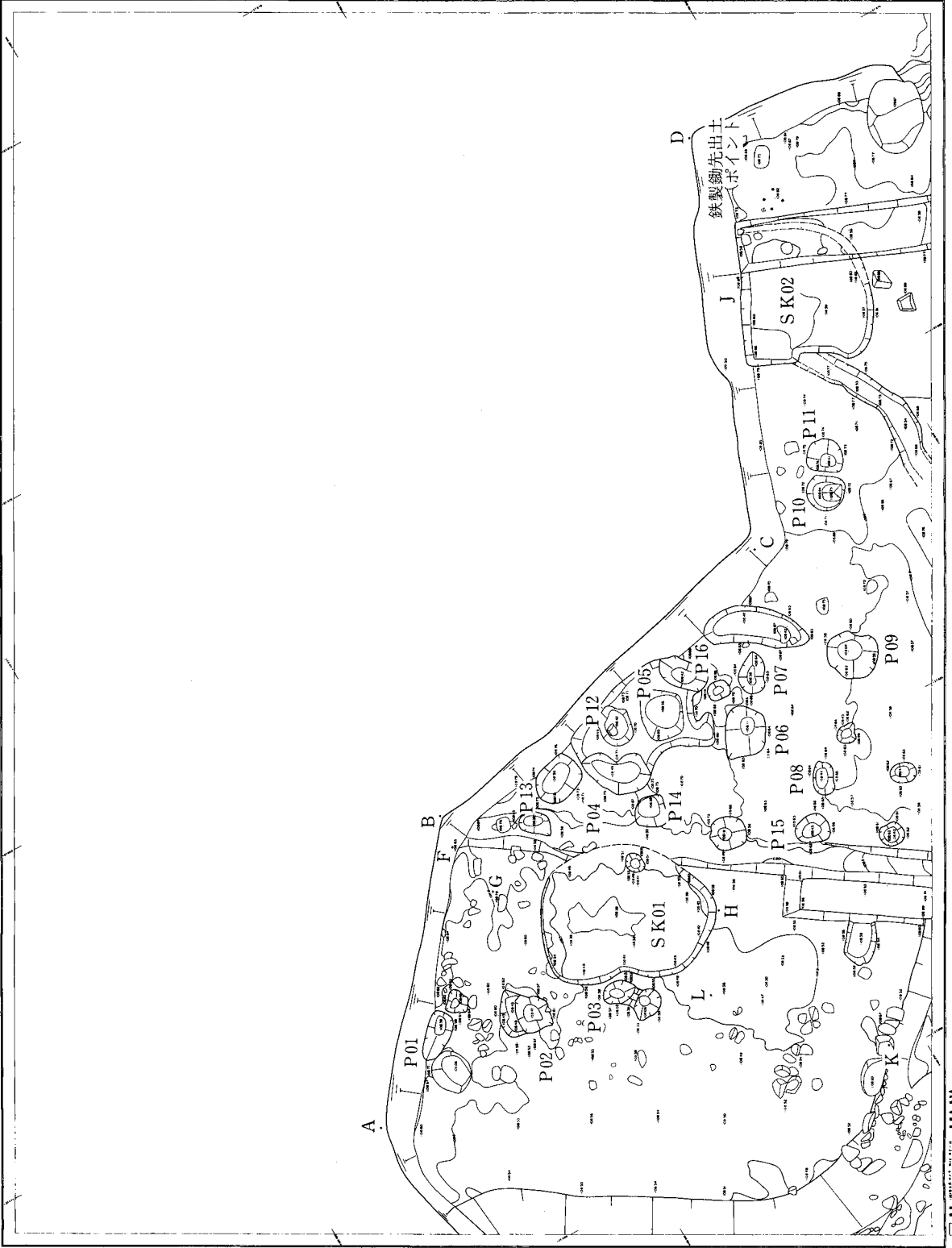
遺物の記述については、調査区ごとにある程度时期的なまとまりが認められるので、各調査区ごとに述べていくこととする。

第Ⅵ区出土遺物（第24図）

1から9は土師器皿。時期は1・2・4が14世紀前半代、3・6・5が14世紀後半から15世紀前半、9は16世紀代であろう。7・8については時期はよくわからないが14世紀末葉から15世紀代の可能性がある。10は青磁碗底部破片。時期は14・15世紀代であろう。11は青磁碗口縁部破片。幅の広い蓮弁が見られる。時期は15世紀代であろう。12は青磁の香炉。13から15は瀬戸美濃で13は皿、14は天目碗、15は香炉である。時期は13が14世紀末から15世紀代、14は大窯の時期のもので15世紀末から17世紀第1半期であろう。16は珠洲焼の壺口縁部破片。時期は15世紀後半であろう。17は珠洲焼の鉢で口唇部に波状文を入れる。時期は15世紀後半であろう。18は瓦質土器の風炉。時期は15世紀前半であろう。19は肥前磁器の皿。いわゆる蛇ノ目凹形高台といわれるもので、



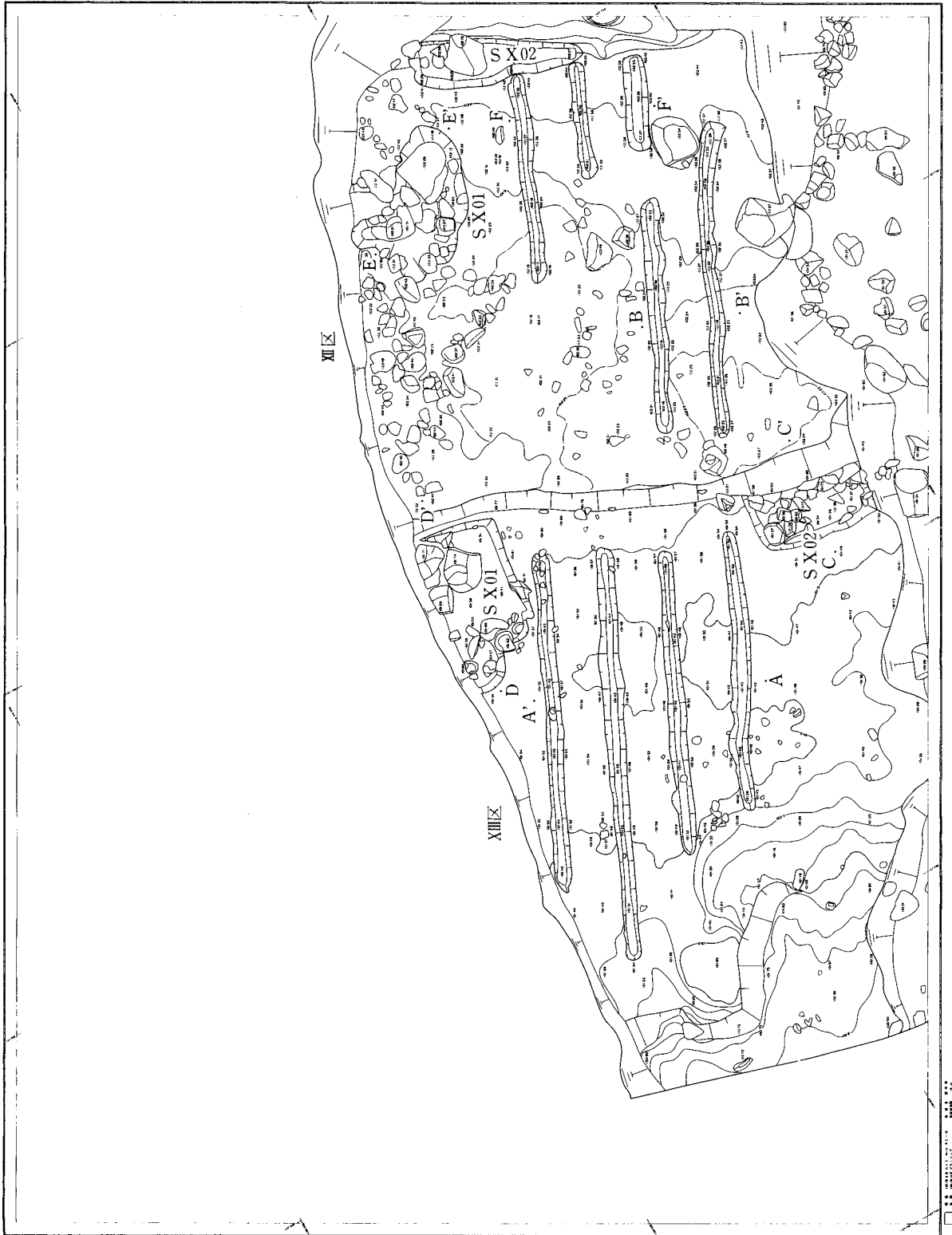
第17图 永光寺遺跡全体图 (1991年度)



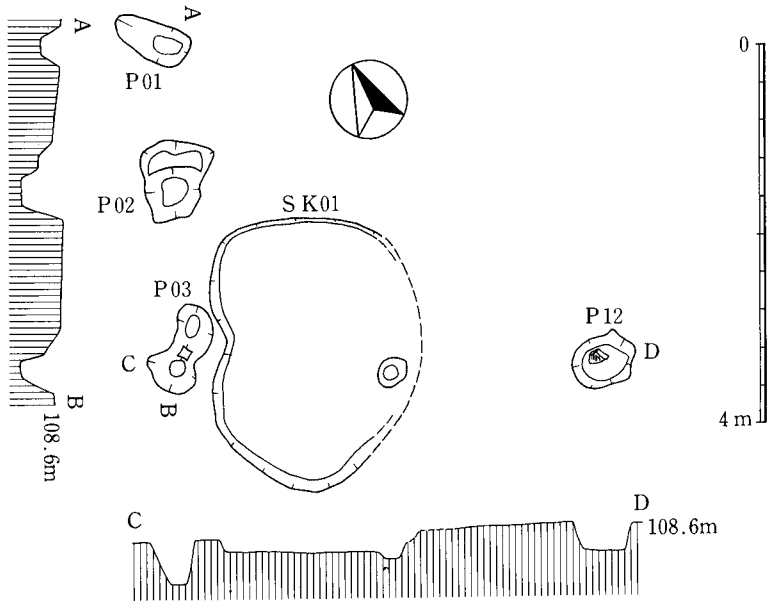
第18図 第VIII区平面図 (S = 1 / 100)



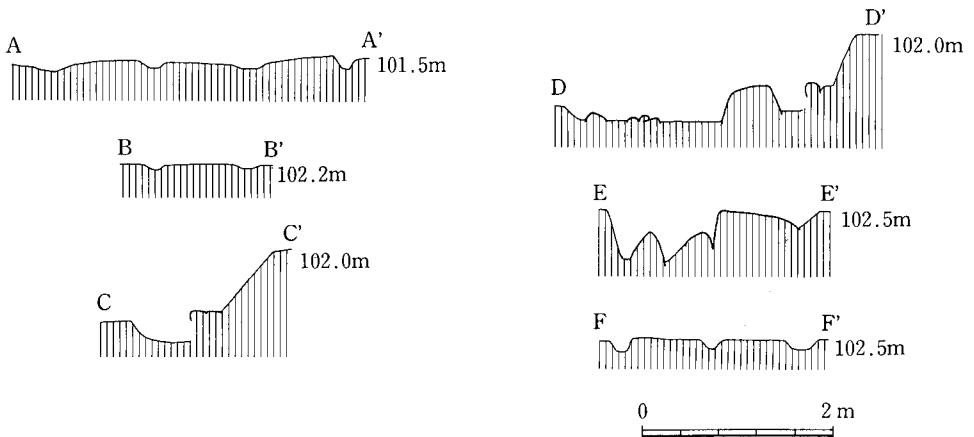
第19图 第VII-1区平面图 (S = 1 / 100)



第21图 XII·XIII区平面图 (S = 1 / 100)



第22図 第VIII区 S B 01平面図 (S = 1/80)

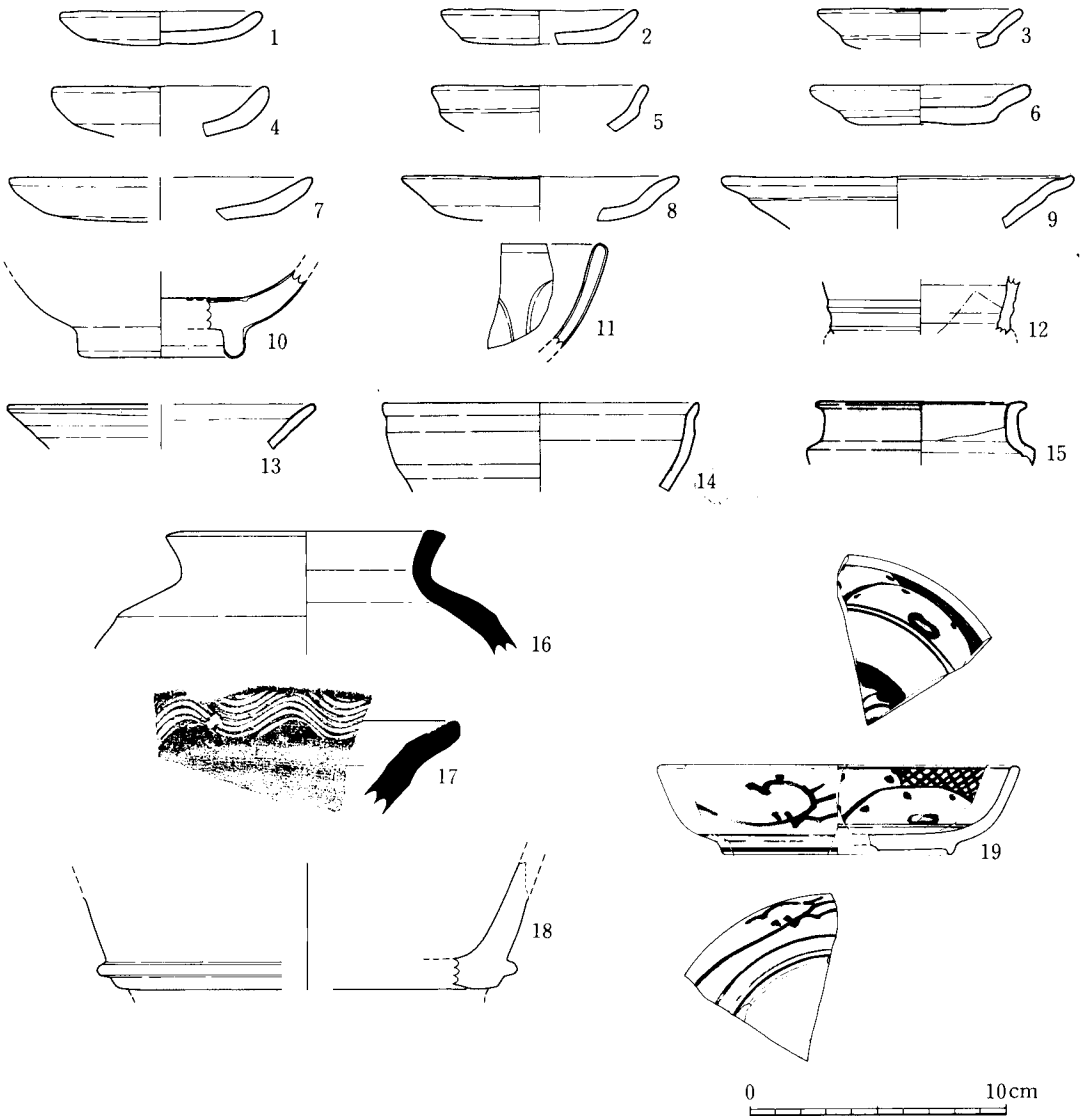


第23図 第VIII・XIII区エレベーション (S = 1/80)

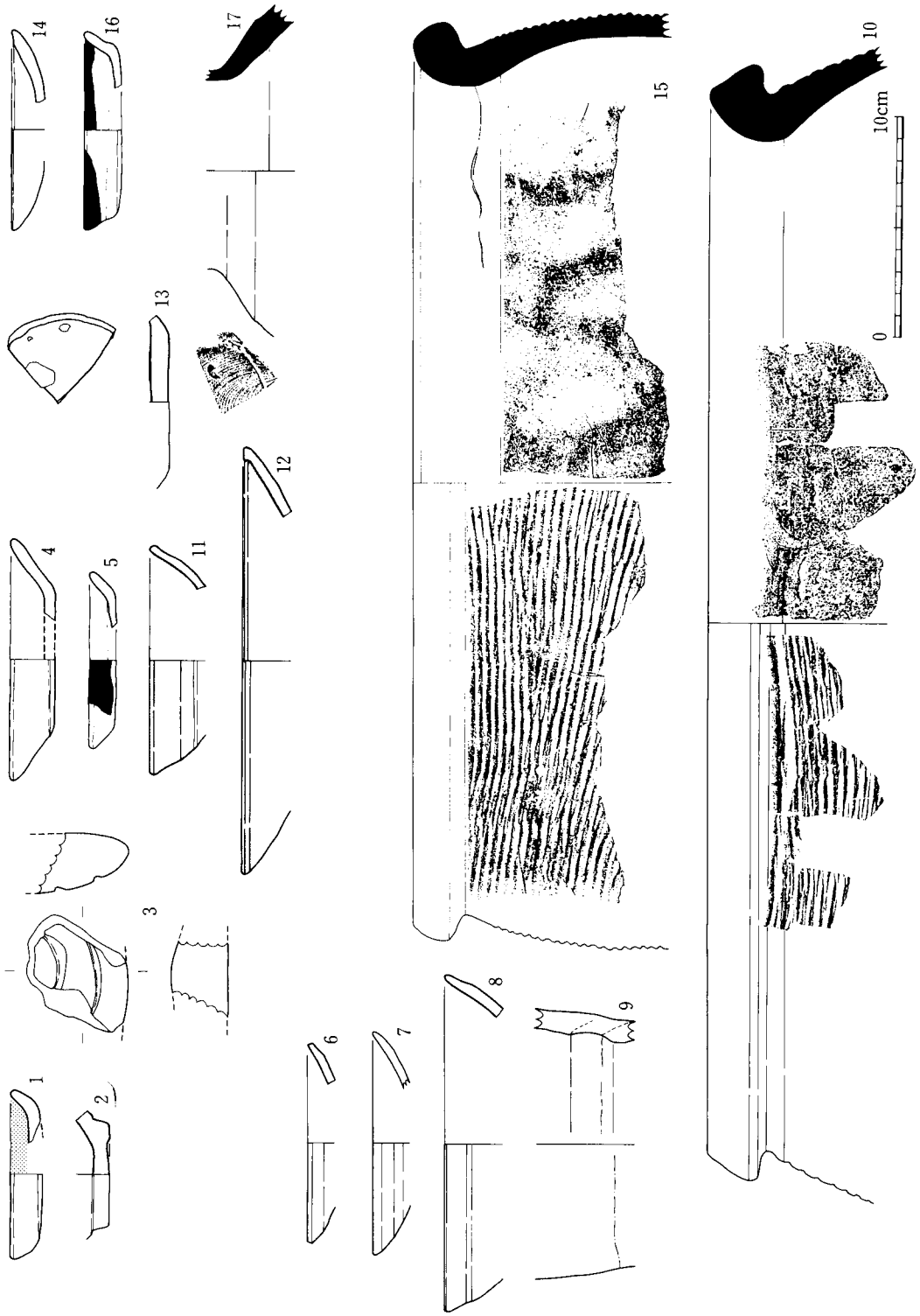
時期は18世紀後半であろう。

第Ⅷ区ピット内出土遺物（第25図）

1・2・3はP-01より出土している。1は土師器皿。2は天目碗の底部破片。高台外面は無釉であり、時期は古瀬戸後期のものである。3は鋳型の破片である。4は土師器皿でP-03より出土している。時期は14世紀末頃から15世紀の初め頃と考えられる。5は土師器皿でP-04より出土している。6から10はP-05より出土している。6・7は白磁の皿。時期は15世紀前半であろう。8は瀬戸美濃の平碗。9は瀬戸美濃の瓶か。10は珠洲焼の甕。時期は14世紀後半と考えられる。11・12は瀬戸美濃の皿で、P-06より出土している。ともに灰釉が施釉されている。時期



第24図 第Ⅵ区出土遺物

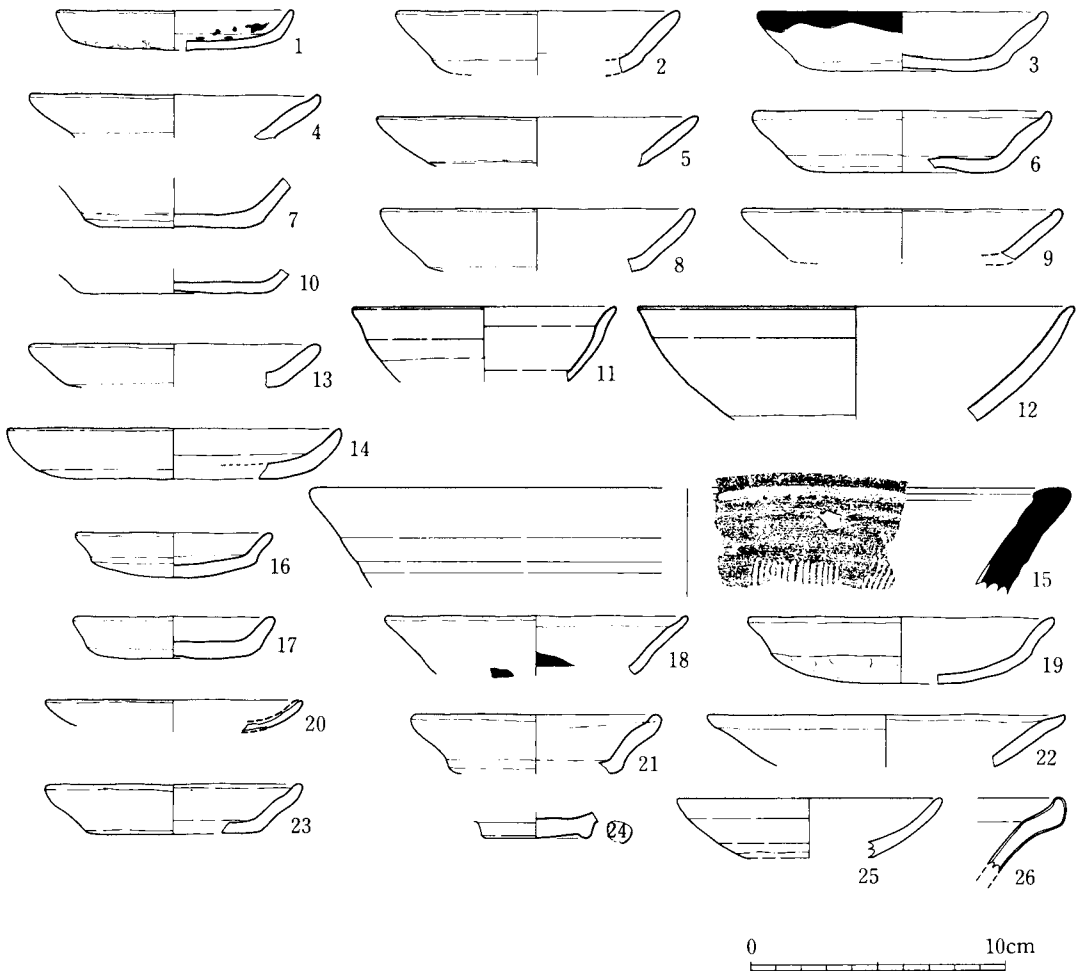


第25図 第VIII区ピット内出土遺物

は古瀬戸後期のものであろう。13は瀬戸美濃の灰釉皿でP-09より出土している。14は土師器皿でP-10より出土している。15世紀前半代のものか。15は珠洲焼の甕でP-12より出土している。時期は14世紀後半と考えられる。16は土師器皿で口縁部には灯明痕が確認できる。17は珠洲焼の壺肩部破片である。

第Ⅷ区土坑・SX01出土遺物（第26図）

1から12・15はSK01より出土している。1から10は土師器皿。時期は14世紀末頃から15世紀前半代であろう。15は珠洲焼の鉢である。その口縁部の形態とおろし目の入り具合から考えると、14世紀末葉頃から15世紀前半代と考えられる。13・14は土師器皿で、SK02より出土している。時期はSK01より出土した土師器皿よりは若干新しい可能性がある。16から22・24・26はSX01から出土している。SX01はⅧ区にみられた石垣の裏込部分を指している。16から22は土師器皿である。時期は22が16世紀代のもと考えられる他は、14世紀末頃から15世紀代と考えられよう。24は天目碗の高台部破片である。時期は大窯の時期で16世紀代か。26は青磁の盤である。23



第26図 第Ⅷ区土坑・SX01(石垣裏込め)出土遺物

・25は調査時に取り上げに混乱があったため出土した遺構は判然としないが、SK02からの出土である可能性がある。23は土師器皿で、時期は14世紀末から15世紀前半代、25は白磁の皿で割れ口の断面には漆継ぎの痕跡が見られ、時期は15世紀代であろう。

第Ⅷ区遺構検出面直上（第27図）

包含層のもっとも最下位より出土した遺物である。

1から9は土師器皿。時期は14世紀後半から15世紀前半代であろう。5には口縁部に灯明痕が確認できる。10・11は青磁の碗口縁部破片である。10は蓮弁の盛り上がりが見られ、時期は14世紀代のものであろう。12から22は瀬戸美濃である。12・15・21は天目碗である。時期は古瀬戸後期であろう。14・16・20は皿で灰釉が施釉されている。19は瓶類の底部と考えられ、全面に鉄釉が施釉されている。22は小杯で鉄釉が施釉されている。23から26は珠洲焼の鉢である。26には口唇部に波状文が入れられている。25・26は15世紀後半代で、23・24は14世紀末葉頃から15世紀前半と見られる。

第Ⅷ区東端トレンチ出土遺物（第28図）

1は青磁の盤である。2は瓦質土器の風炉で、時期は15世紀前半であろう。3から7は珠洲焼である。3は甕の肩部破片。5は甕の底部破片である。4・6・7は鉢で、7には口唇部に波状文が入れられている。これら珠洲焼の時期は15世紀代と考えられる。

第Ⅷ区包含層出土遺物（第29～33図）

包含層より出土した遺物は、調査時に調査区のほぼ中央に設定したトレンチ（E-F）より東側と西側で分けて取り上げている。ここではそれに従って述べていくこととする。

・西側出土遺物1（第29図）

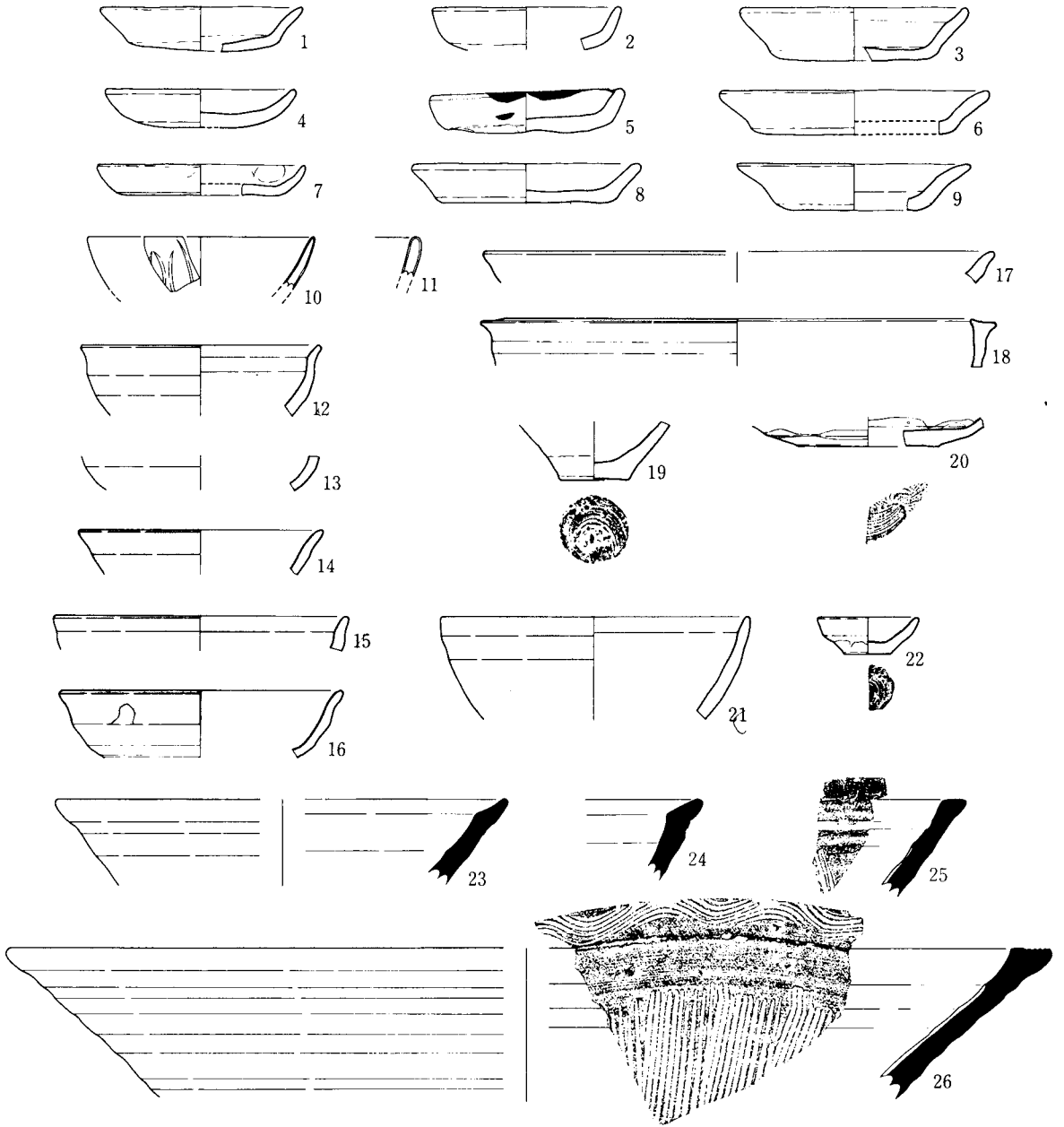
1から6は土師器皿である。時期は14世紀後半から15世紀前半段階であろう。7から13は白磁の皿である。13は15世紀前半であろう。14から19・27は青磁である。14・15・19・27は碗である。19は蓮弁が見え、14世紀代のものであろう。16から18は香炉であろう。20から22・28・29は瀬戸美濃である。21は天目碗で、時期は古瀬戸後期である。23から25は染付。26は白磁で口禿の碗である。30は珠洲焼で鉢口縁部破片である。時期は15世紀末葉頃と見られる。

・西側出土遺物2（第30図）

1から8は珠洲焼である。1は壺の口縁部から肩部にいたる破片で、肩部外面にはへら書きが見られる。口縁部形態などから、時期は13世紀代と見られる。2から8は鉢であり、8が底部破片の他はすべて口縁部の破片である。時期は14世紀後半から15世紀前半代におさまるものだろう。

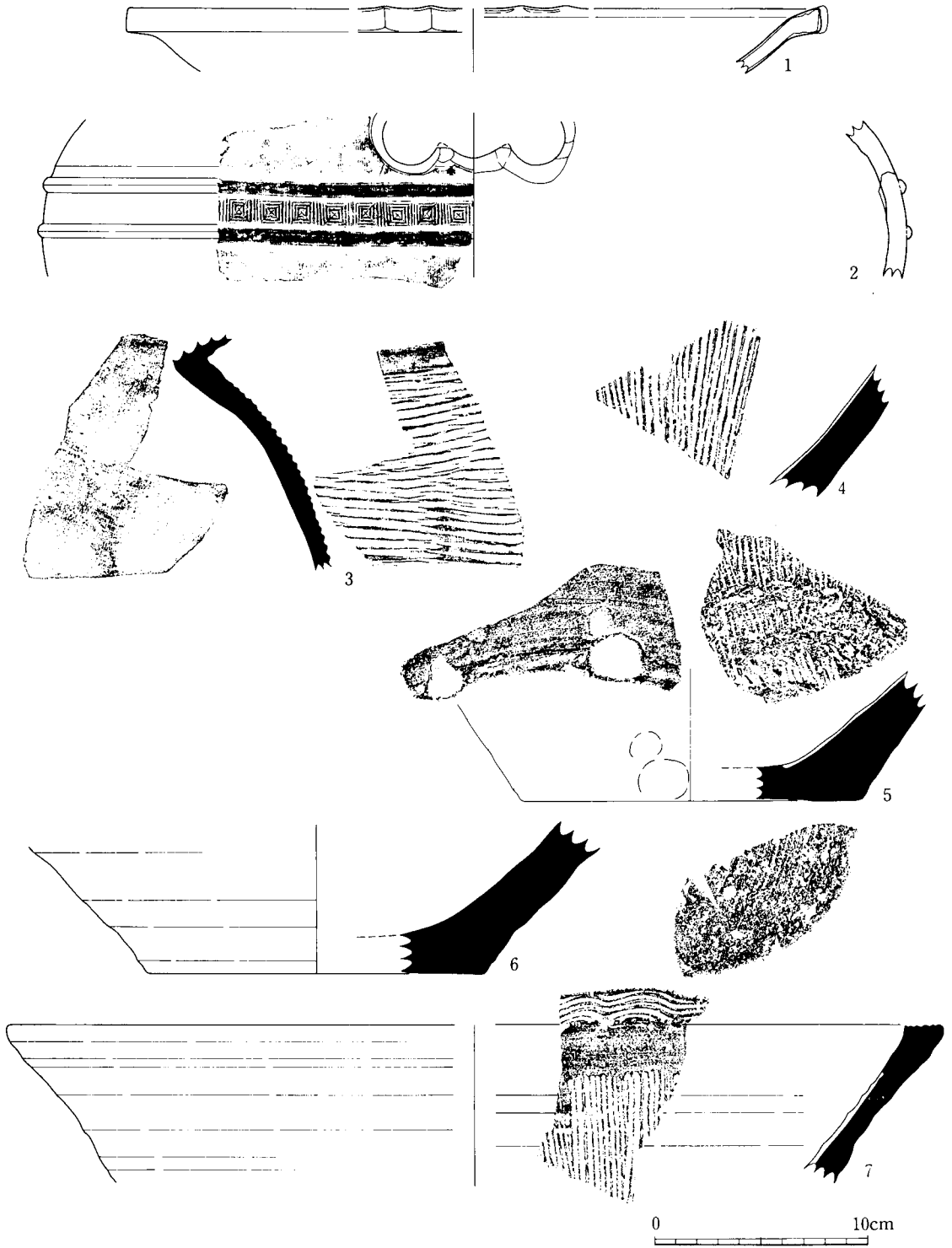
・東側出土遺物1（第31図）

1から18は土師器皿である。13・17・18が14世紀後半で、4・5はそれよりも新しいものであろう。19から24は白磁である。19は杯の口縁部破片である。21は皿の口縁部破片である。22は皿の高台部破片である。高台部外面には施釉されていない。これらの時期は15世紀代であろう。25

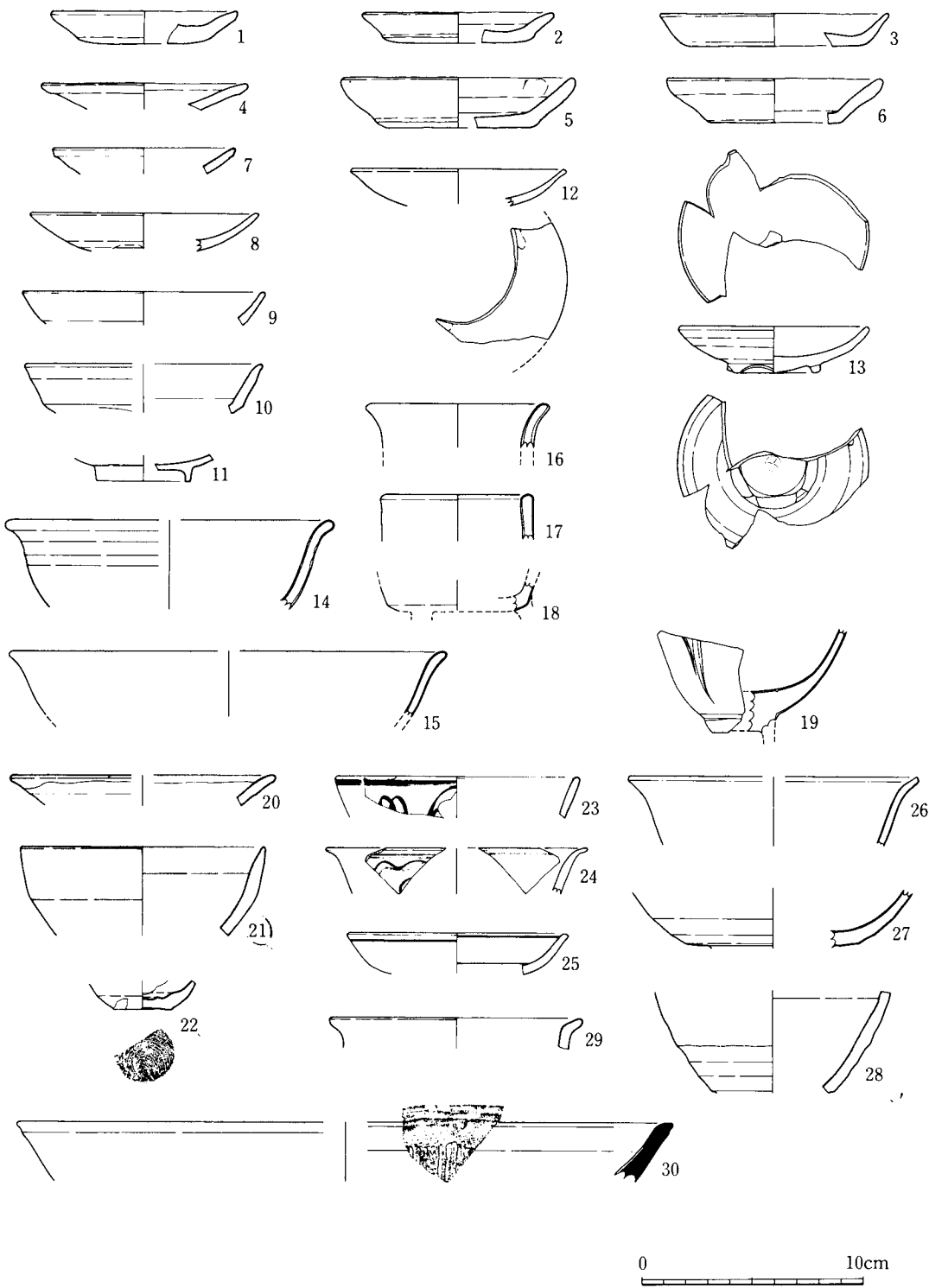


0 10cm

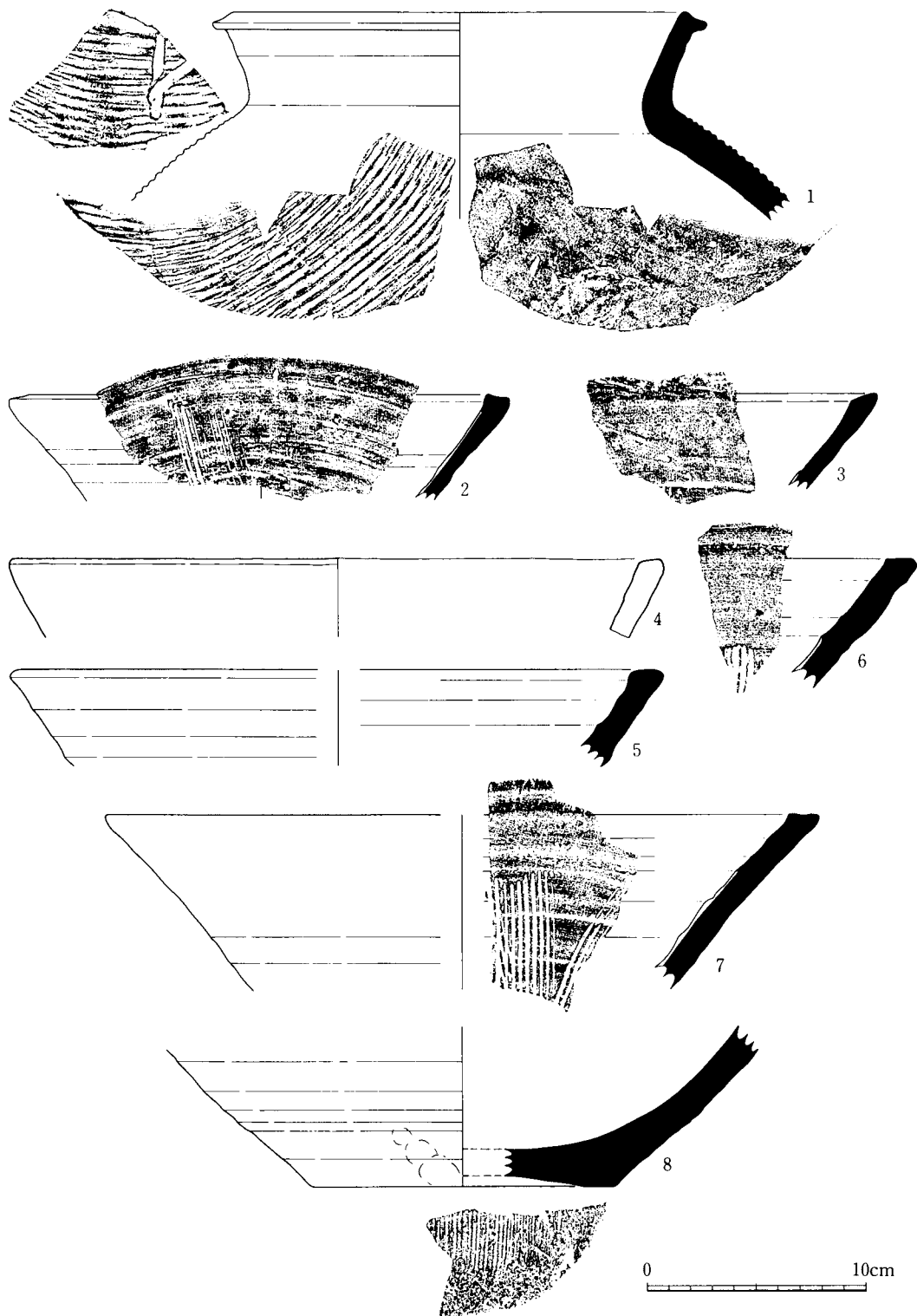
第27图 第八区包含层出土遗物



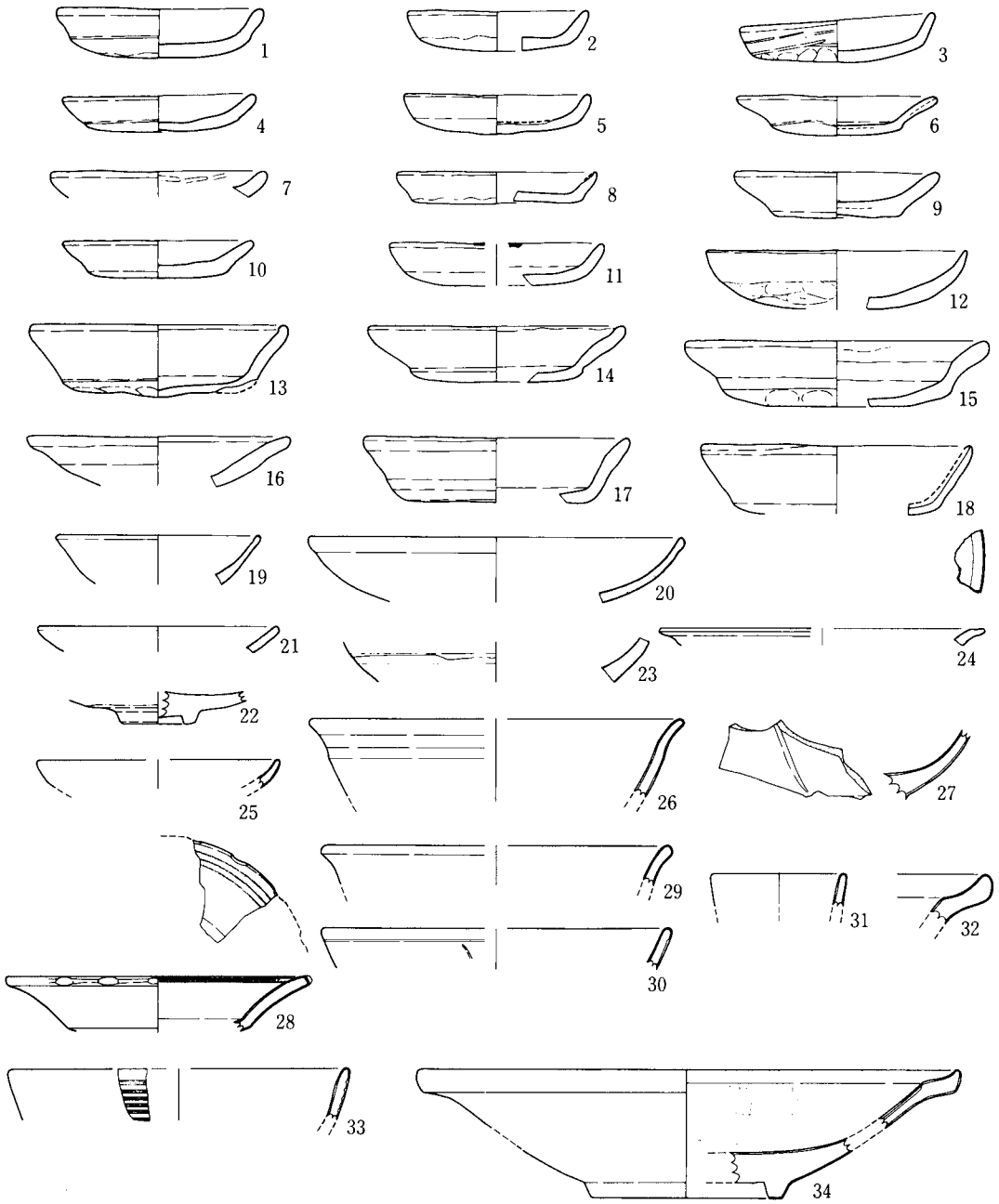
第28図 第VIII区東端トレンチ内出土遺物



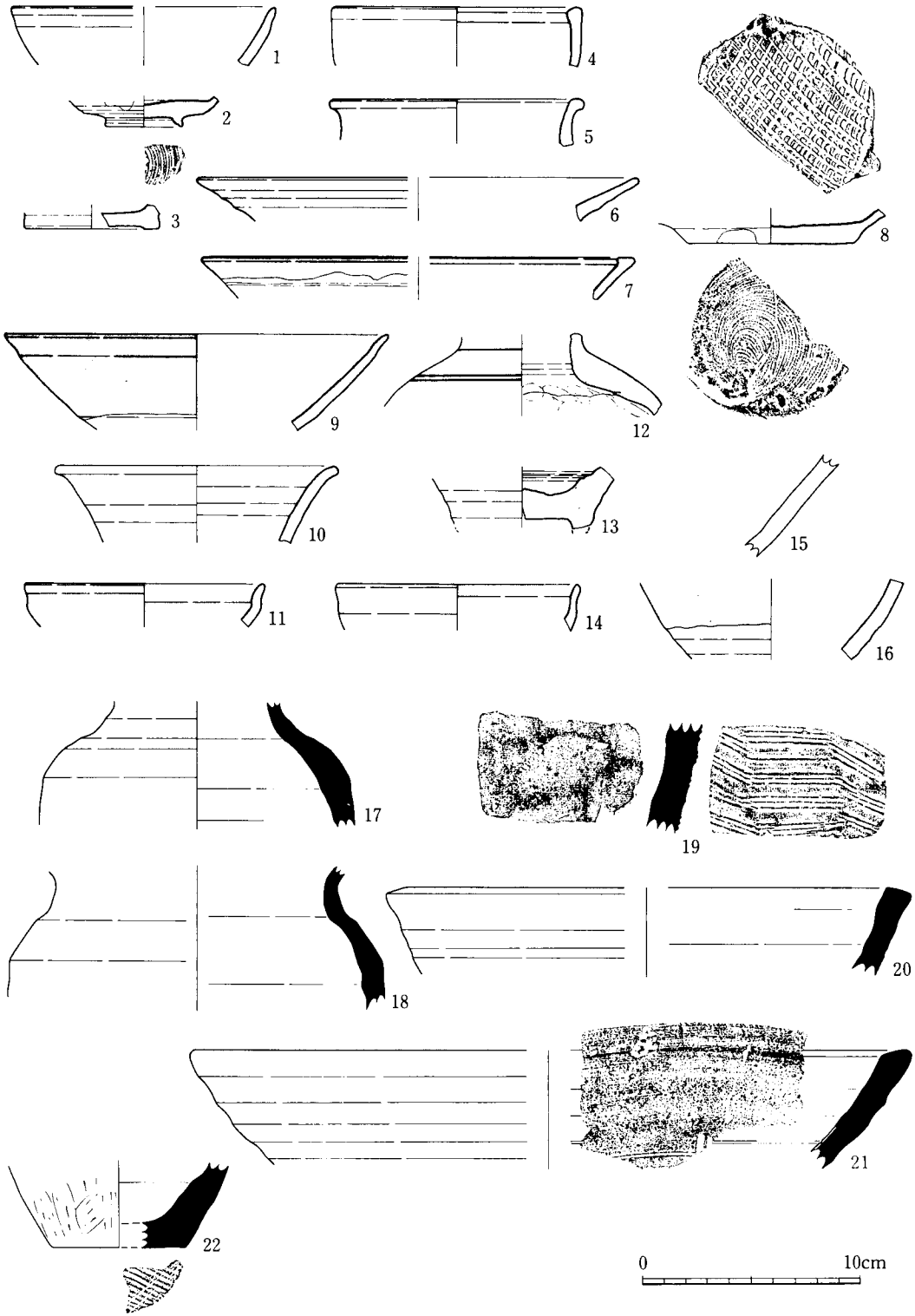
第29图 第VIII区包含層出土遺物



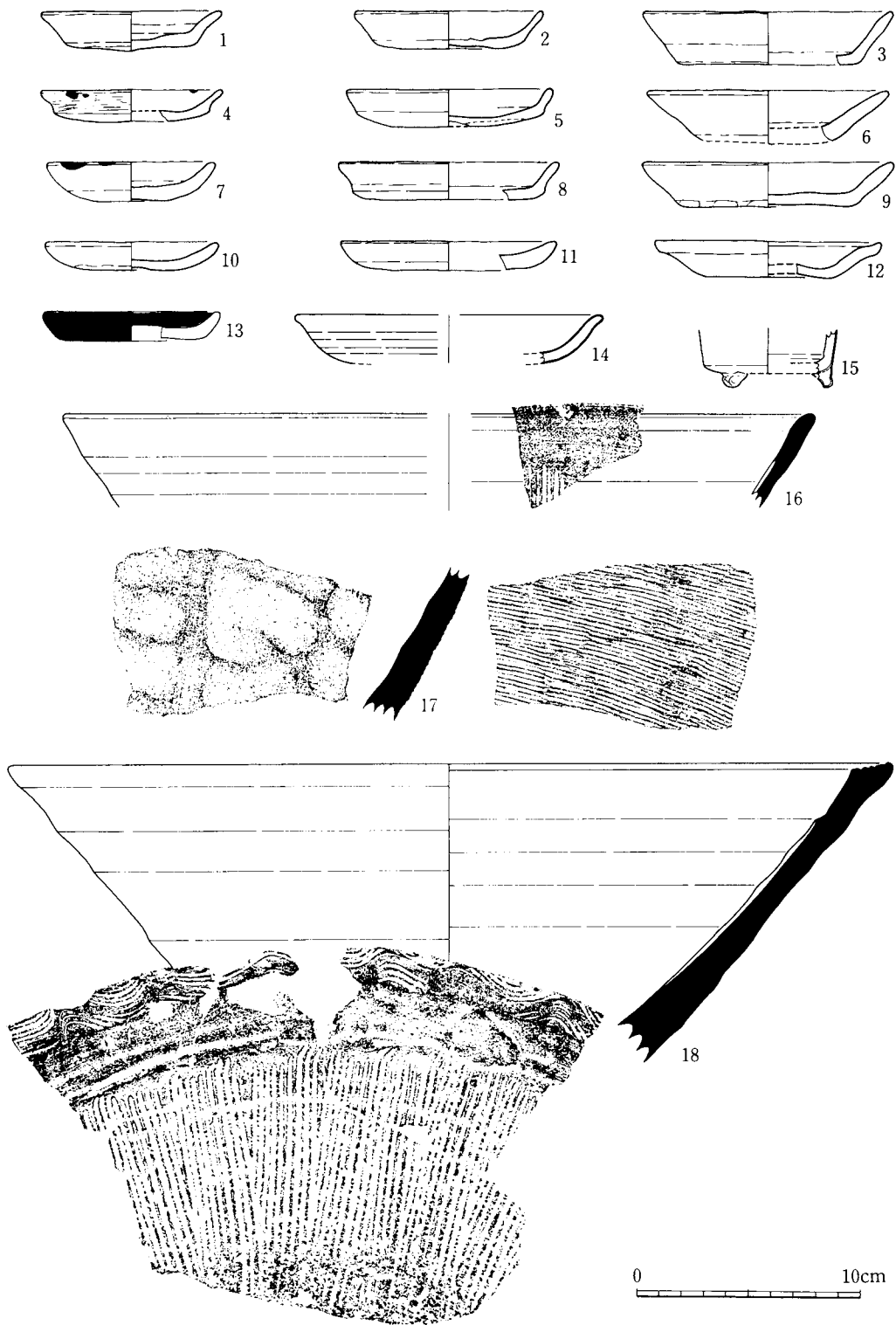
第30图 第八区包含层出土遗物



第31图 第VIII区包含層出土遺物



第32图 第八区包含层出土遗物



第33图 第八区包含層出土遺物

から34は青磁である。25から27・29・30・33は碗である。30は若干蓮弁が確認でき、時期は15世紀代であろう。33は口縁部外面に凹線をめぐらす。また割れ口の断面には漆継ぎの痕跡が確認できる。28は稜花皿である。時期は15世紀後半であろう。31は香炉であろう。32・34は盤で、時期は15世紀代であろう。

・東側出土遺物2（第32図）

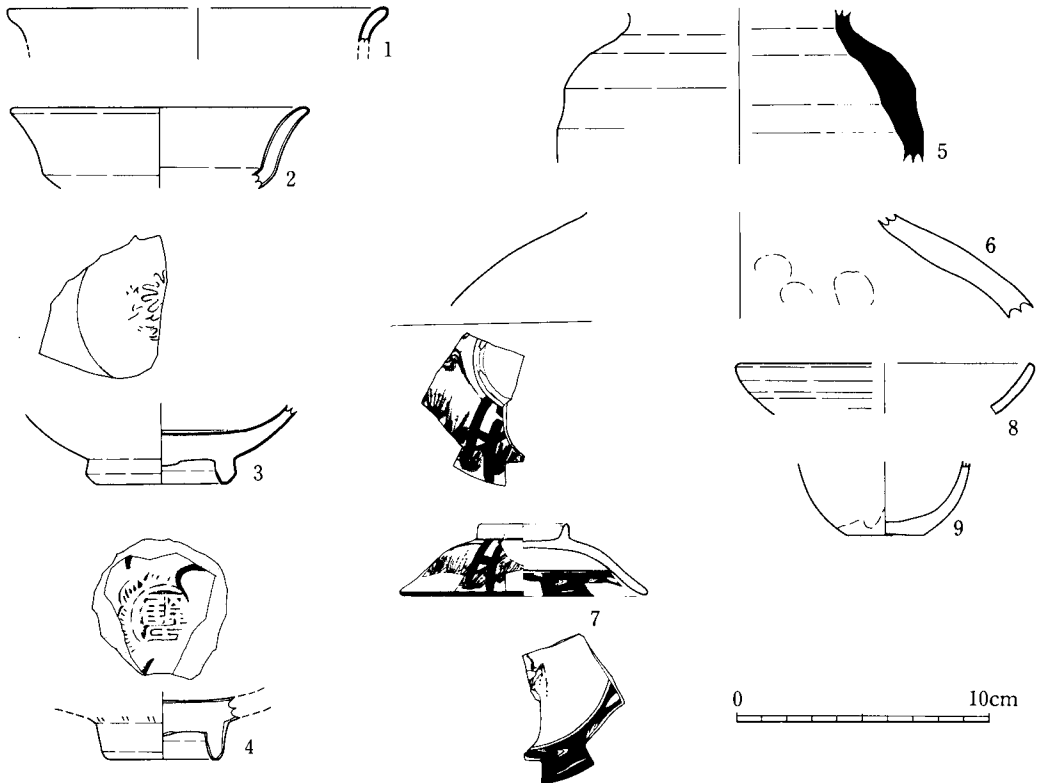
1から14・16は瀬戸美濃である。1から10・12・13には灰釉が施釉されている。11・14・16は鉄釉である。3は平碗の底部破片である。4・5は香炉であろう。6・9は平碗の口縁部破片である。7・8はおろし皿であろう。10は花瓶の口縁部破片、12は肩部破片、13は底部付近の破片である。11・14・16は天目碗である。16の時期は古瀬戸後期であろう。15は陶器でおそらく甕の体部破片であろう。産地は信楽であろうか。17から22は珠洲焼である。17・18は壺の肩部破片である。19は壺の体部破片で外面の特徴的な叩き目文様は、大島2号窯出土に同様の文様が見られる。また、90年度の調査でも同様のものが出土している。20・21は鉢口縁部破片である。時期は20が14世紀前半代、21は14世紀後半代であろうか。22は壺の底部破片であろう。

その他に鉄製の鋤先が完形で出土している。詳細については後述することとする。

・包含層出土遺物（第33図）

東・西に分けずに取り上げた遺物である。

1から13は土師器皿である。4・7には口縁部に灯明痕が見える。時期はおおむね14世紀後半から15世紀前半代であろう。ただし、12は16世紀代のもと思われる。14は青磁碗の口縁部破片



第34図 第VIII区出土遺物

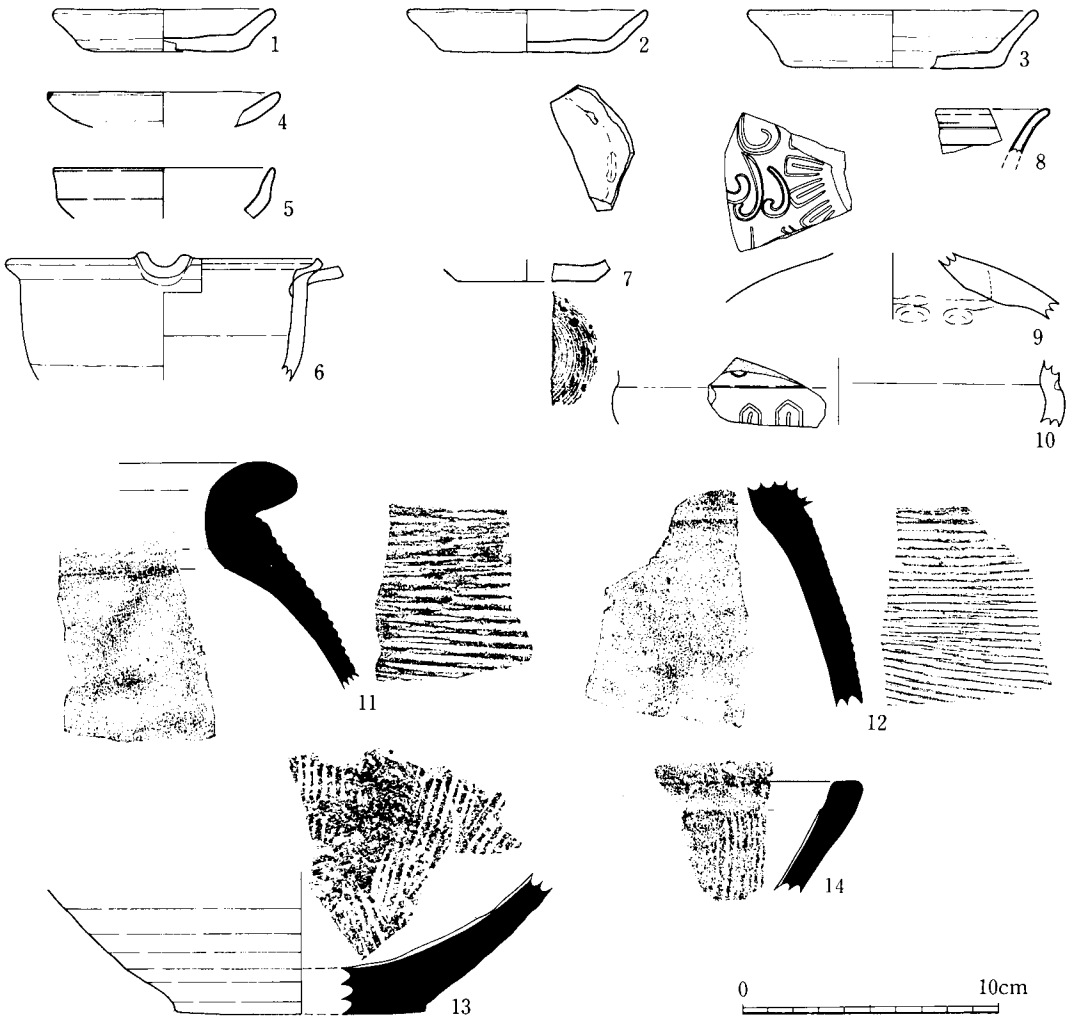
である。15は青磁の香炉である。16から18は珠洲焼である。16・18は鉢の口縁部破片であり、18の口唇部には波状文が入っている。時期は15世紀前半代であろう。17は壺の体部破片であろう。

第Ⅷ区出土遺物（第34図）

1から6は石垣部分から出土している。7から9はⅧ-1区よりの出土である。1から4は青磁の碗である。3・4の時期は15世紀後半であろう。5は珠洲焼の壺肩部破片である。6は陶器の壺肩部破片である。産地は信楽であろうか。7は磁器の蓋である。時期は19世紀前半代であろう。8は白磁の皿口縁部破片である。時期は15世紀代であろう。9は陶器である。器種は茶入れであろうか。

第Ⅸ区出土遺物（第35図）

石垣の崩土中より出土している。1から4は土師器皿。時期は15世紀前半代のものか。5は瀬

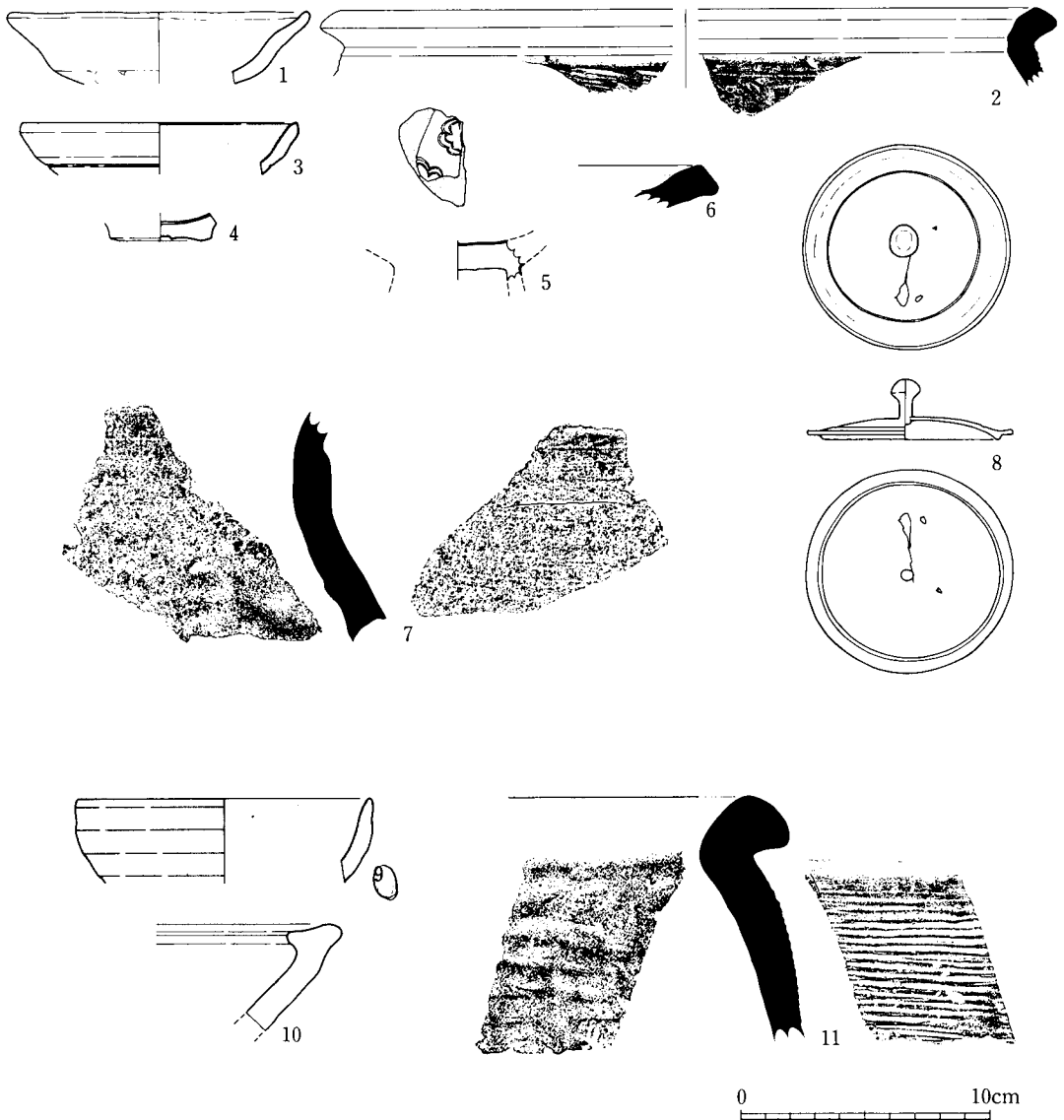


第35図 第Ⅸ区出土遺物

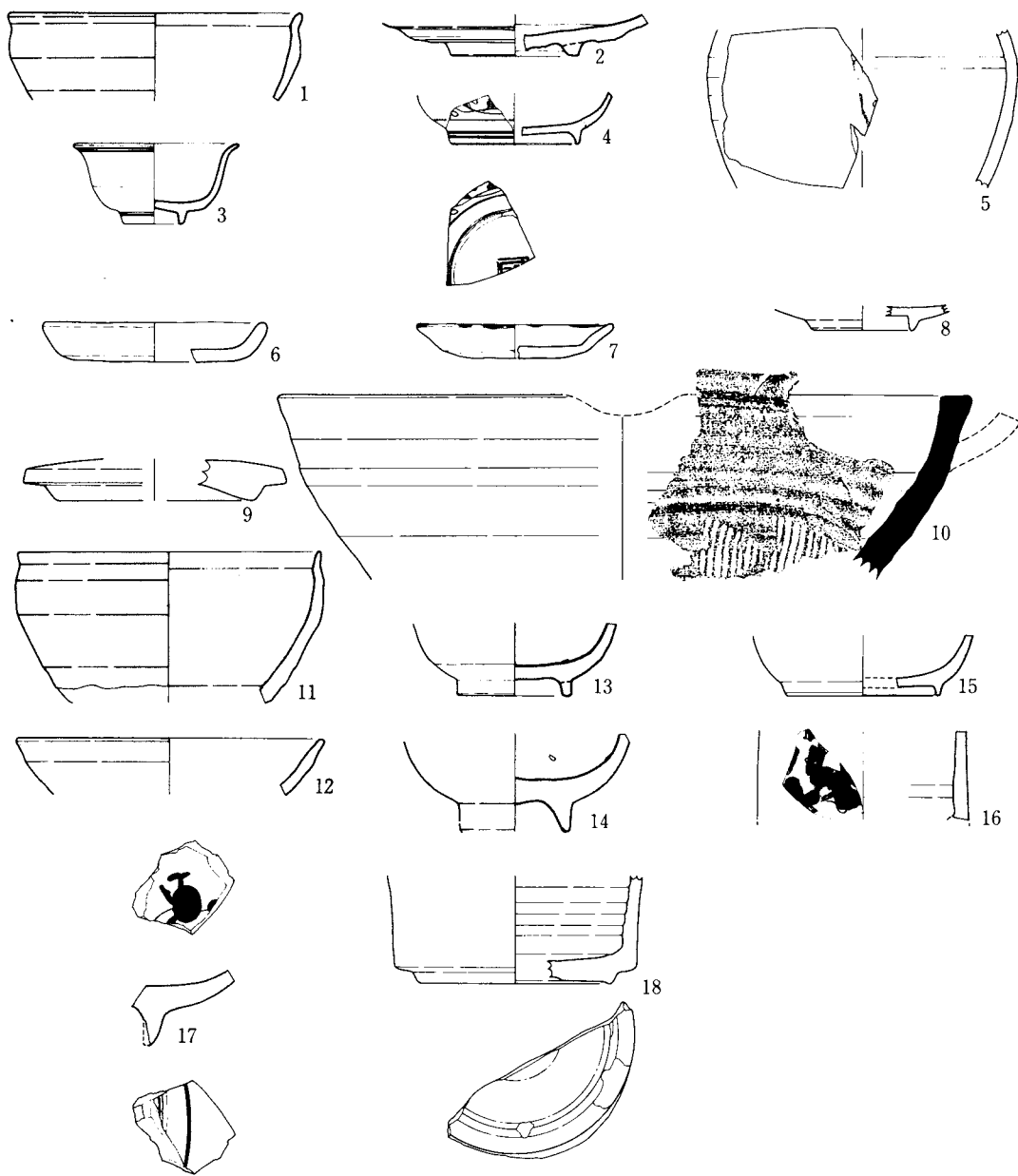
戸美濃の天目碗の口縁部破片である。熱を受けたらしく、釉が発砲している。6は柄付片口である。おそらく瀬戸美濃であろう。7は瀬戸美濃の灰釉皿である。8は青磁の碗口縁部破片である。9は瀬戸美濃の瓶子肩部破片である。10は瀬戸美濃で瓶類であろう。11から14は珠洲焼である。11は甕口縁部破片である。時期は14世紀後半代であろう。12は甕の体部上半部の破片である。13は鉢底部破片である。14は鉢口縁部破片である。時期は15世紀前半代であろう。

第X区出土遺物（第36図）

すべて包含層よりの出土である。1は土師器皿である。時期は14世紀後半か。2は珠洲焼の甕口縁部破片である。時期は14世紀代のものであろう。3は瀬戸美濃であり、器種は托になろうか。



第36図 第X区出土遺物

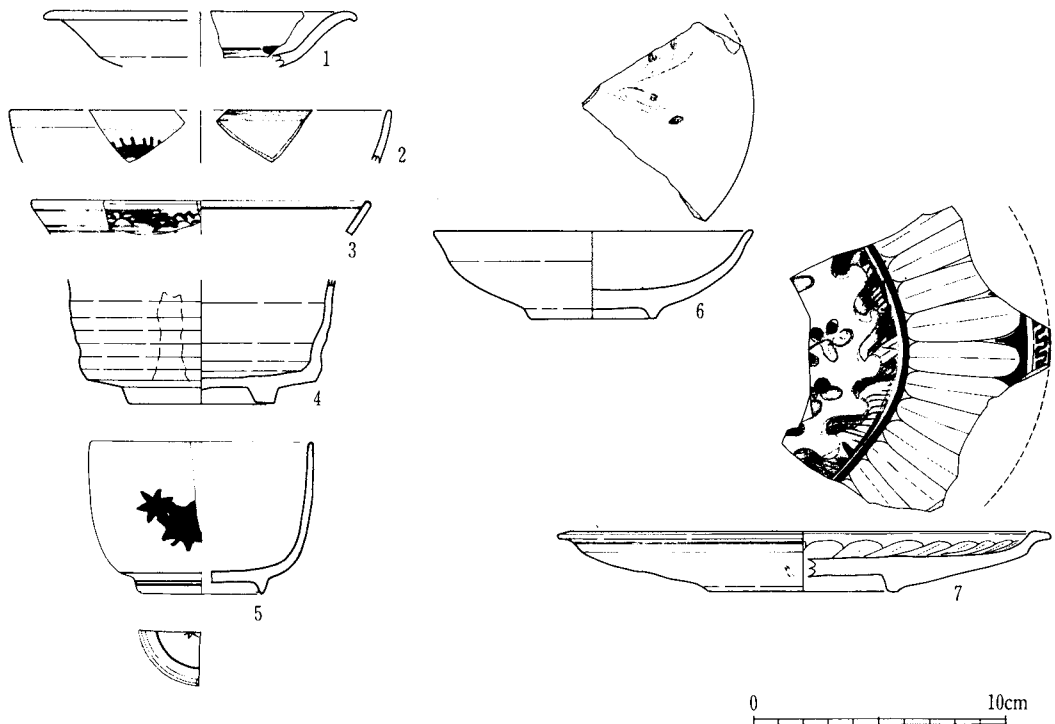


第37图 第Ⅱ区出土遺物

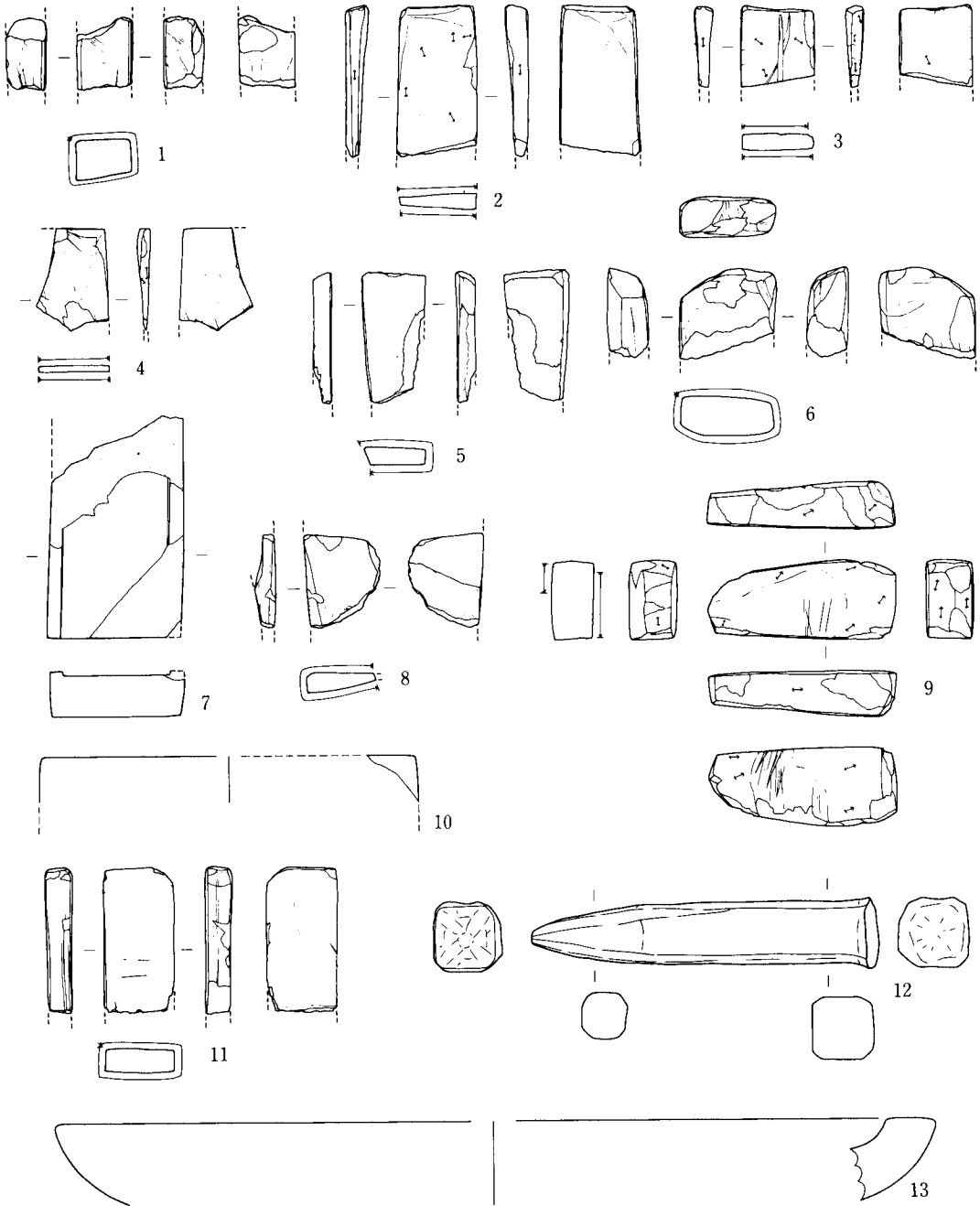
4は天目碗の底部破片である。底部外面は無釉である。時期は古瀬戸後期であろう。5は青磁碗の底部破片である。6は珠洲焼の甕口縁部破片である。7は陶器の甕の頸部破片である。8は経筒の蓋である。9は天目碗の口縁部破片である。時期は古瀬戸後期であろう。10は肥前陶器の鉢口縁部破片である。時期は17世紀前半であろう。11は珠洲焼の甕口縁部破片である。時期は14世紀後半であろう。

第Ⅶ区出土遺物（第37図）

1から5はSX01からの出土で、その他はすべて包含層よりの出土である。1は天目碗である。時期は大窯の時期である。2は肥前陶器の皿である。時期は17世紀前半のものか。3は磁器の小杯である。時期は16世紀後半から17世紀初頭のものか。4は肥前磁器の碗である。底部外面には裏銘があり、おそらく「福」であろう。5は肥前陶器の瓶であろう。6・7は土師器皿である。8は白磁の底部破片であり、その時期は17世紀であろう。9は瓦質土器である。おそらくは火消し壺の蓋になるであろう。10は珠洲焼の鉢である。時期は14世紀前半代のものであろう。11・12は天目碗である。11の時期は大窯の時期である。13は肥前陶器で、いわゆる呉器手碗である。時期は17世紀後半であろう。14は体部下半から底部外面にかけて鉄錆釉が施されているものである。おそらくこれも肥前陶器の碗と思われる。時期は17世紀後半から18世紀前半であろう。15は肥前磁器の碗。時期は17世紀後半から18世紀初頭であろう。16は肥前磁器で、灰吹きであろう。17は肥前磁器で大皿、あるいは鉢であろう。時期は18世紀前半であろう。18は陶器で、火入れと



第38図 第Ⅶ区出土遺物

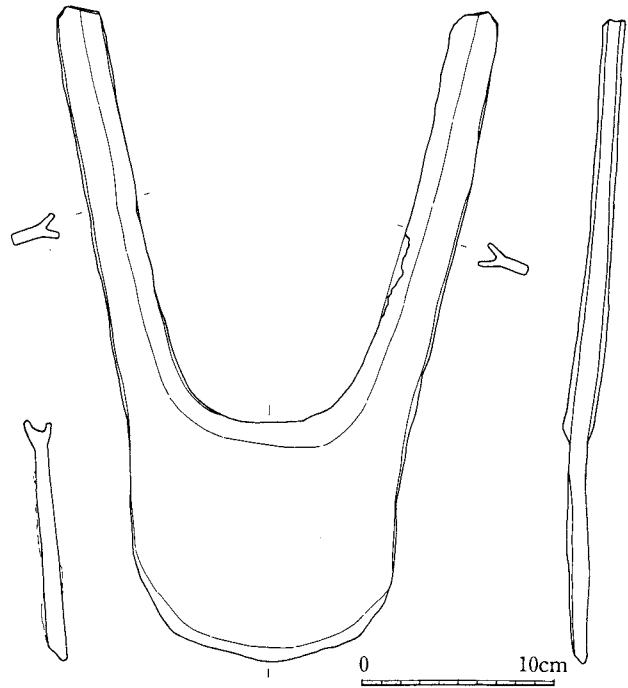


第39図 石製品・金属製品

思われる。在地産の可能性が
ろう。

第Ⅷ区出土遺物 (第38図)

1・4・7がSX01より出土している他はすべて包含層よりの出土である。1は肥前陶器の皿である。時期は16世紀末葉から17世紀前半であろう。2・3は染付である。3には割れ口に漆継ぎの痕跡が確認できる。4は内面無釉で外面に透明釉が施釉されている。火入れであろう。5は肥前磁器の碗である。体部外面には割合整ったコンニャク印判が見られる。底部外面には裏銘がわずかながらに確認できる。時期は18世紀前半であろう。6は肥前磁器でいわゆる初期伊万里の皿で、時期は17世紀前半であろう。7も同じく初期伊万里の皿で、時期は17世紀前半であろう。



第40図 第Ⅷ区出土鉄製鋤先実測図

石製品・金属製品 (第39図)

1はⅥ区包含層、2から6・8はⅧ区包含層、7はⅧ区SX01、9・12・13はⅨ区包含層、11はⅩ区SX01よりの出土である。10については出土位置不明である。石製品のうちそのほとんどが砥石だが、7は硯で13は茶臼である。12は鑿である。出土位置はⅨ区の石垣の真下から出土している。石垣の石を加工するときに使ったものと見られる。

末筆になりましたが遺物の年代等については、岩瀬由美氏、滝川重徳氏、藤田邦雄氏の各氏に多大なご教示を得ていることを記して感謝の意にかえさせていただきます。(柿田祐司)

[引用・参考文献]

- 今井 淳一 1988 『永光寺遺跡』 羽咋市教育委員会
垣内光次郎 1984 『普正寺遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
滝川 重徳 1995 「谷内ブンガヤチ遺跡出土の中近世陶磁器類について」『谷内・杉谷遺跡群』
石川県立埋蔵文化財センター

森田 勉・上田秀夫・小野正敏他 1984 「14～16世紀の日本出土貿易陶磁の編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

吉岡 康暢 1992 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

鉄製鋤先（第40図）

Ⅷ区の地山に掘り込まれた土坑から、全長34.3cmの鉄製鋤先が出土している。幅23.3cmにU字形に開く風呂の部分と、幅が13.3cmで長さが12.5cmの刃部で構成される。風呂の幅は2.7cmで、厚さは0.6cm前後である。風呂の受け部分は、0.8cm前後の幅で開いており、刃部の上にある風呂では幅が1cmになっている。刃部の厚さは約1cmで、先端から約0.8cmの部分が刃になっている。全体の重量は、900gを計る。

県内で同種の鋤先の出土例は、野々市町に集中している。押野タチナカ遺跡（14世紀）・長池キタハシ遺跡（15世紀）で各1点、清金アガトウ遺跡（13世紀）で2点の計4点が出土している。清金アガトウ遺跡では、土坑に多量の土師皿・椀と一緒に埋められた状態で出土している。今回報告する永光寺遺跡の事例も土坑に埋められた状態で出土しており、この二例は地鎮のような宗教的な目的で埋納された可能性がある。（小嶋）

第5章 1992年度の調査（第4次調査）

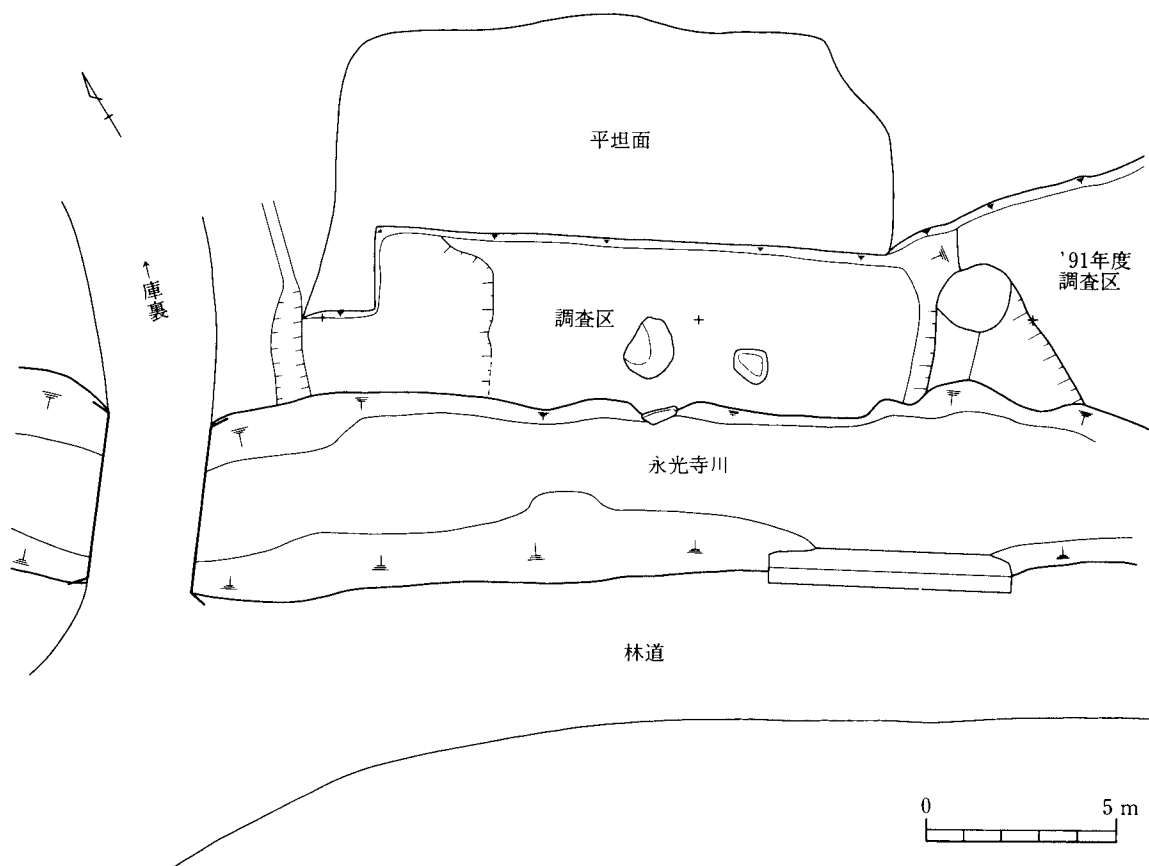
第1節 調査の概要

本年度調査区は、永光寺川右岸に位置し、前年度調査区の南西端に接する。南北約5m、東西約17mの小面積であるため、作業は全て人力にて行った。

調査の結果、明確な包含層は確認されず、淡黄色の地山の上面に、耕作土とみられる褐色系の土層の堆積が認められた。調査区西端付近では礫群を検出し、それらを採り上げたところ、落ち込みを検出した。また、調査区中央付近で畦畔状の高まりを確認した。遺物は落ち込みを中心に、14～18世紀にわたる土器、陶磁器類が整理箱に1箱出土したのみである。それらは細片が多く、周辺からの流れ込みと判断された。

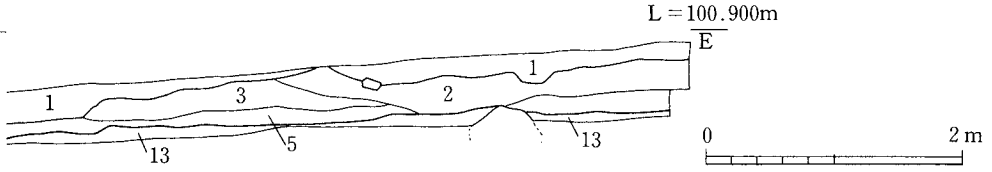
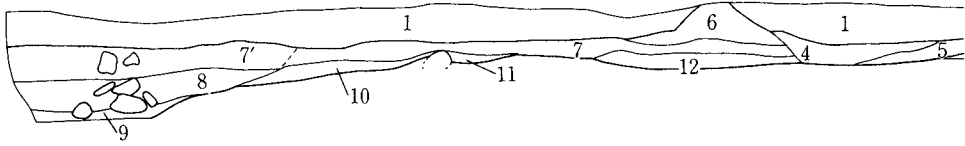
調査区割りは行っていないが、調査区東西端に設置されていた工事杭を結んだ線を基準ラインとし、実測等を行った。

また、調査の合間に、永光寺の中で歴史的に重要な遺構として知られる、利生塔跡周辺の清掃及び実測を行った。



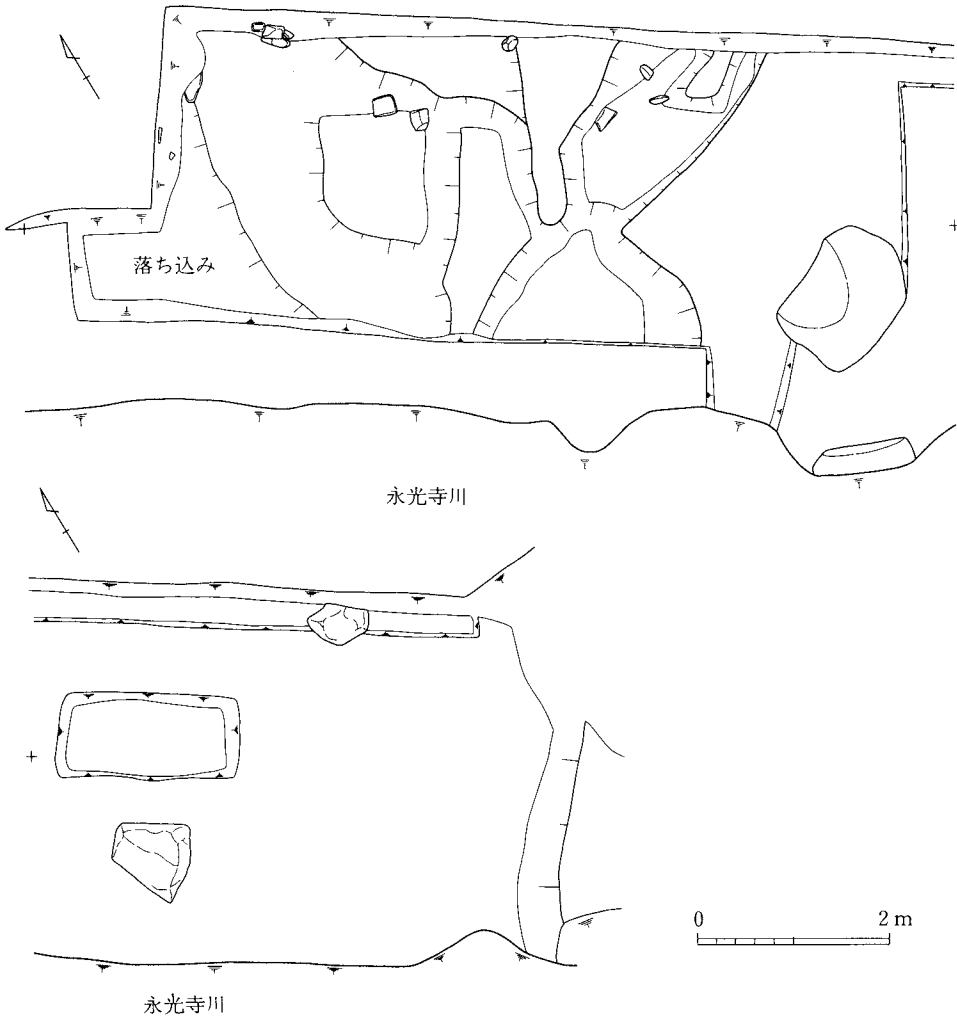
第41図 1992年度調査区の全体図 (S = 1 / 200)

L = 100.900m
W



- | | | |
|------------------|----------------|--------------|
| 1. 濁灰黄褐色砂質土 | 7. 暗茶褐色砂質土 | 10. 暗灰褐色砂質土 |
| 2. 灰褐色砂 | 7'. " (礫の混入多い) | 11. 灰褐色砂質土 |
| 3. 濁灰褐色砂……旧耕作土か | 8. 黒褐色粘質土 | 12. 暗褐色砂質土 |
| 4. 濁灰色砂質土 | 9. 暗灰色粘質土 | 13. 淡黄色土……地山 |
| 5. 青褐色砂質土……旧耕作土か | | |
| 6. 灰褐色砂質土……畦畔か | | |

第42図 基本土層図 (S = 1/60)



第43図 遺構平面図 (S = 1/80)

第2節 基本土層（第42図）

基本土層は、調査区北側の壁面にて観察した。第1層は盛土或いは流土とみられ、調査区のはほぼ全域で確認された。第3、5、7層は旧耕作土とみられることから、第6層は畦畔の可能性が高い。それらは、作業員からの聞き取りから、戦前の水田と考えられる。これらの層から、中世～近世にかけての遺物が出土した。第8、9層は旧河道の一部と推定される落ち込みに堆積し、多量の礫を包含していた。

第3節 遺構と遺物

1. 遺構（第43図）

前述のように、調査区中央付近にて畦畔状の高まりを、西端にて落ち込みを検出した。隣接する永光寺川がかつて幾度となく氾濫し、流路を変えていることから、この落ち込みは永光寺川の旧河道の一部と推定される。また、落ち込みからは人頭大の礫が多量に検出されたが、規則的な配置は認められなかった。上面で水田耕作が行われていることを勘察すると、水田造成時に埋め込まれたことが想像される。出土した遺物は14世紀～18世紀前半までの製品を主体とするが、近代に下る瓦の小片が1点出土しており、その造成は近代以降の行為である可能性がある。

2. 遺物

（1）落ち込み（第44図）

1～4は土師質土器で、1、2の口径は7.5cm、3、4は約10cmを測る。1は底部に指頭圧痕を留め、黒褐色を呈す。2は胎土に粗砂粒を含むが、焼成は良く、淡黄色を呈す。1、2の口縁部には燈芯油痕が付着する。3は体部下半を強くナデる。少量の砂礫を胎土に含み、淡黄橙色を呈す。4は口縁端部をわずかに引き出す。礫を少量含むが、器表は滑らかである。色調は黄橙色。

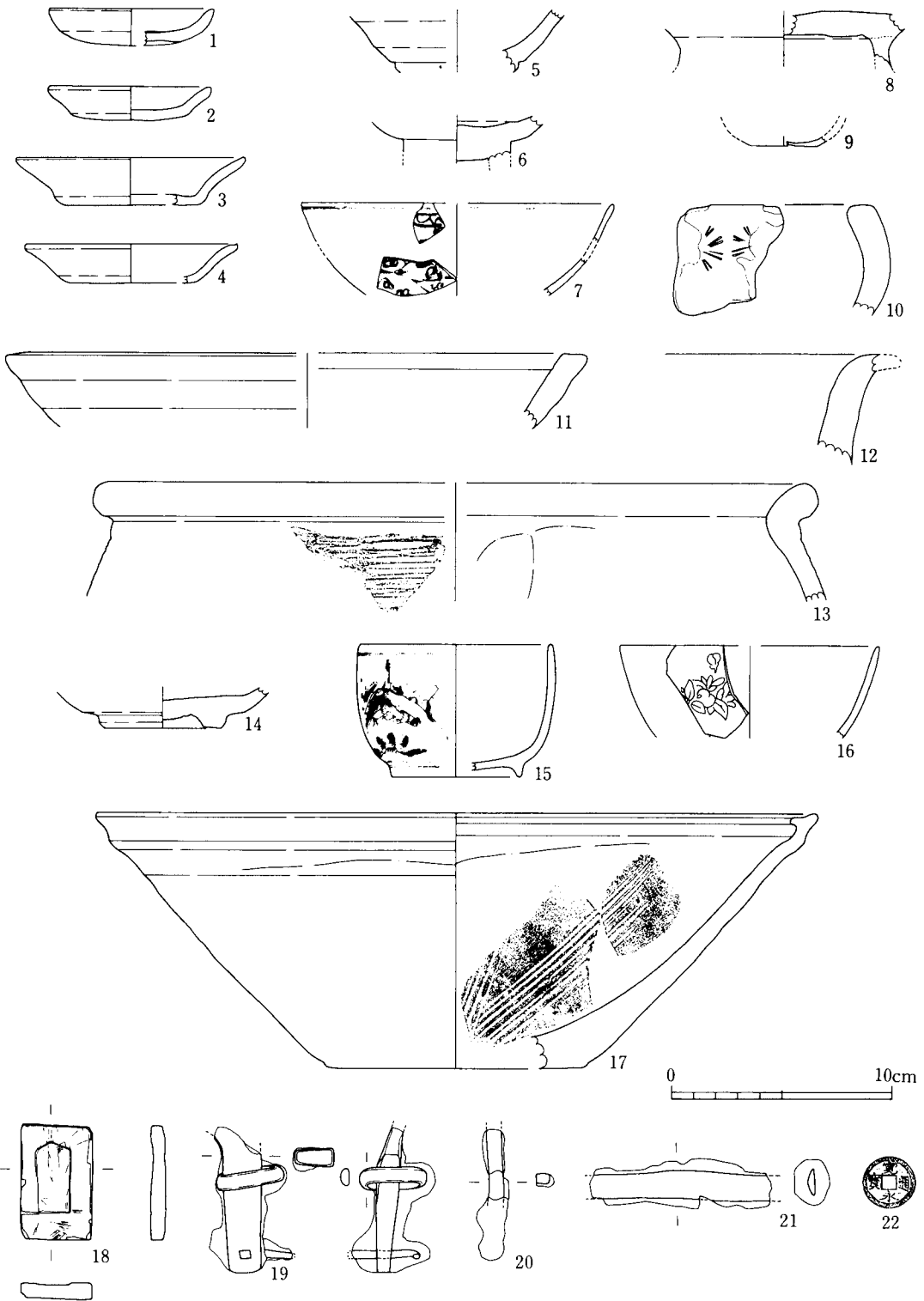
5、8は瀬戸・美濃焼である。5は平碗。8は折縁大皿で、付け高台を有し、見込みは灰釉が薄く刷毛塗りされる。素地は灰白色を呈す。

6、7、9は中国製品である。6は青磁碗の底部で、素地は灰白色で気泡が多く、釉は明灰オリーブ色を呈す。見込みの釉を輪状に掻き取り、高台内部は露胎とする。7は染付碗で、口縁部内外面に界線、胴部外面には唐草文が施される。9は茶入れである。胎土は非常に緻密な粘土質で、堅緻である。内外面は赤黒色、断面は赤褐色を呈し、底部には回転糸切り痕を留める。施釉は確認されないが、おそらく体部上方に薄く鉄釉が掛かる製品となろう。

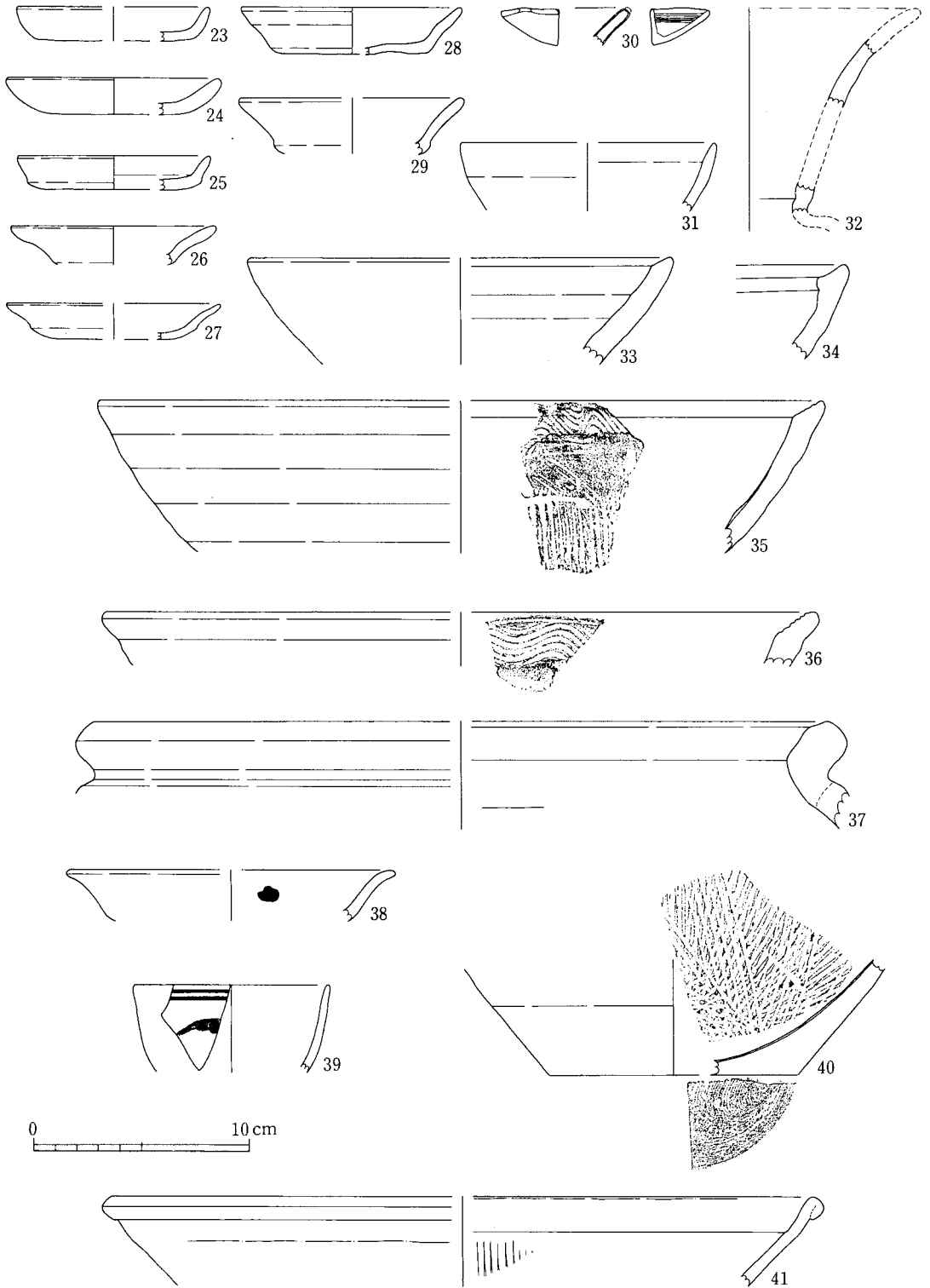
10は瓦質の火鉢で、浅い印花文が確認される。胎土に砂粒をやや多く含み、焼成はあまい。

11～13は珠洲焼である。11は片口鉢で、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや悪い。色調は暗灰色。12、13は甕。12は頸部を直立気味に伸ばし、端部を外方に引き出す。胎土に砂粒をやや多く含み、焼成は並、色調は青灰色を呈す。13は胎土に黒色鉱物粒を多く含み、色調は灰色を呈す。

14、17は肥前系陶器である。14は皿で、幅広の高台を丁寧に削り出し、内面から外面胴部下半にかけてオリーブ色に発色した灰釉を施している。見込み及び畳付けには胎土目跡が四つ確認さ



第44図 出土遺物実測図 (1~17、21落ち込み、18~20、22包含層、S = 1 / 3)



第45図 出土遺物実測図 (包含層、S = 1 / 3)

れる。17は播鉢で、卸し目は2.2cm幅で8本を数えるが、使用による摩滅が観察される。内面には重ね焼き痕、底部には回転糸切り痕を留める。素地は暗赤褐色を呈し、口縁部内外に鉄釉を施す。断面には漆継ぎ痕が残る。15、16は肥前系磁器碗である。15は染付で、松文を描く。全面に施釉後、畳付けの釉を掻き取っている。16は青、赤色による繊細な筆致で上絵付けが施されるが、焼成時に一部とんでいる。広義の柿右衛門様式といえようか。21は刀子状の鉄製品である。

以上は、12が12世紀後半、1～11、13は14～15世紀代、14～17は16世紀末～18世紀前半の製品と判断される。

(2) 包含層 (第44、45図)

23～29は土師質土器で、23、25、26は口径9cm前後、24、27～29は10cm前後を測る。23は断面が層状を成し、器表の剥離も著しい。器表は淡黄色、断面は黒色を呈す。24は厚手で、成形時のナデは明瞭でない。粗砂粒をやや多く含み、にぶい橙色を呈す。25も断面は層状で、色調は黒褐色を呈す。26～29は体部下半を強くナデ、焼成はあまい。28が淡橙色、他は淡黄橙色を呈す。

30は中国製の青磁稜花皿で、口縁部内面に沈線3条を施す。素地は砂粒を含み赤橙色、釉は透明感のない浅黄色を呈す。31、32は瀬戸・美濃焼で、31は天目茶碗、32は灰釉の尊式花瓶である。

33～37は珠洲焼で、37は甕、その他は片口鉢である。33は口径が約20cmの小振りの製品で、卸し目は確認されない。胎土に砂礫を含み、灰色を呈す。34は粗砂粒を多く含み、焼成は良く、灰色を呈す。35は端部に波状文が施され、卸し目は一単位9本以上確認される。焼成は良く、灰色を呈す。36は口縁端面を広く取り、粗い波状文を施す。色調は、外面が黒色、内面は灰色を呈す。37の口縁は丁寧なナデが施され、やや方頭気味となる。胎土に礫がやや多く含まれ、灰色を呈す。以上、中世の遺物であり、14世紀後半から15世紀代の製品である。

38、40、41は肥前系陶器である。38は絵唐津の皿で、にぶい黄褐色の素地に透明感のある灰釉を施す。40は播鉢で、平成3年度調査出土片と接合した。41も播鉢で、口縁端部を折り返して玉縁状とする。素地は暗赤褐色を呈し、口縁部内外に鉄釉を施す。39は肥前系の染付磁器碗である。

第44図の18は仕上げ砥石である。表面と一側面を研磨面とし、三側面と裏面にはノコ目が残る。砥石として使用されているが、一時、硯等に転用しようとしたらしく、鑿状工具により掘り窪めている。19、20、22は金属製品で、19は鎌等のなかごとと推定される。下方に突出しているものは目釘、上方の輪状のものは柄に固定する留め金具と思われる。20は角釘、22は寛永通宝である。

第3節 まとめ

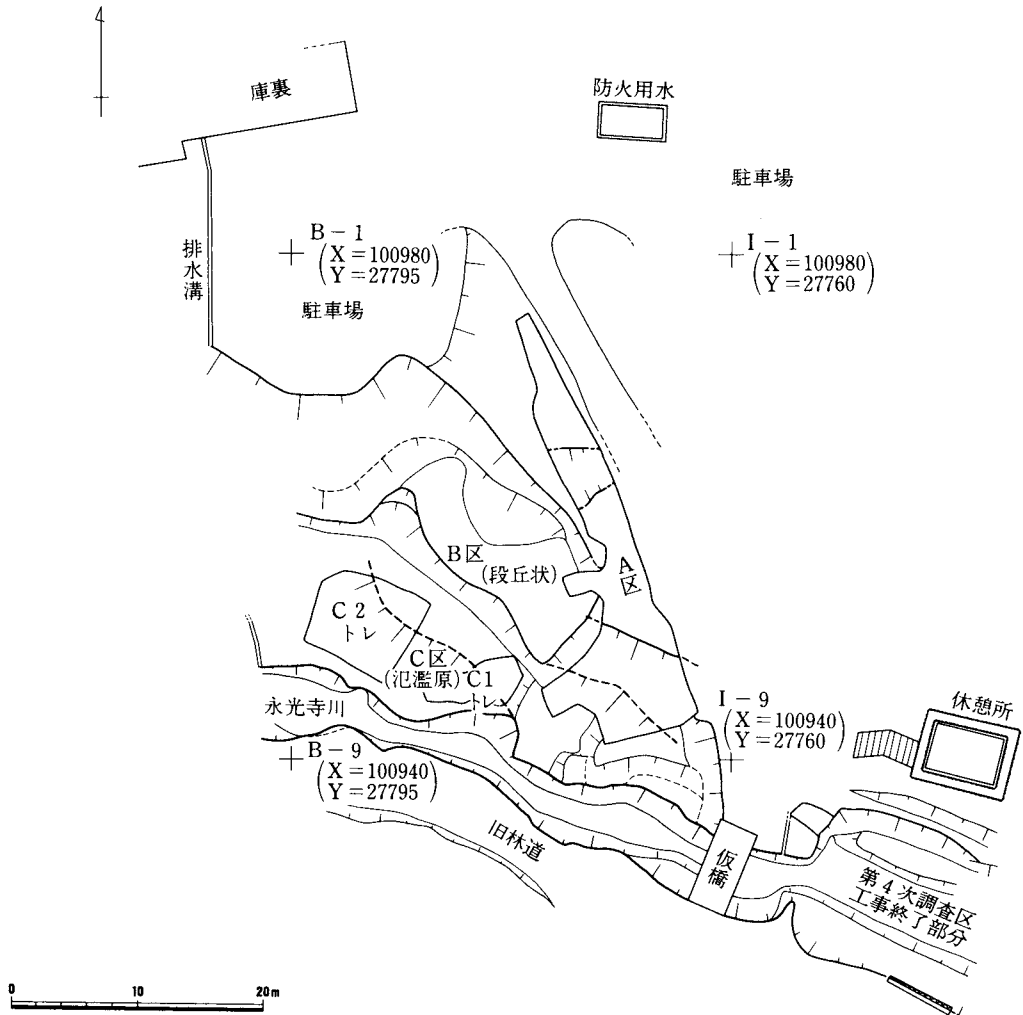
本調査区は、戦前には水田であったことが確認された。それ以前の様子は不明であるが、隣接する前年度調査区が、僧坊跡と推定されており、その縁辺部にあたると判断される。落ち込みは、旧永光寺川の流路の一部と推定したが、平成5年度調査にて検出された川3、乃至4と同一時期の永光寺川であった可能性が高い。

なお、調査区北東部に広がる平坦面については、建物等の存在も予測されたが、平成6年度に羽咋市教育委員会が調査した結果、建物は確認されなかった。(岩瀬由美)

第6章 1993年度の調査（第5次調査）

第1節 調査区の位置と地区割り

本調査地は、羽咋市永光寺川の中流域に沿った地所にあたり、本江町寺境の永光寺境内の、裏参道脇に位置している。明治期や、昭和の裏参道用道路敷設に際し厚い盛土がされていた。永光寺川砂防工事に係る調査は今回が第5次調査にあたり、第4次調査とは道路を挟んで近接している。調査期間は平成5年9月25日～同11月11日であった。道路面での標高は約100mであり、近世盛土以前の標高が約99mで、そこに平坦面があることが試掘調査で明らかにされていた。また、近中世の遺物が永光寺川流路に平行した地所で確認されていた。集水枡が計画されている地区も調査の必要性があったが、巨石・樹木が多数あるため、関係機関との合意により自然景観を極力破壊しない方向でC区はトレンチ調査をした。参道脇の斜面ならびに氾濫源をA区としその中で北より第1平坦面・第2平坦面・第3平坦面とした。集水枡北の平坦面をB区とし、B



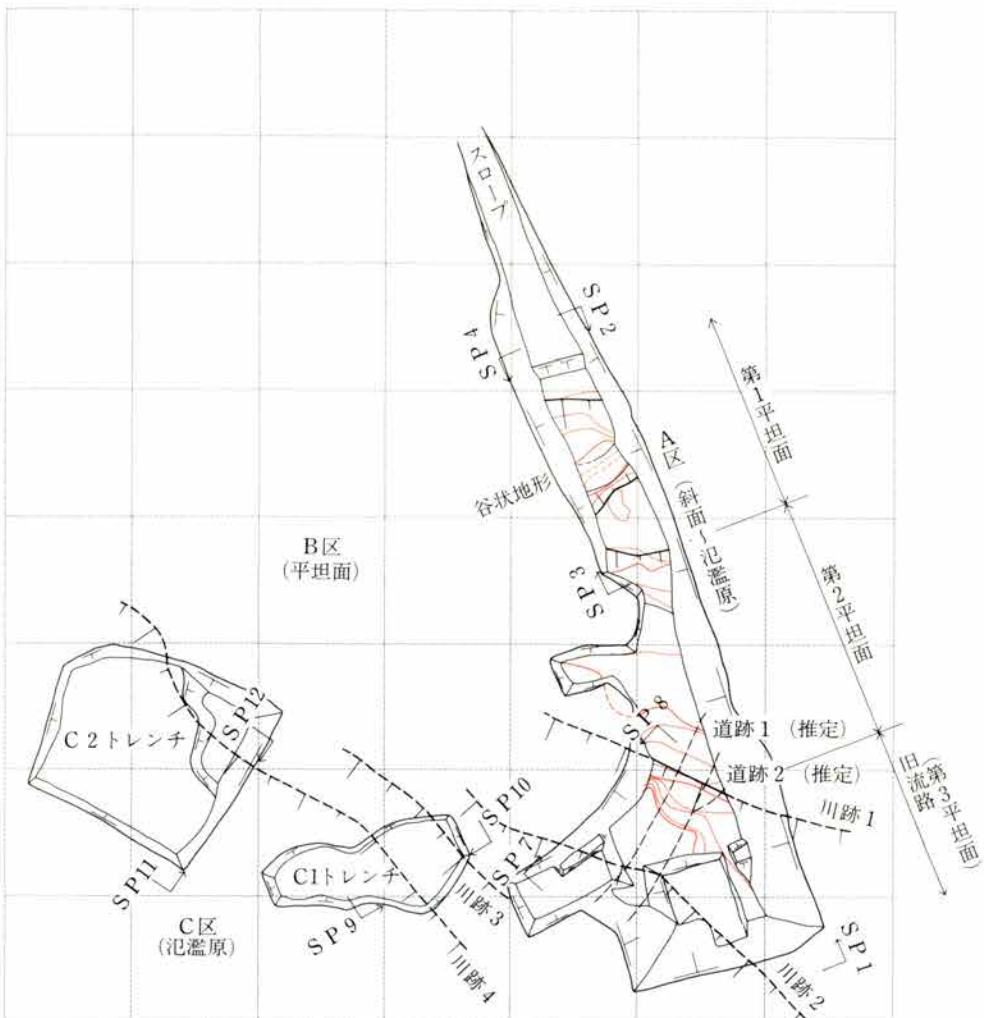
第46図 5次調査区周辺平板測量図 (S = 1/600)

区については砂防工事に直接関わらない地所であるため調査はしていない。

調査の結果、調査区の大半が永光寺川の流路ならびに氾濫源で占められていることを確認した。A・B・CおよびD層付近まで重機で掘削し、その後は人力で掘り下げた。傾斜地斜面であるため川砂、山砂、礫層が互層化しているが、層位ごとに掘り進むことに留意した。杭は国土座標に載るように業者委託により、設定した。10mの杭の設定の後、5mごとに北から南に数字を、西から東にアルファベットをふった。北西方向の杭名をグリッド名と定めた。

第2節 層序

今回の調査地区は、標高96m~102mを測り、石道山系の傾斜地斜面にあたる。またこの地は

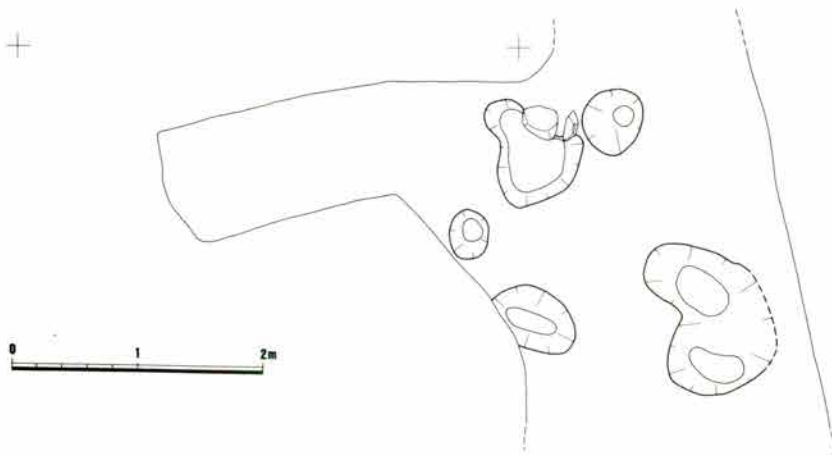


第47図 5次調査区の地形と地区割り (S=1/300、5mグリッド)

永光寺へ通ずる裏参道の脇にあたり、数次に渡り氾濫した自然河川の河道のなかに含まれる。今回の調査区の層も施設道路の盛土並びに、河川の覆土が大半を占める。

今回の調査の調査区は、現道脇の傾斜する地域で、北西から、南東に伸びる調査区をA区とした。北より第1平坦面・第2平坦面・第3平坦面と三箇所の平坦面を確認した。このA区東壁（第49・50図）が今回の発掘調査の調査区の基本土層をあらわしている。表土以下、盛土・旧耕土・土師器包含層・川砂等の層序を確認した。表土以下の層より順にアルファベットで層名を定めた。現の裏参道の盛り土層であるA層は、灰褐色盛土層である。B層は一時水田耕作がされていた時期の旧耕土である。C層は焦土等を多く含む赤色系土層。D層～F層の黄褐色層、G層褐色層、H・I層はシルト質の黒色層で平安の土師器包含層である。

R・R'層は黄色砂層で、川砂層である。S層はD層とはほぼ同時期の石・瓦等を多く含む青灰褐



第48図 5次調査区第2平坦面の平面実測図 (S = 1/60)



調査風景

103.0m

102.0m

101.0m

100.0m

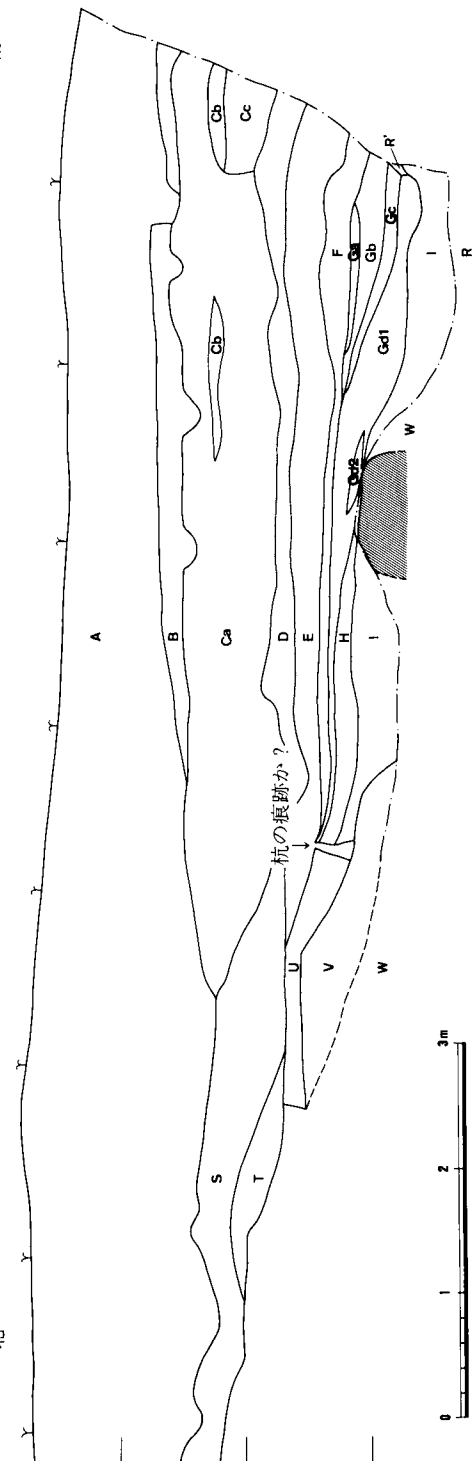
99.0m

98.0m

97.0m

→南

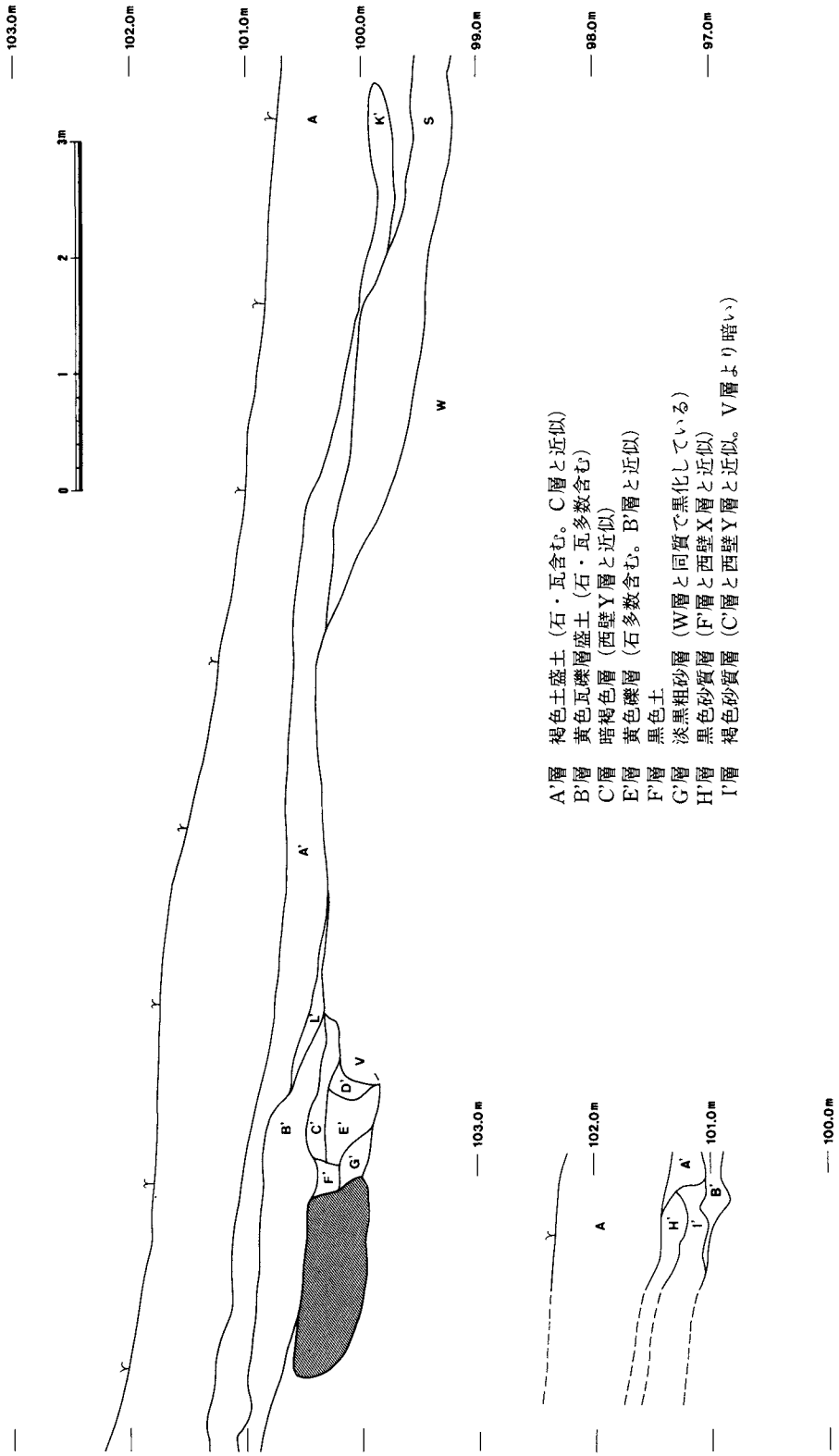
←北



- A層 灰褐色土 (表土。黒瓦混入する盛土層)
- B層 褐灰色土 (旧耕土)
- Ca層 暗赤褐色土
- Cb層 極赤褐色土
- Cc層 灰赤色土
- D層 黄褐色土 (黄色シルトブロック混入)
- E層 褐灰色土
- F層 黄色砂質土
- Ga層 暗褐色土
- Gb層 褐色土
- Gc層 灰褐色土
- Gd1層 褐色土

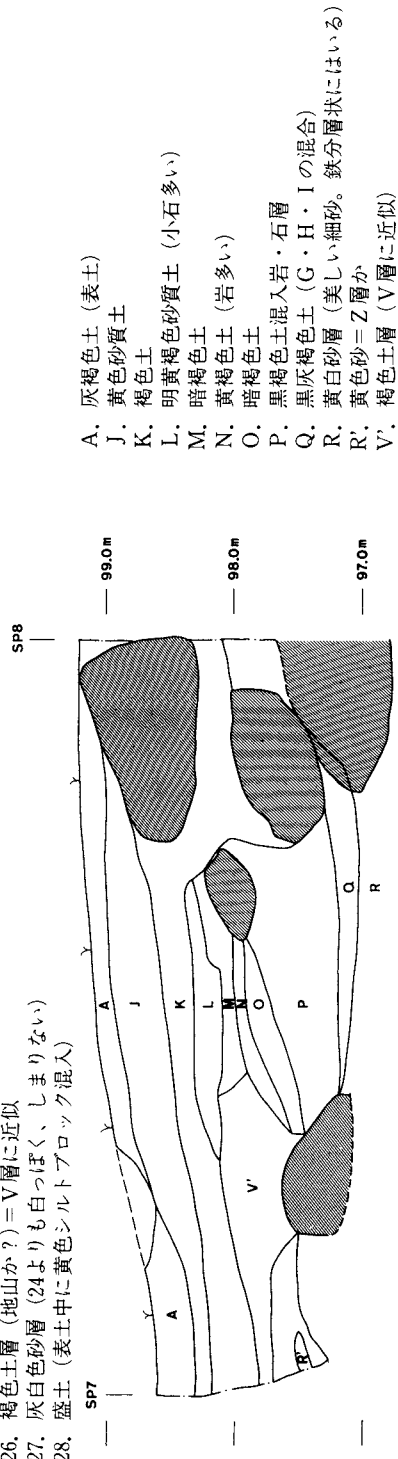
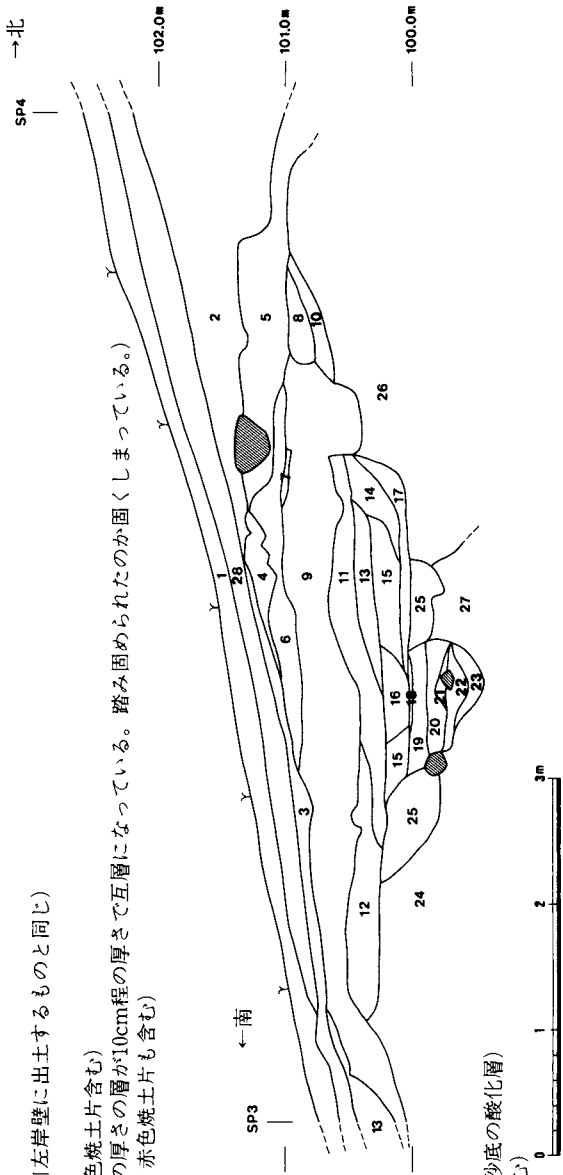
- Gd2層 黒色土に近い褐色土 (H層に近い)
- H層 黒色土 (土器包含層)
- I層 黒褐色土 (土器包含層)
- R層 黄色砂 (川砂)
- S層 青灰褐色砂質土 (石・瓦等多く含む。調査時にあった道を作るための盛土か)
- T層 赤黄色砂 (粗砂で石を多数含む。)
- U層 褐灰色土層 (ふみかためられたような土)
- V層 褐色土層
- W層 黄褐色砂層 (T層より大きな石混入)
- R'層 黄色砂 (川砂)

第49図 断面実測図(1) A区東壁① (S=1/60)



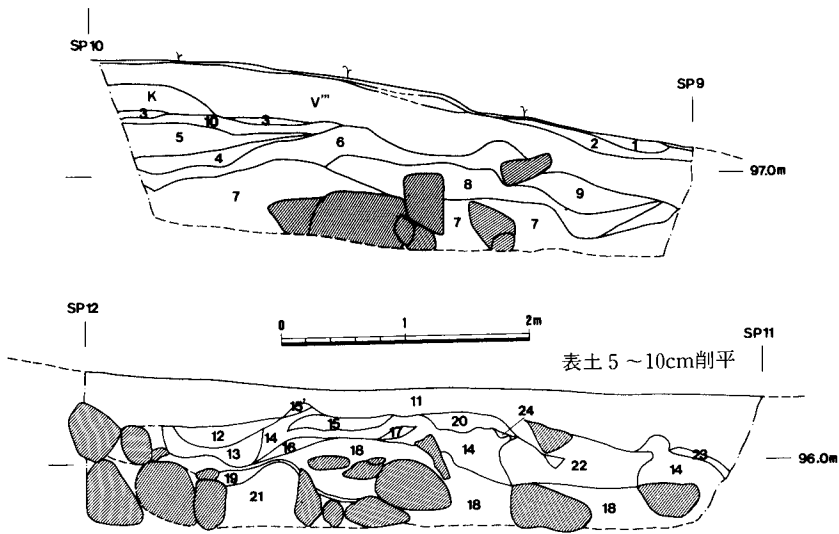
第50図 断面実測図(2) A区東壁② (S=1/60)

1. 表土
2. 盛土 (オリープ色土壁片含む。永光寺川左岸壁に出土するものと同じ)
3. 淡灰色砂質層
4. オリープ色粘土質層 (直径1~2cm赤色焼土片含む)
5. 褐灰色砂質土層 (下層部は1~2cm程の厚さの層が10cm程の厚さで互層になっている。踏み固められたのか固くしまっている。)
6. 黒色炭層 (北側で4層と5層が混入し、赤色焼土片も含む)
7. 4層と同じ
8. 黒色砂質層 (木炭含まず。)=X層
9. 褐色砂質層 (26より暗い)=Y層
10. オリープ褐色砂質層 (赤褐色焼土含む)
11. 暗褐色砂質層
12. 暗褐色砂質層
13. オリープ褐色砂質層 (11よりやや強い)
14. オリープ褐色砂質層 (13よりオリープ色やや強い)
15. 暗褐色砂質層 (11よりやや暗い)
16. 淡オリープ砂層 (15混入、川砂)
17. 暗褐色シルト質層
18. 暗褐色シルト質層 (径2~3cm小石含む。川砂底の酸化層)
19. 淡黒色シルト質層 (径2~3cm小石含む)
20. 黒褐色細砂層
21. 暗褐色粗砂層
22. 暗褐色シルト質層
23. 淡黒色粗砂層
24. 黄褐色砂層 (地山)=W層
25. 褐色シルト質層 (壁土のようにシルト質である)
26. 褐色土層 (地山か?)=V層に近似
27. 灰白色砂層 (24よりも白っぽく、しまりない)
28. 盛土 (表土中に黄色シルトブロック混入)



- A. 灰褐色土 (表土)
- J. 黄色砂質土
- K. 褐色土
- L. 明黄褐色砂質土 (小石多い)
- M. 暗褐色土
- N. 黄褐色土 (岩多い)
- O. 暗褐色土
- P. 黒褐色土混入岩・石層
- Q. 黒灰褐色土 (G・H・Iの混合)
- R. 黄白砂層 (美しい細砂。鉄分層状にはいる)
- R'. 黄色砂=Z層か
- V. 褐色土層 (V層に近似)

第51図 断面実測図(3) A区谷状地形(上段)、A区川跡1北西壁(S=1/60)



- | | |
|-----------------------------|---------------------------------|
| 1. 暗褐色土 (表土、盛土) | 11. 暗褐色土 (盛土) |
| 2. 黄色土 (盛土) 丁層か? | 12. 明黄白色細砂層 (石混入) |
| 3. 黄褐色砂 R'層か? | 13. 明白色細砂層 (12より細粒) |
| 4. 灰褐色砂質層 | 14. オリーブ茶色砂質シルト (V'''層と近似) |
| 5. 暗黄色砂層 (粗砂と岩が混在) | 15. 黄色細砂層 |
| 6. 茶褐色砂質層 | 16. 赤黄色細砂層 |
| 7. 灰褐色砂質層 (石多い) P層か | 17. 赤黄色細砂層 |
| 8. 黄白オリーブ色砂層 (川砂。酸化鉄状のもの混入) | 18. オリーブ黄色砂質土層 |
| 9. 赤褐色砂質層 (5に似るが、酸化鉄のため赤変) | 19. 黄色細砂層 |
| 10. 灰褐色土層 (4と似るが、粗砂目立つ) | 20. 褐灰色砂質土層 |
| K. 褐色土 | 21. オリーブ砂質土層 (19により分断されるが18と同質) |
| V'''. 褐色土層 V層と近似。 | 22. 青灰色シルト層 |
| | 23. 明黄白色細砂層 |
| | 24. 赤黄色細砂層 (16・17と同じか) |

第52図 断面実測図(4) C1 トレンチ東南壁 (上段)、C2 トレンチ東南壁

色砂質土である。T層赤黄色砂とU層褐灰色土層は、ともに人為的に踏み固められた様相を呈する。A層層より、U層まで確認された土層中現在の表土を除いて、H・I層・T・U層に生活の活動面が認められる。

第3節 遺物

前節で述べたように、永光寺川の川跡を4箇所確認した。(第2図参照)遺物の出土をみたものは、川1～川3の流路であり川出土遺物として提示する。

川1出土遺物 (第53図 1～4)

1は、有台椀で体部は内湾気味にたちあがる口縁をもち、高台は脚高高台ふうのもので外反気味に広がり裾部下端に削りによる面をもつ。灯明皿として転用したと思われ、高台端部に、灯明油痕が確認される。2は無台の椀で糸切りの底部を持つ、この椀も底部脇に削りをもつ。3も同型の椀と思われる。何れも川肩部よりの出土である、11世紀。4は珠洲焼の壺。堅固な焼きで僅かに外反しながら、1.5cmほどたちあがる頸部をもつ。多量の白色班が頸部内面に広範囲にみられ、肩部にも多少みられる。壺K種。I期末。

川2 出土遺物 (第53図 5~10)

5は珠洲焼の甕。Ⅳ期の法住寺三号窯、平直な方頭に近い「く」の字口縁をもつ。口縁と、胴肩部に白斑がみられる。打圧密度は、3cmあたり8目となっている。6は、天目茶碗である。高台端部に面をとり、脇を垂直に削り、段を造る。腰部から胴部にかけて八の字に開き口縁は、垂直にたちあがる。口縁端部に面を造り、とがらせている。鉄釉が施され、口縁は茶褐色(柿釉)、他は黒褐色を呈する。高台は露胎である。古瀬戸Ⅱ・Ⅲ期か。7は、口径10cmを測り、シャーモットと海綿骨片を多数含む土師皿。口縁に幅2cmの横ナデを施し、体部下半部下端に稜をもち、胎土には細砂の混じりがみられ石英も含む。口径12.5cm、器高3.5cmを測り口縁端部より、約3cmの横ナデが施される非ロクロ系土師器皿10の出土もみている。13世紀末。

川3 出土遺物 (第53図 11・12)

11は染付けの大皿。器壁の厚さ約1~2cmの厚手の皿で、内面に濁により大きな菊花を描く、外面に釉むらあり。内外面に荒い貫入が入る。高台端面は約8mmあり、無釉でへらにより2段に成形がされている。高台内側には砂が付着する。高台径約10cmの削り出し高台。12は、白化粘土による刷毛目の碗で高台径約4cm。調整の不十分な突起状の痕跡が、見込に半円状に高台脇には団子状の土が付着しそのまま白泥釉がけを行っている。高台内中央に9の字状の浅いへら刻文あり。畳付けは釉をかきとっている。

その他の遺物

調査区A区の第1平坦面で出土した遺物を提示する。

SX1 (第54図 13~15)

底部に糸切りの痕跡をもつ土師器杯底部、高台の付け根で破損している。12世紀以降。

永光寺寺社地であって、庫裏に通ずる現道下に昭和・明治期のほぼ2回にわたる整地及び、道を敷設した痕を確認した。その現道下の遺物を提示する。

道1及び整地土の出土遺物 (第54図 16~19)

16は、白色に近い胎土をもつ碗で、見込みに幅3mm径5cmでの圏線をもち、中に「永」を書く。外面にも文字記入の痕跡が残る。外面の圏線の呉須は特に淡い発色である。外面は細貫入、ピンホールが目立つ。高台端面と、端面内の釉を剥ぎ取っている。高台内の文字は「貳百〇」と読めるか。窯不明。17は、染め付け碗蓋。内外面施釉。外面に草花を配し中央部に簡略化されたラマ連弁を、内面に四方禪文を施文している。藍ににじみがみられる。18は染付け丸碗、外面高台脇に簡略化されたラマ連弁を描く。内面は無模様か。高台端部を釉ハギし、端部をとがらせている。19は、窯不明のこね鉢、内面に播目の痕様の痕跡が外面には鉄釉がけの痕が残る。

盛土など出土遺物 (第54図 20~50)

A区で出土した、小皿・黒色土器・須恵器である。23は、底部と思われ断面に重ねた粘土の痕跡が残り、焼成は一方のみ不良。荒いへラケズリで糸切りは施していない、高松産の碗か皿の底

部か。土師皿については、口縁外面に横ナデを施し面を造る、底部は引き延ばしの痕跡が顕著である。

24～27は、総て珠洲の製品。24、25はⅥ期の瓶。27は、器体がほぼ直線的に開き、肥厚した口縁の内端に面をとり、櫛波状文帯を巡らす播り鉢。Ⅵ期以降西方寺窯。外面に一部平滑な面あり、播り鉢の使用を終えて後、他に転用されている。

28～39の内、30・36以外は第一平坦面の盛土中より出土した。28は内外面黒色の瓦器で、表面施釉により光沢を持つ。31は細貫入のはいた皿で、信楽焼きの灯明皿で漆黒の灯明油痕が残る。35は二重網目文をもつ碗であり、肥前大橋編年Ⅳ期以降。38は、梅枝文を施し見込み内蛇ノ目釉ハギ。高台の脇に、御本の班様に紅い発色がみられる。39は、肥前花生。胴部をラセン状に削って「千段巻」にしている。鉄釉の発色は、濃茶褐色を呈している。

48は、中国染め付け皿。見込みに草花がダミで施される。降灰のため、釉ハゲがみられる。高台端部に多数の砂の付着があり、幅約1mmの飛びカンナがみられる。47、肥前・京焼き風陶器。鉄釉による山水文を施文、高台内には、へらによる印刻もみられる。42・44はくらわんか茶碗で意匠は同じであるが、胎土が異なる。44は波佐見窯か。

盛土など出土の瓦および石（第57図 52・53・51）

52・53は、施釉されている釉薬も胎土も共に赤い瓦である。52の平瓦は、下面に櫛状の工具で幅約3mmほどの5本の沈線を施し、流水状の様相を呈している。胎土に、多数の細砂を含んでいる。瓦止めの径1cmの釘穴が一箇所みられる。53は丸瓦である。内面にコビキBの痕跡あり、破断面に2箇所の小孔があり、断面図上面より径約1cm、下面で約0.5cmをはかる。胎土に石英が目立つ。51は、平滑な面をつるはしで彫り込みながら面を造っている。工具のつるはしの深さ1cmの痕跡が鮮明に残る。長辺の一方の端面は、鋸によって切られており、もう一方は溝等が浅く彫られていたようで、破断面を呈している。石質は、福井産の芍谷石であり、用途は墓標等の構築物の部材であると思われる。

第4節 道と旧永光寺川

川1出土の遺物により、永光寺壮健の14世紀以前、平安時代に、調査区付近に人が居住していたことが明らかとなった。遺物の出土が川1の右岸肩部H・I層からの出土であるため、上流から流されてきた可能性がないとは、断言できないが、出土の状況から第2平坦面からの、投げ込みの可能性が高いとおもわれる。

盛土・整地土層の下より、人為的に踏み固められた、2つの層T層・U層をA区東壁に確認した。同様の層をA区南西コーナー、F-8区からも検出している。このため庫裏に至る道が標高98m付近のレベルで、F-8区南西コーナーからH-6区にかけて存在したことが推定できる。南端を垂直に断ち切る形で、杭の抜き取り様の痕跡も確認できた。つまりH・I層を断ち切る形で、U層は造られている。道1として機能していたのは、出土遺物等から中世以降であることが

わかる。褐灰色E層で整地された。整地後、道敷設の用土としてT層が敷かれる。T層が、道2として機能していたのは、盛土A～C、ならびにS層の状況から近代までであることがわかる。T層の状況の道2は近隣の古老の話ともほぼ合致し、明治時代まで機能していた。

西壁（第51図上図）は、谷状に落ち込んだ自然地形の層位をあらわす。1層は表土であり、2層は盛土層で永光寺川左岸にみられる土壁片を多数含む。これ以降の層中、遺物がほとんど確認されなかった。踏み固められた痕跡を持つ層がこの壁でも確認されたことから、東壁で確認された道1・道2のどちらかが西壁に続くとも考えられる。

16・18層は酸化した川砂が、存在し、20～21・23は山砂層からなっている。24層は東壁W層にあたる。W層は、調査区A区の全域にある層で山砂地山であると判断した。26・27層はVとW層の漸移層である。

調査A区北西壁（第51図下図）は、永光寺川の旧河道出現の土層図である。L・M・N層が東壁D～F層に比定している。R・R'層が東壁と共通する層である。確実に調査区A区内で2度永光寺川が流路を変えている。

c-1・2トレンチ（第52図上・下図）では、数度に渡る河川の氾濫源が細砂層で確認されている。c-1トレンチの8層標高約96・5mが第7図断面実測図下図の19層標高約96mにあたり、遺物から江戸期の河道と確認した。c-1トレンチ内3・5層がいずれも流路内に存在する川砂であり、前述の川以降に流路を一時期変えたものである。その他調査区第2平坦面で5個のピットを検出しているが、性格はわからない。

本章を書くにあたって、立命館大学・木立雅朗氏、石川県教育委員会文化財課・北野博司氏に教示を得た。記して感謝します。

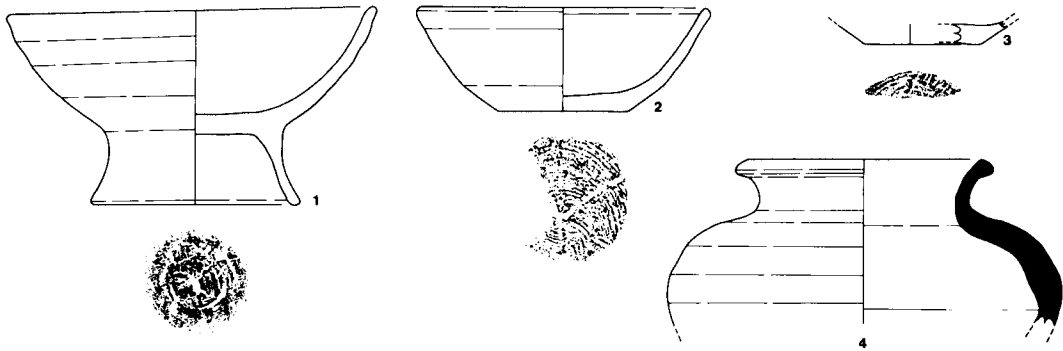
（澤田まさ子）

報告番号	実測番号	調査区	層	位置	位置	E種別	器種	口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
1	1	A区	I	第3平坦面	皿	土師器	皿	14.5	8.3	7.9	外ヨコナデ内ヨコナデ	橙色	粗砂・礫多少含む	灯明用転用
2	2	A区	H	第3平坦面	椀	土師器	椀	11.5	5.2	4.1	外ヨコナデ内ヨコナデ	橙色	粗砂・礫多少含む	底部糸切り
3	30	A区	H・I	第3平坦面	皿	土師器	皿	4.6			内ナデ外ヨコナデ	橙色	粗砂・焼土塊少し含む	糸切り底
4	33	A区	G~I	第3平坦面	壺	珠洲	壺	9.4			内ヨコナデ外ヨコナデ	灰色	赤色酸化粒を含む	頸部降灰
5	8	A区	R	第3平坦面	甕	珠洲	甕				外タタキ内タテナデ	灰色	細砂多い	
6	5	A区	R	第3平坦面	器	陶器	碗	11.3	4.4	5.9		赤褐色	密・灰白色	削出高台・高台無釉
7	14	A区	R	第3平坦面	土師器	土師器	皿	9.2			内ヨコナデ外ヨコナデ	橙色	焼土塊少し含む	海綿骨片多数含
8	21	A区	G	第3平坦面	土師器	土師器	甕	19			内ヨコナデ外ヨコナデ	灰白色	粗砂多い	
9	22	A区	E	第3平坦面	土師器	土師器	皿	7.6			内ヨコナデ、ナデ外ヨコナデ、ナデ	にぶい橙色	粗砂多い	
10	3	A区	F	第3平坦面	土師器	土師器	皿	12.5	10.3	3.7	内ヨコナデ、ナデ外ヨコナデ、ナデ			
11	37	C区	灰砂	東トレンチ	磁器	磁器	皿	10			ケズリダシ高台	灰白色	密・灰白色	高台置付軸はぎ
12	39	C区	灰砂	東トレンチ	陶器	陶器	碗	4.3			見込ナデ	灰褐色	密・赤灰色	三島手
13	20	A区	x	第1平坦面	土師器	土師器	皿	5			内ナデ・指押	黄褐色	粗砂・シャーモット少し含む	糸切り底
14	18	A区	6	第1平坦面	土師器	土師器	椀	6.2			内ヨコナデ・ナデ	橙色	焼土塊・細砂少し含む	高台内糸切り残
15	19	A区	7	第1平坦面	土師器	土師器	椀	6			内ヨコナデ・ナデ	橙色	焼土塊少し・細砂多い	高台内糸切り残
16	43	A区	T	第1平坦面	磁器	磁器	椀	4				乳白色	密・乳白色	高台置付軸はぎ
17	42	A区	T	第1平坦面	磁器	磁器	蓋	10.2		2		灰白色	密・灰白色	花文・楯目文
18	50	A区	T	第3平坦面	磁器	磁器	椀	4				灰白色	密・灰白色	ラマ蓮弁
19	29	A区	T	第3平坦面	陶器	陶器	捏ね鉢	11			外ヨコナデ	黄褐色	粗砂多い	
20	4	A区	K	第3平坦面	土師器	土師器	皿	8.1	4.2	1.8	内ヨコナデ・外ヨコナデ		粗砂多少含む	
21	12	A区	M~O	第3平坦面	土師器	土師器	皿	10		2.3	内ナデ・ヨコナデ外ナデ	黒灰色	細砂少量含む	
22	27	A区	盛土	第1平坦面	土師器	土師器	皿	10		2.7	内ヨコナデ外ヨコナデ	橙色	焼土塊・海綿骨片含む	
23	11	A区	L	第3平坦面	須恵器	須恵器	坏身	6.9			内ナデ・ヨコナデ	暗灰色	微砂粒・粗砂少し含む	
24	9	A区	盛土	第1平坦面	珠洲	珠洲	坏身				外タタキ内ヨコナデ	灰色	粗砂・礫多少含む	
25	31	A区	K	第3平坦面	珠洲	珠洲	甕				内ナデ外タタキ	青灰色・暗灰色	堅緻	綾杉状叩き肩部
26	13	A区	x・Y	第1平坦面	珠洲	珠洲	壺				内ヨコナデ外ナデ楯目文	灰色	シャーモット含・海綿骨片含む	波状文
27	7	A区	盛土	第3平坦面	珠洲	珠洲	鉢	26			外ヨコナデ内ヨコナデ	灰色	粗砂・礫多少含	波状文・海綿骨片含
28	10	A区	盛土	第1平坦面	瓦質	瓦質	火鉢	22			外ミガキ内ヨコナデ	黒色	2~3ミリ大の礫多少含	
29	17	A区	5	第1平坦面	セツ器	セツ器					内ヘラケズリ・ナデ	灰褐色	細砂多数混	
30	6	A区	k	第3平坦面	陶器	陶器	椀	4.1				黒褐色	密・灰白色	削出高台・高台無釉

表2 永光寺'93遺物観察表(1)

報告番号	実測番号	調査区	層	位置	位置	E種別	器種	口径	底径	器高	調整	色調	土	備考
31	25	A区	盛土		第1平坦面	陶器	灯明皿	11.2			外ヨコナデ・ヘラケズリ	灰白色	緻密・灰白色	外面口縁部漆付着
32	47	A区	J		第3平坦面	磁器	碗	10			外クロロヒダ	灰白色	密・灰白色	
33	45	A区	盛土		第1平坦面	青花	香炉	8				灰白色	密・灰白色	内口縁四方タスキ
34	26	A区	盛土		第1平坦面	磁器	紅皿	4.4	1.4	1.5	内ヨコナデ外縦ヘラケズリ	灰白色	緻密・灰白色	
35	41	A区	盛土		第1平坦面	磁器		8.6		4		灰白色	密・灰白色	2重網目文
36	51	A区		東壁		磁器	碗		2.8			白濁色	密・灰白色	見込内寿文字
37	44	A区	盛土		第1平坦面	磁器	皿	16.7	10.6	4.5	内外クロロヒダ	灰白色	密・灰白色	高台内蛇ノ目軸はぎ
38	40	B区	崩落土			磁器	碗	11.8	4.6	6.2	外クロロヒダ	青灰色	密・灰白色	高台量付軸はぎ
39	15	B区	崩落土			陶器	瓶	2.7			シメ	暗赤褐色	緻密	植物溶着
40	52	分調				磁器	壺				内外クロロヒダ	灰白色	密・白色	花文
41	35	分調				陶器	皿		5.2		ケズリダシ高台	乳白色	密・黄白色	高台全面施釉・砂目
42	46	分調				磁器	碗	9.8	4.1	5.5	内外クロロヒダ	灰白色	密・灰白色	高台量付軸はぎ
43	48	c区	表採			磁器	蓋		4.2	3		灰白色	密・灰白色	内面無釉・底部回転糸切り
44	38	C区				磁器	碗	9.6	9.6	9.4		灰白色	密・灰白色	高台量付軸はぎ
45	34	分調				陶器	播鉢	32	9.6		外ヨコナデ・ナデ	赤褐色	堅緻灰褐色・赤褐色	口縁塗り鉄
46	34	分調				陶器	播鉢	32	4.7		外ヨコナデ・ナデ	赤褐色	堅緻灰褐色・赤褐色	
47	24	C区	表採			陶器	碗				ケズリダシ高台	浅黄色	密・黄白色	高台内印刷
48	36	C区		東トレンチ		青花	皿		11.6		高台内カンナケズリ	青白色	緻密・灰白色	高台全面施釉
49	16	C区	表採			陶器	壺	11.3				灰褐色	密・灰赤色	
50	23	C区	表採			陶器	播鉢		9.4		内ヨコナデ外ヨコナデ	褐色	密・キメがそろろ	鉄釉
52	32	A区	盛土		第3平坦面	瓦	平瓦				下ヘラケズリ	赤褐色	礫多数含	榭状削り
53	28	A区	盛土		第1平坦面	瓦	丸瓦				内ヨコナデ・ヘラ外ヨコナデ	赤褐色	礫多少含	

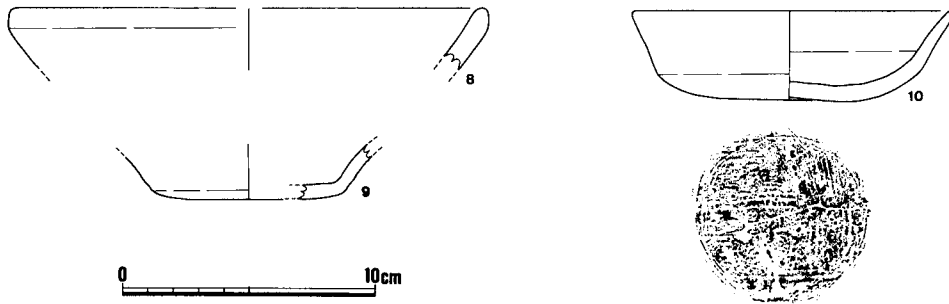
表3 永光寺'93遺物観察表(2)



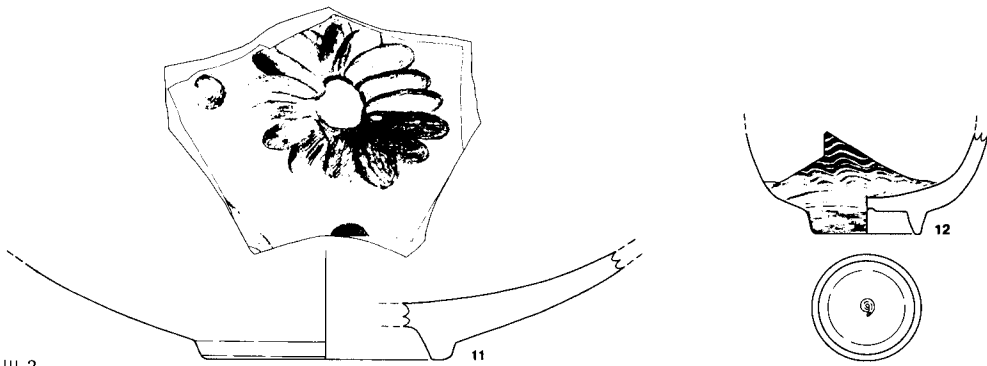
川 1



川 2 下層

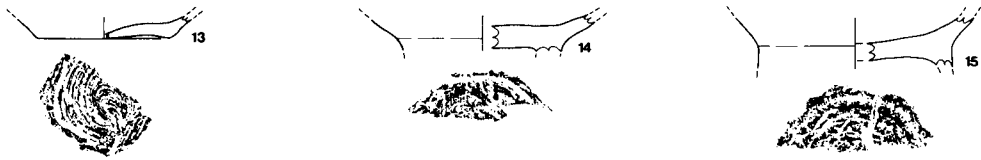


川 2 上層

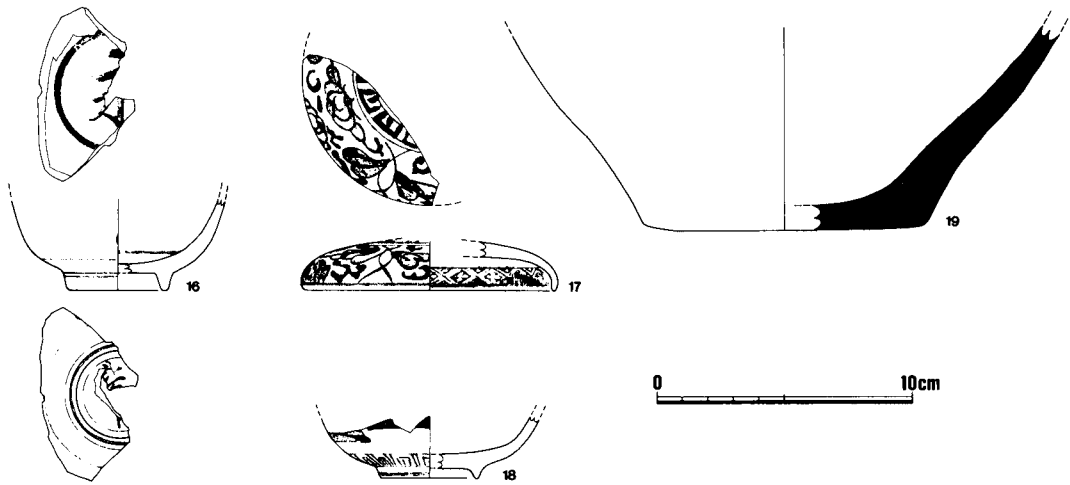


川 3

第53図 川跡出土遺物

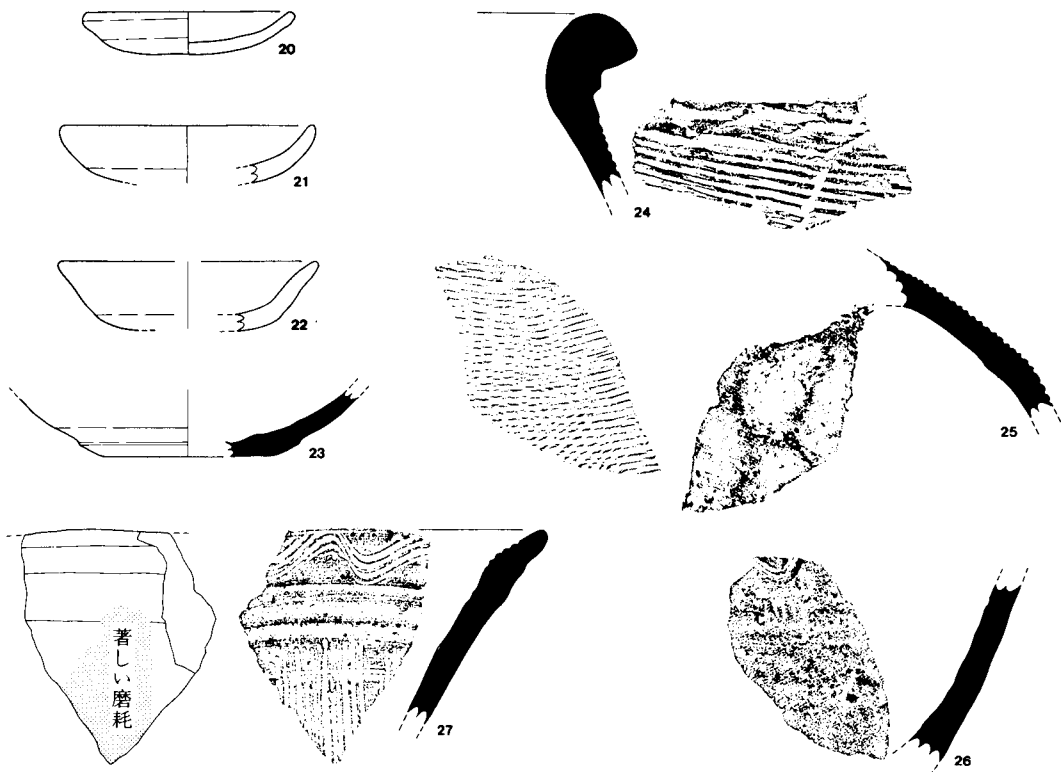


S X 1

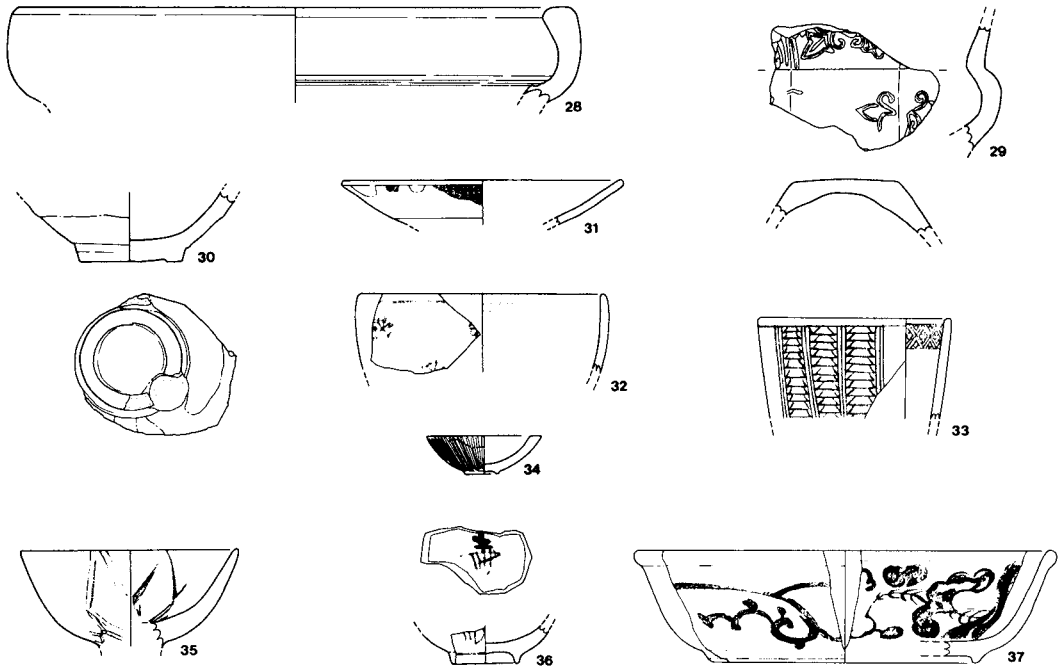


道1 整地土

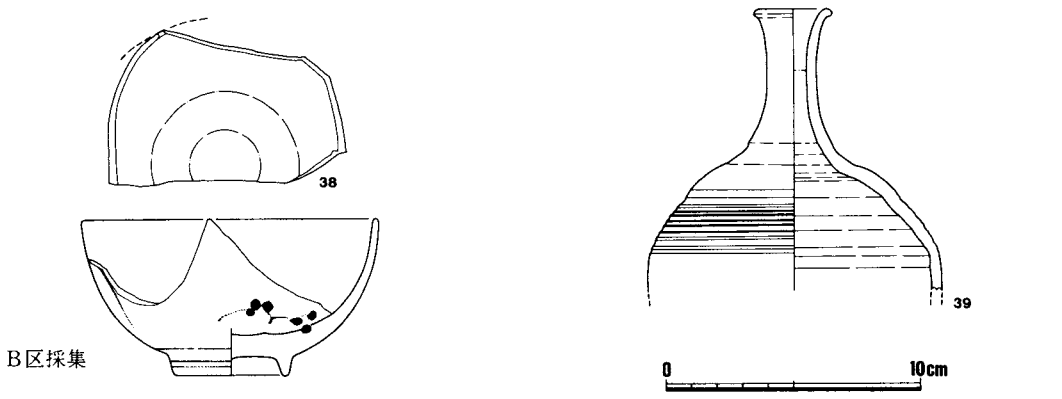
盛土など



第54図 1993年度調査区道1・盛土など出土遺物

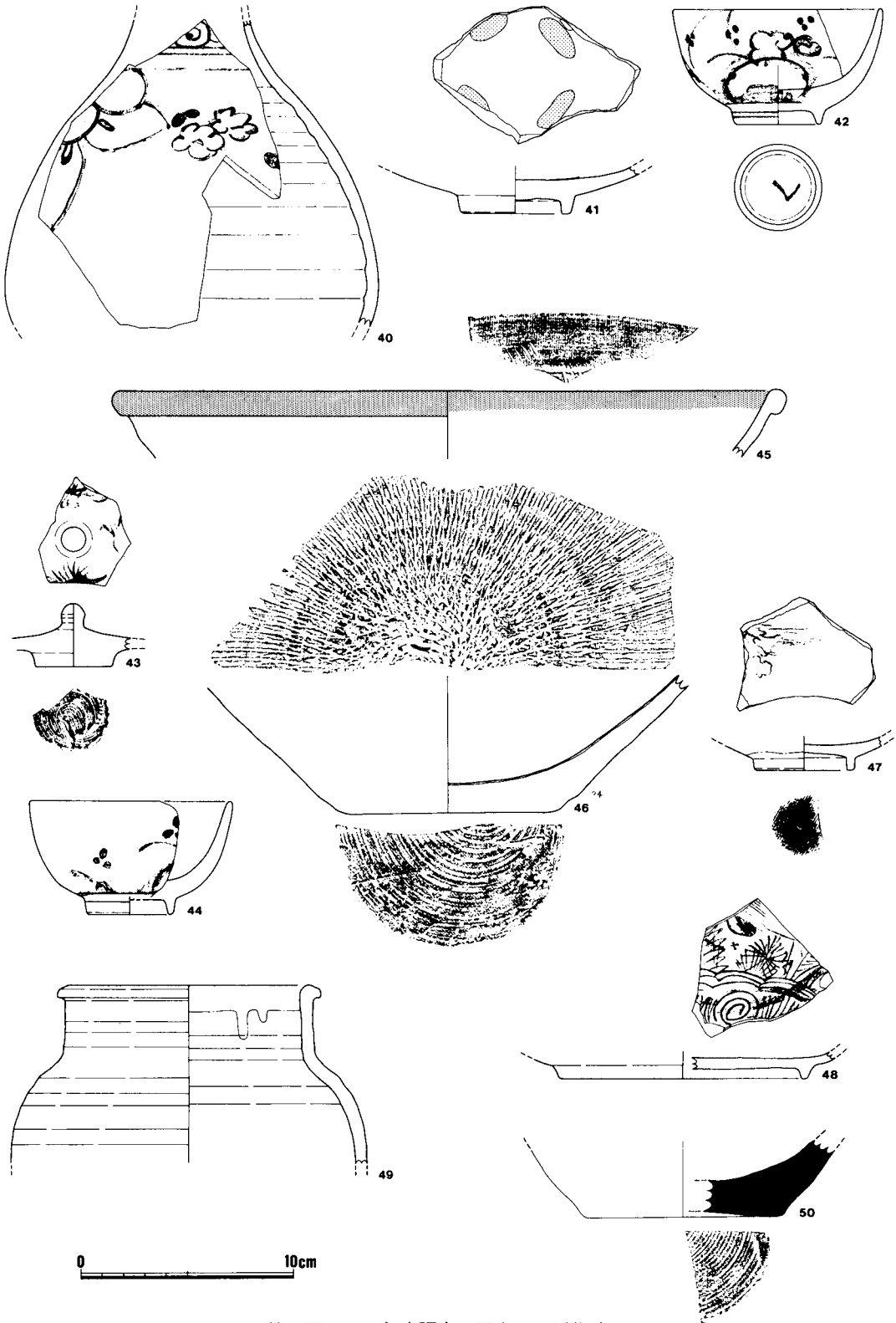


盛土など

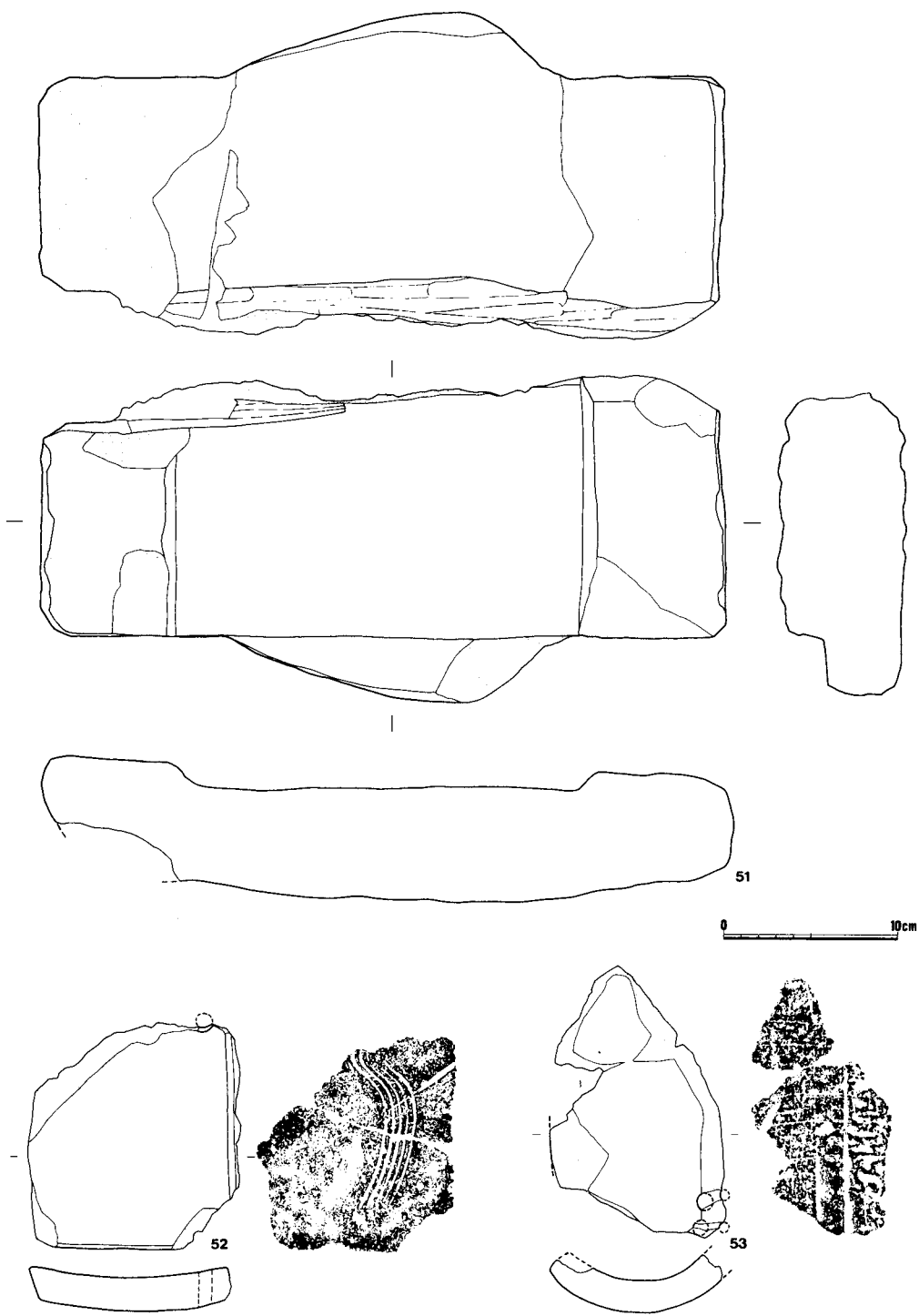


B区採集

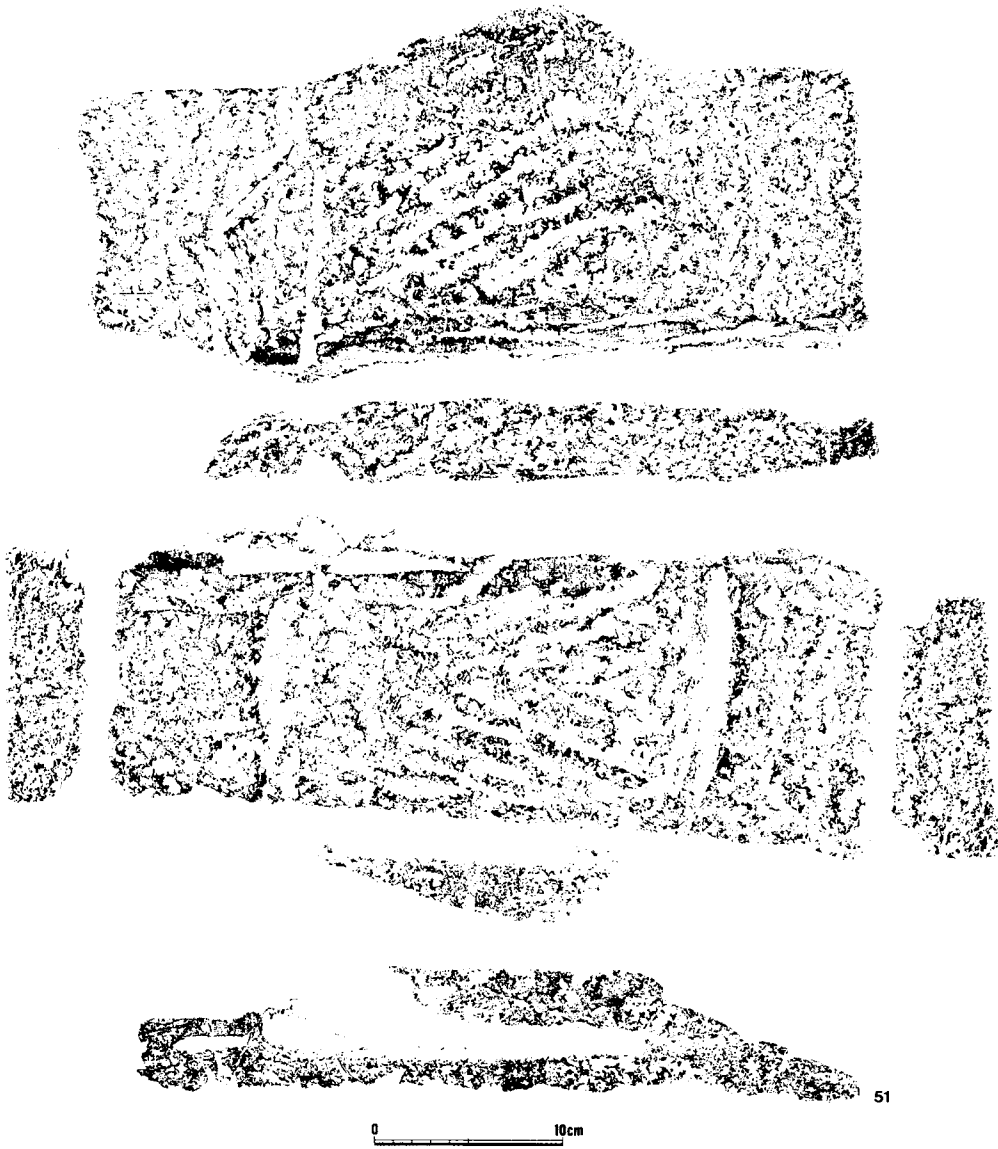
第55図 1993年度調査区盛土など出土・採集遺物



第56図 1993年度調査C区出土・採集遺物



第57図 1993年度調査区出土遺物



第58図 1993年度調査区出土遺物

第7章 1994年度の調査（第6次調査）

第1節 調査の状況

1994年度の発掘調査は、1994年5月24日から同年6月30日まで境内前の駐車場脇、永光寺川の南側斜面を対象に行われた。（第4図参照）調査区周辺も含めた永光寺川の南側斜面は、昭和の初め頃まで山の傾斜に沿った棚田状の水田であったところで、現在はその平坦面に杉が植林されており、一面杉林となっている。永光寺川の砂防工事で調査区の上流に落差工が設置され川岸の崖際平坦面が一部削り取られることになり、崖も含めた約120㎡の範囲が調査の対象となった。

調査区の山側は杉林となっており、対岸の駐車場脇は桜などの立木があり重機等の進入路の確保が困難であった。そのため、表土の除去作業から人力で行わなければならなかった。

第2節 調査の概要

調査区の区割りは、1993年度の調査で設定した4mメッシュのグリッドに整合性を持たせて設定した。なお、当該区の北西杭名を以て区名とした。また、これとは別に崖上平坦面（J-5～7区）を1区、崖下（I-3、4区）を2区として遺物の取り上げを行った。

（1）遺構（第59図）

調査では棚田状の平坦面とそれを区画する石組みが確認された。ただし、この石組みは基部の方では石が乱雑に組み合っており、意図的に基部から組み上げた様子はなかった。おそらく、永光寺川の氾濫等によってできた石の重なりを利用し、その間を埋め補って組み上げたものであると考えられる。

掘り下げ段階では確認できなかったものの断面観察により複数の田面と思われる水平堆積層と畦畔状の高まりを確認した。しかしながら、出土遺物が少なくこれら田面や畦畔状の高まりの時期を特定するには至っていない。ただし、江戸時代末頃の絵図にもこの付近は田や畠となっており、出土遺物の様相からも少なくとも近世（18世紀前半頃）には耕作が行われていたようである。

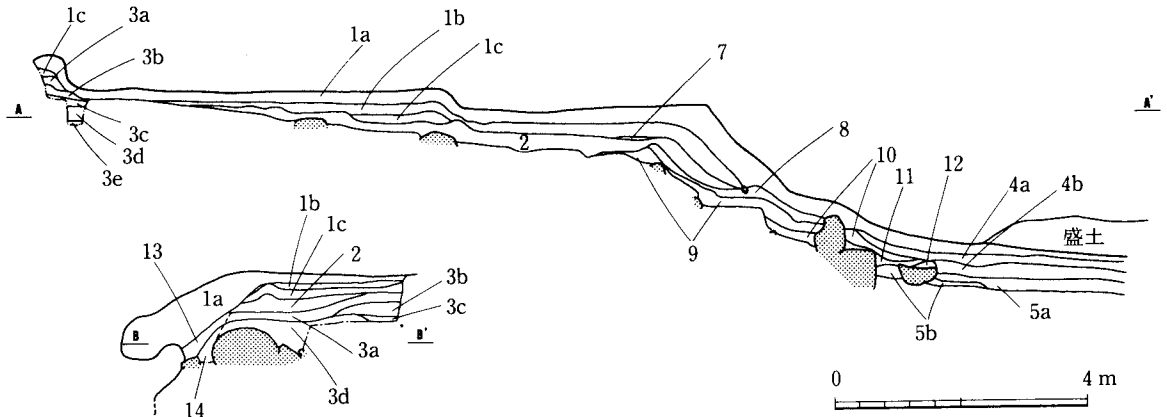
永光寺川南側斜面に広がる平坦面が、耕作を目的として開墾されたのか、あるいは僧坊などの施設の建設を目的として造成されたのかは、永光寺創建時の様相を探る上でも重要となってくる。しかし、今回の調査では平坦面的一部分、しかも崖際の調査であり、耕作の跡は確認されたもののそれ以外の遺構は検出されていない。

（2）遺物（第61図）

小破片の遺物が約90点出土しているが、摩耗の激しいものも多く、ほとんどが表土からの出土である。古代（11世紀前半）の土師碗（1）も1点出土しているが摩耗が激しく小片で、しかも表土（1a層）からの出土である。2～12は土師皿、13・14は青磁、15は瀬戸の灰釉碗、16は瀬戸の天目碗、17～20は珠洲焼、21～24は肥前の陶磁器（17世紀後半から18世紀前半）である。13の青磁碗（15世紀中葉）は表土（1a層）からの出土である。全体の様相としては14世紀の中頃と15世紀の後半の遺物に比較的近いものがある。また、17世紀後半から18世紀にかけての陶磁器も2層を中心として出土している。（端 猛）

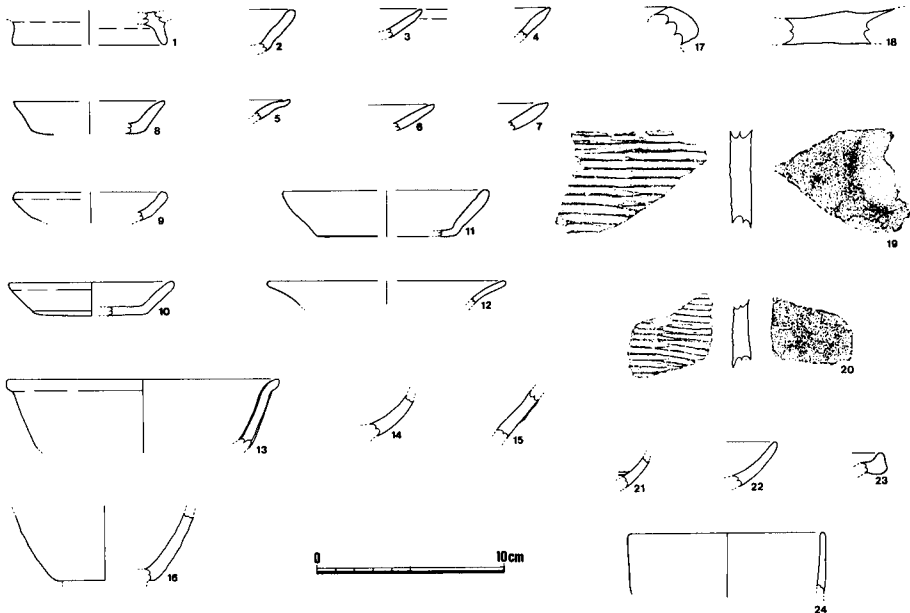


第59図 調査区全体図 (S = 1/120)



- | | | | |
|--------------|-----------------------------------|-------------|--------------------------|
| 1a. 暗褐色シルト | 7.5YR3/3 (粗砂、砂、腐植土混。表土。) | 5a. 褐灰色砂 | 7.5YR4/1 (粒子やや大きい。小石含む。) |
| 1b. 褐色シルト | 7.5YR4/3 (粗砂も多いが腐食土も混。) | 5b. 濁オリブ褐色砂 | 2.5Y4/3 (4層と黄褐色砂が混。) |
| 1c. 灰褐色シルト | 7.5YR4/2 (粗砂多く、粒子も大きい。) | 6. にぶい橙色砂 | 7.5YR7/3 |
| 2. 濁灰褐色粗砂 | 10YR4/2 (褐灰色の土に黄褐色軟石の粒混。軟石も多く含む。) | 7. にぶい黄褐色粗砂 | 10YR5/3 |
| 3a. 濁黄褐灰色粗砂 | 10YR5/6 (軟石多く含む。) | 8. 灰褐色粗砂 | 5YR4/2 (やや粘性を帯び鉄分が沈着。) |
| 3b. にぶい黄橙色粗砂 | 10YR6/4 (軟石、小石多く含む。) | 9. 褐灰色粗砂 | 5YR4/1 (やや粘性を帯び鉄分が沈着。) |
| 3c. 明黄褐色粗砂 | 10YR6/6 (小石少ない。) | 10. 暗赤灰色粗砂 | 5YR3/1 |
| 3d. 浅黄色砂 | 2.5Y7/3 (シルトに近い砂。ほぼ均質。) | 11. 黄橙色粗砂 | 7.5YR7/8 (軟石が混。鉄分も沈着。) |
| 3e. 橙色粗砂 | 5YR7/8 (礫を含む。) | 12. 黒褐色砂 | 7.5YR3/1 (ほぼ均質。水田のアゼか?) |
| 4a. 橙色砂 | 7.5YR4/4 | 13. 黄褐色シルト | 10YR5/6 (土壌化した3a層の延長。) |
| 4b. 灰色砂 | 7.5YR6/6 | 14. 黄橙色シルト | 10YR7/8 (土壌化した3d層の延長。) |

第60図 調査区土層断面図 (S = 1/120、L = 77.0m)



第61図 遺物実測図 (S = 1/4)

第8章 1996年度の調査（第7次調査）

第1節 調査の概要（第62図）

本遺跡の平成8年度の発掘調査は、1996年4月15日から同年4月26日にかけて実施した。調査地は永光寺の参道左手に位置する台地で、調査面積は約200㎡ある。

本遺跡の調査原因である永光寺川の砂防工事も、その事業の大方が終了したことから、本年度は事業の最終年度として、永光寺の参道沿いの河岸整備と、参道入り口近くの砂防堰堤一基の建設が策定された。そのため遺跡の発掘調査は、この砂防堰堤で切り落とされる永光寺川右岸の台地部分が対象地として決定された。

この永光寺右岸の台地は、標高80～90mの緩斜面が、中・小規模の平坦地に造成された場所であり、永光寺の伽藍が立ち並ぶ台地の南西方向に位置する。この台地の南辺にあたる調査地は、標高が85mと87mを測る二面の平坦地で、直下を流れる永光寺川が台地を侵食している部分である。またこの台地は、樹齢約20年の杉林である。

第2節 調査の成果

（1） 遺構（第63・64図）

調査地の上下二段の平坦地（高差1.7m）は、それぞれ90㎡前後の広さを測る。その平坦地の南辺に最大幅4.5m、長さ22mの調査区を設定し、人力で表土や造成土を掘削した。

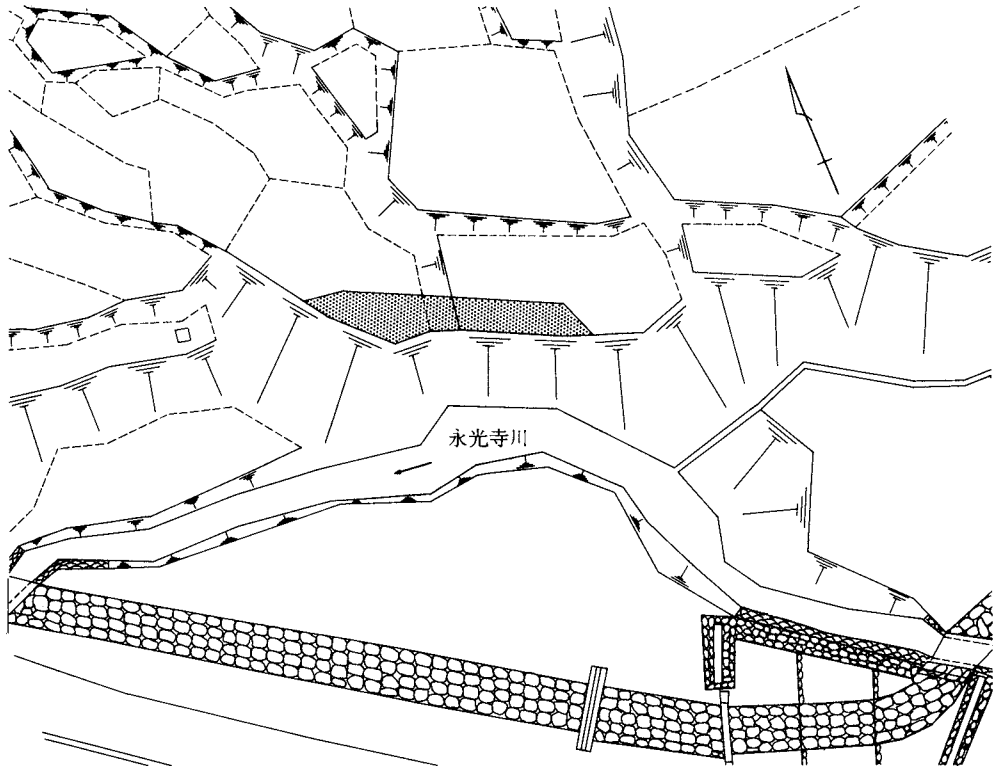
その結果、下段の平坦地側の法面を保全する意図で築かれたと判断される石積遺構が検出されたが、建物跡など通有の遺構は見られなかった。さらに上段から下段までの土層観察と調査区内の土層の広がりや土質からすると、上段は主に畝地であり、下段は水田として土地の利用があったことが窺われた。この土地利用の違いは、この斜面が小規模な農耕地として空間利用が進められる過程で、斜面内部に湧出する地下水の位置に応じた土地利用が図られた結果と受けとめることができる。

調査の結果、この上下二段の平坦地からは、永光寺の歴史に直接関わるような遺構は発見されなかったが、表土や耕作土からは、少量ながらも過去の調査成果と符合する遺物が出土した。これらは調査区の上方にある中規模の平坦地方向から、移動してきた可能性が考慮される。

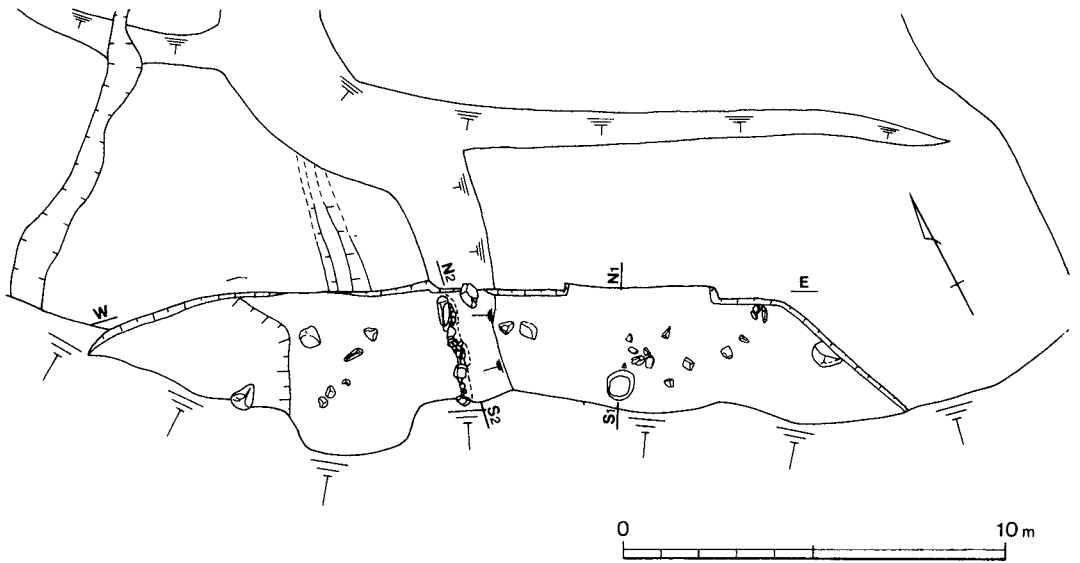
（2） 出土遺物（図版32）

今回の調査で出土した遺物は、本遺跡の調査の中でも最も少なく、図示するまでの資料は出土していない。上段の平坦地からは、燻瓦と肥前産白磁の各1点が出土した。燻瓦の時期不明であるが、肥前産白磁は19世紀の製品であろう。下段の平坦地からは、耕作土と判断される土層から16点の土器片が出土した。その種別と時代が知られる遺物は、平安時代の土師器壺1点、14世紀代の土師器皿3点、15世紀後半の青磁碗1点、16世紀代の土師器皿1点と越前焼甕1点、17世紀後半の唐津産播鉢1点である。この遺物構成は、少量ながらも過年度の調査成果に包括可能な内容であり、本遺跡から出土している遺物群の様相を反映している。

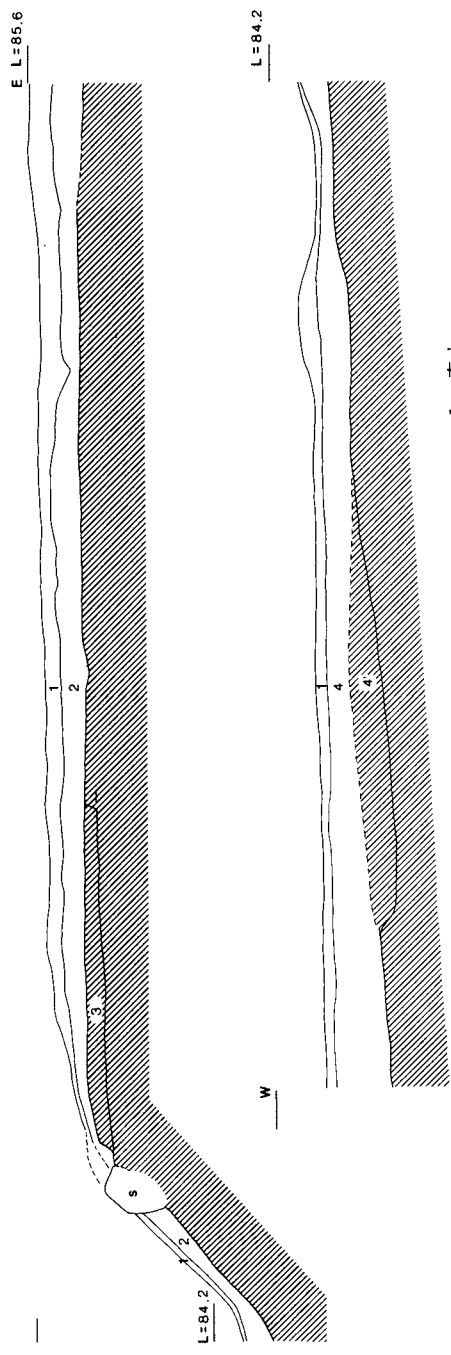
（垣内光次郎）



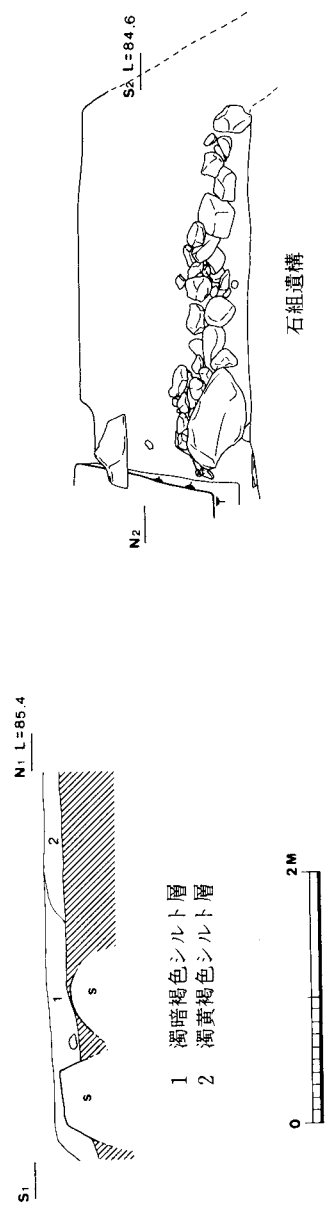
第62図 調査区位置図 (S = 1 / 500)



第63図 全体図 (S = 1 / 200)



- 1 表土
- 2 濁灰褐色シルト層
- 3 濁黄褐色シルト層
- 4 濁明黄灰色シルト層
- 4' 灰色シルト層



石組遺構

第64図 土層断面と石組遺構美測図 (S = 1/60)

付章 利生塔跡の測量調査

現在ある永光寺伽藍の多くは、明治13年に再建されたものである。山門から法堂（仏殿を兼ねる）に向かって右側に庫裏・書院・方丈・浴室、左側に僧堂・東司・鐘楼が配置されて回廊で結ばれている。さらに法堂の奥に伝灯院（開山堂）が置かれ、その奥の高台には、本寺の奥の院にあたる開山の墓所や五老峰（五人の高僧の遺品を埋納する墳丘）がある。そして伝灯院の東斜面に、室町幕府が寄進したことで知られている利生塔跡が位置する。この塔跡の測量調査を1992年6月に実施したのでここに報告する。

利生塔跡は伝灯院の東斜面で、標高約130mの丘陵斜面を造成した平坦地であって、永光寺の庫裏や書院を俯瞰する位置にある。平坦地の規模は、東西約14m、南北約8mを測り、その中央に一辺約6.5mの方形台状（亀腹）を呈する基礎の高まりがみられ、内部に大小13個（3個欠）の礎石が露出している。この塔跡の礎石は、長径約1~0.6mの花崗岩の自然石が使用され、その規模から利生塔が、一辺約4.2mの建物規模であった判断される。また西側の礎石に亀裂が入りものも多く、この利生塔が焼失した可能性が考慮される。さらに基礎の造成もボーリングの所見からすると、地山の削出しと薄い盛土で構築されてようである。

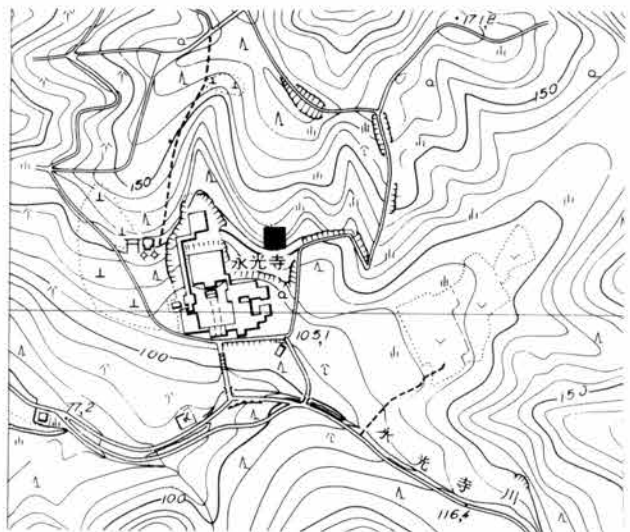
さらには永光寺の寺宝として、この利生塔に埋納されていた舍利塔と容器が伝えられている。舍利塔は、幅2cm、高さ2.7cmの水晶製品で、香炉形態の容器は、幅6.2cm、4.6cmの濃紺のガラス製品である。いずれも室町幕府から下付された品物である。

この永光寺に残る利生塔跡は、暦応二年（1339）に室町幕府の足利直義が、光厳上皇の院宣を得て、安国寺の設置と併せて国ごとに建立を図った仏塔の一つである。その目的は、元弘の乱以来の戦没者供養という社会政策と、各国の寺塔の統制を図り幕府の威信宣揚という政治的配慮にあったといわれている。本寺には利生塔の史料として足利直義の御教書、兄尊氏の寺領寄進状も伝えられ、この塔跡の礎石群や舍利塔などの歴史を裏付けている。

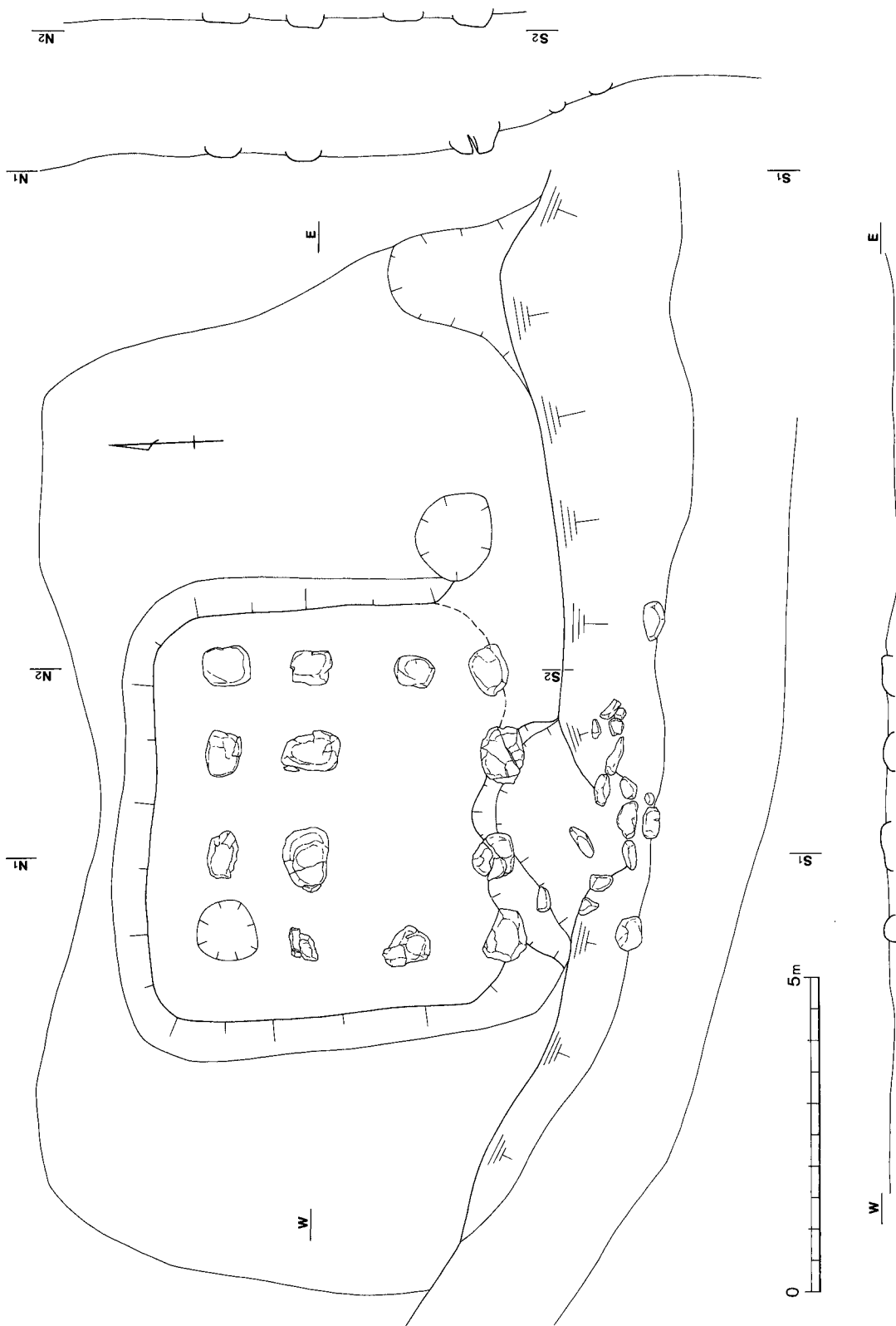
（垣内光次郎）



利生塔跡近景



第65図 利生塔跡位置図（S = 1/6,000）



第66图 利生塔跡測图 (S = 1 / 100)

報告書抄録

ふりがな	ようこうじいせき							
書名	永光寺遺跡							
副書名	境内地の発掘調査							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	平田天秋・柿田祐司・小嶋芳孝・岩瀬由美・澤田まさ子・端猛・垣内光次郎・室山孝							
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒921 石川県金沢市広坂米泉4丁目133番地 TEL0762-43-7692							
発行年月日	1997年3月28日							

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 。 ’ ”	東 経 。 ’ ”	調 査 期 間	調査面積㎡	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
ようこうじいせき 永光寺遺跡	いしかわけんはくいし 石川県羽咋市 さかいまち 酒井町	17207	07035	36° 54’ 10”	136° 51’ 15”	平成2年 9月3日～ 12月7日 平成3年 6月17日～ 8月9日 平成4年 5月11日～ 6月5日 平成5年 9月28日～ 11月5日 平成6年 5月24日～ 6月30日	約500 約800 約450 約500 約120	永光寺川通 常砂防(荒 廃)工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
永光寺遺跡	寺 院	鎌倉・室町 ～近世	建物跡、道路跡		経筒蓋、鉄鋤			

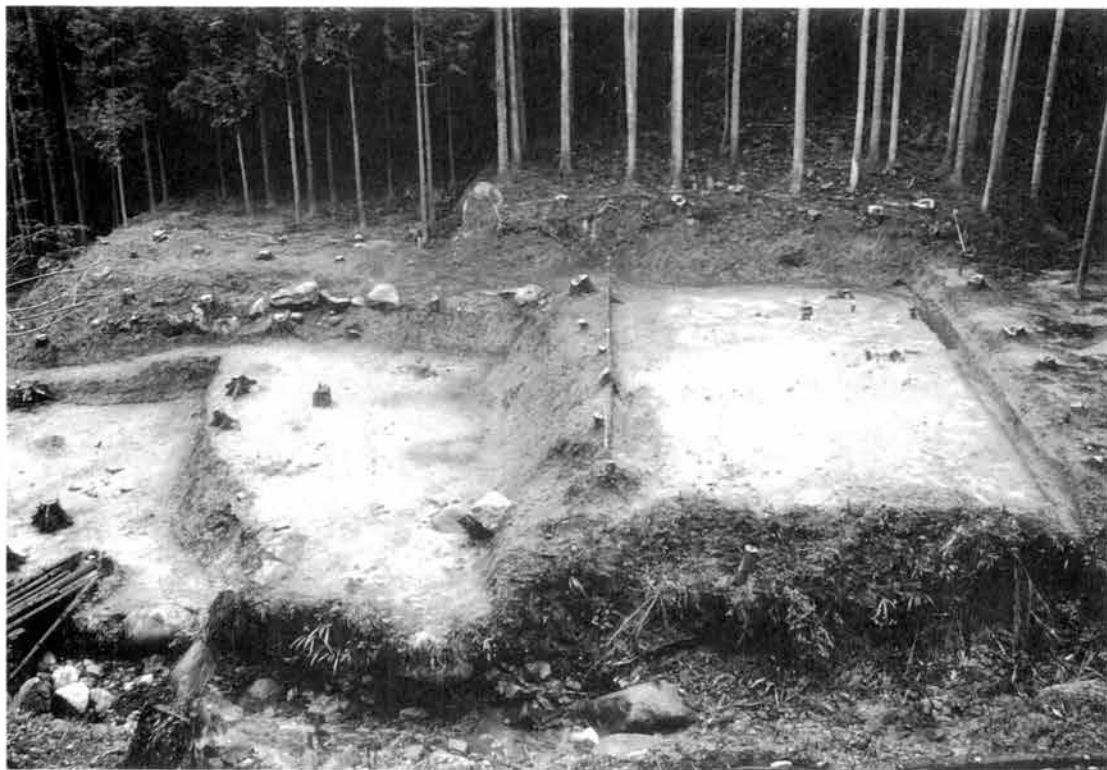


調査前の状況 (下流より)



調査区域全景

図版 2 (1990年度)



第Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ区全景（南西より）



第Ⅵ-1区全景（北西より）



第VI-1区トレンチ (北西より)



第VIII区全景 (南西より)

図版 4 (1990年度)



第Ⅸ区全景（北西より）



第Ⅰ'区全景（南東より）



空から見た永光寺境内



永光寺川と1991年度調査区

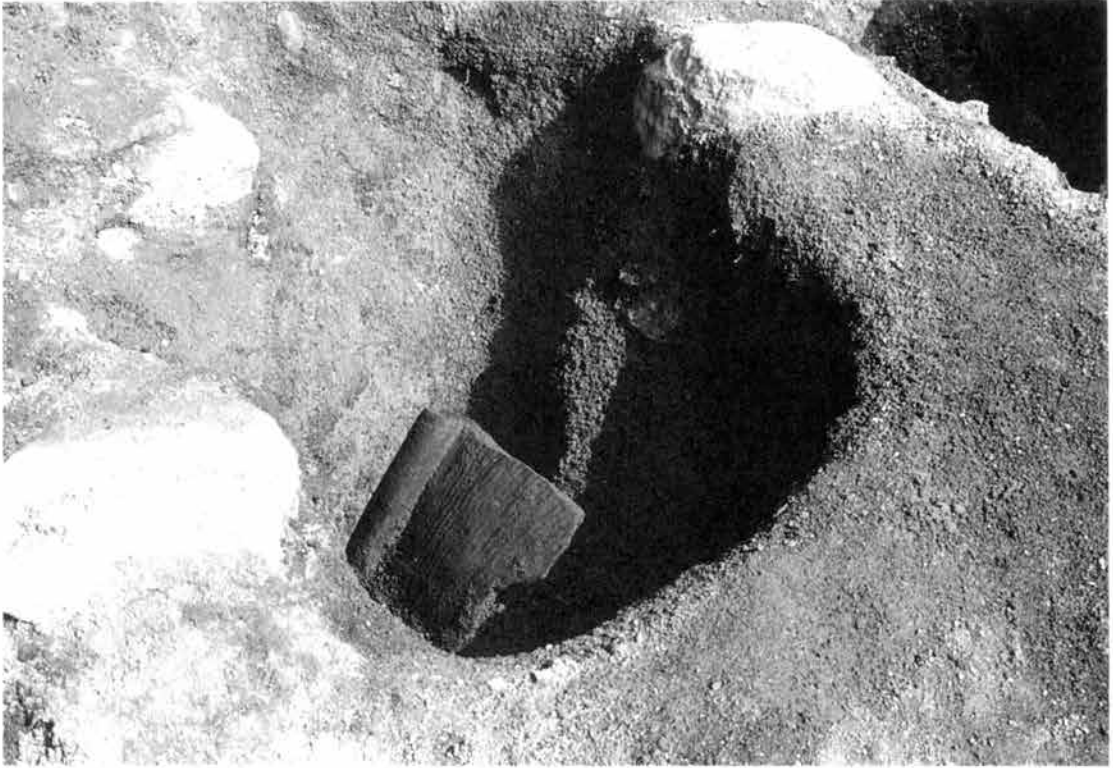
図版 6 (1991年度)



第 X ・ IX 区の全景



第 IX 区石垣

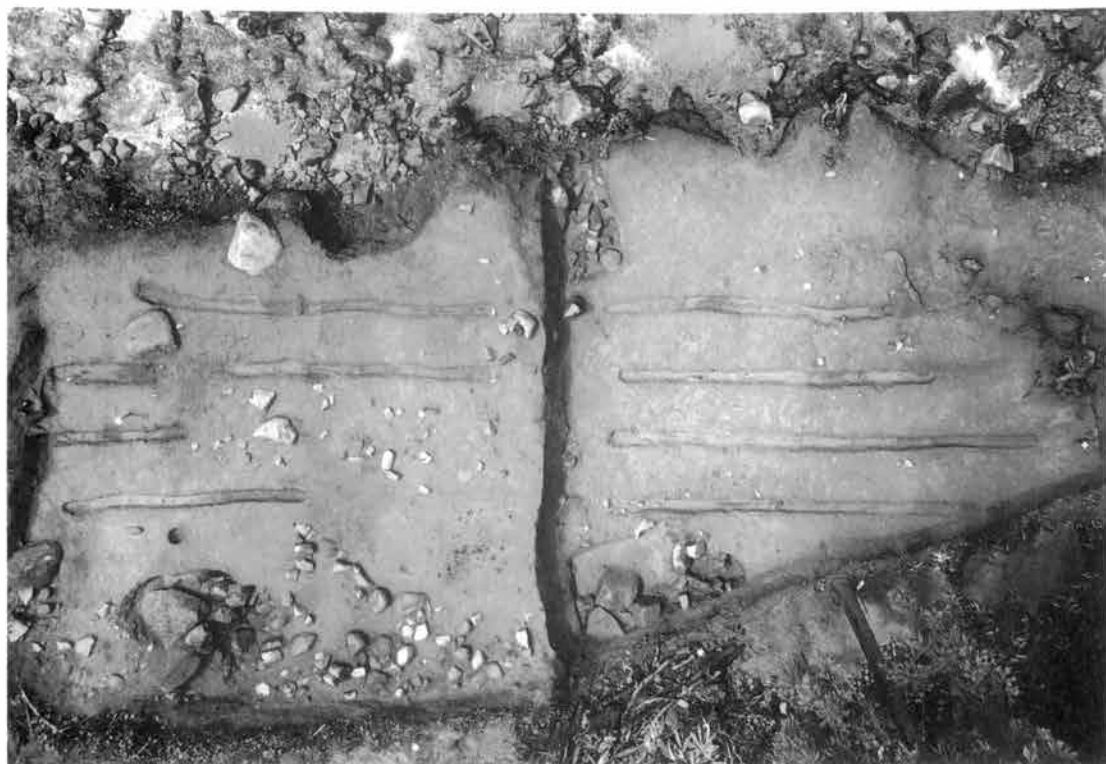


第VIII区珠洲壟の出土状態

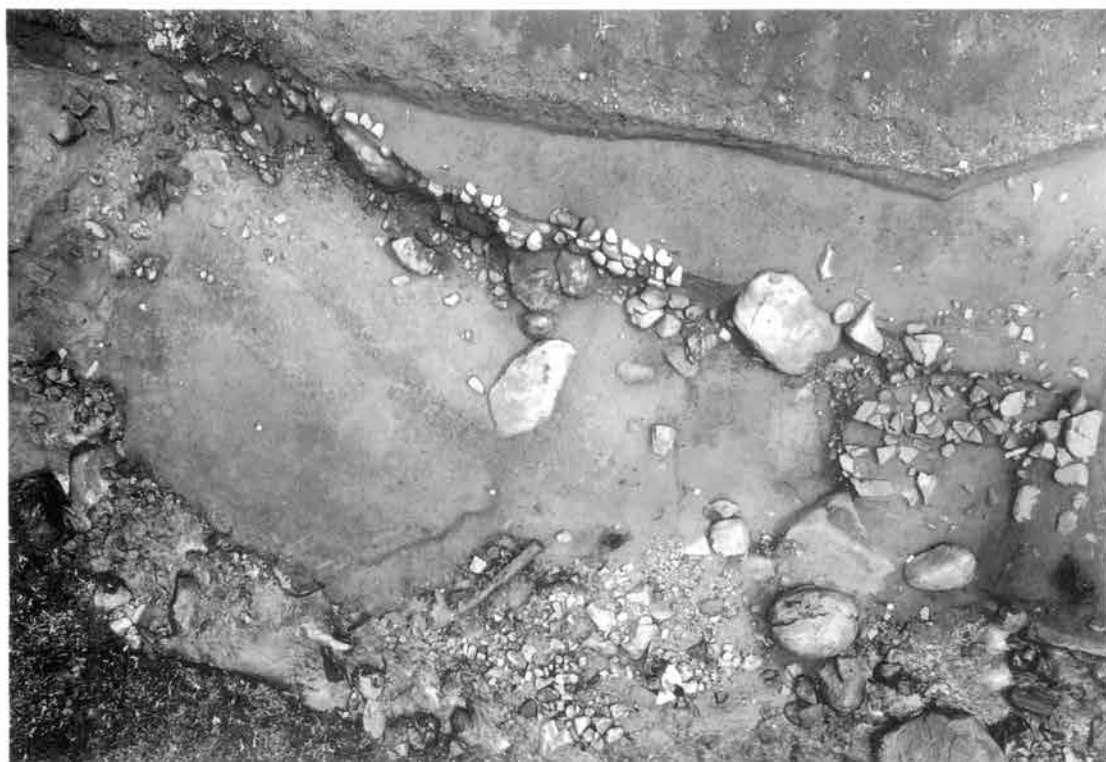


第VIII区鉄製鋤先の出土状態

図版 8 (1991年度)



第ⅫⅢ区の垂直写真



第Ⅸ区の垂直写真

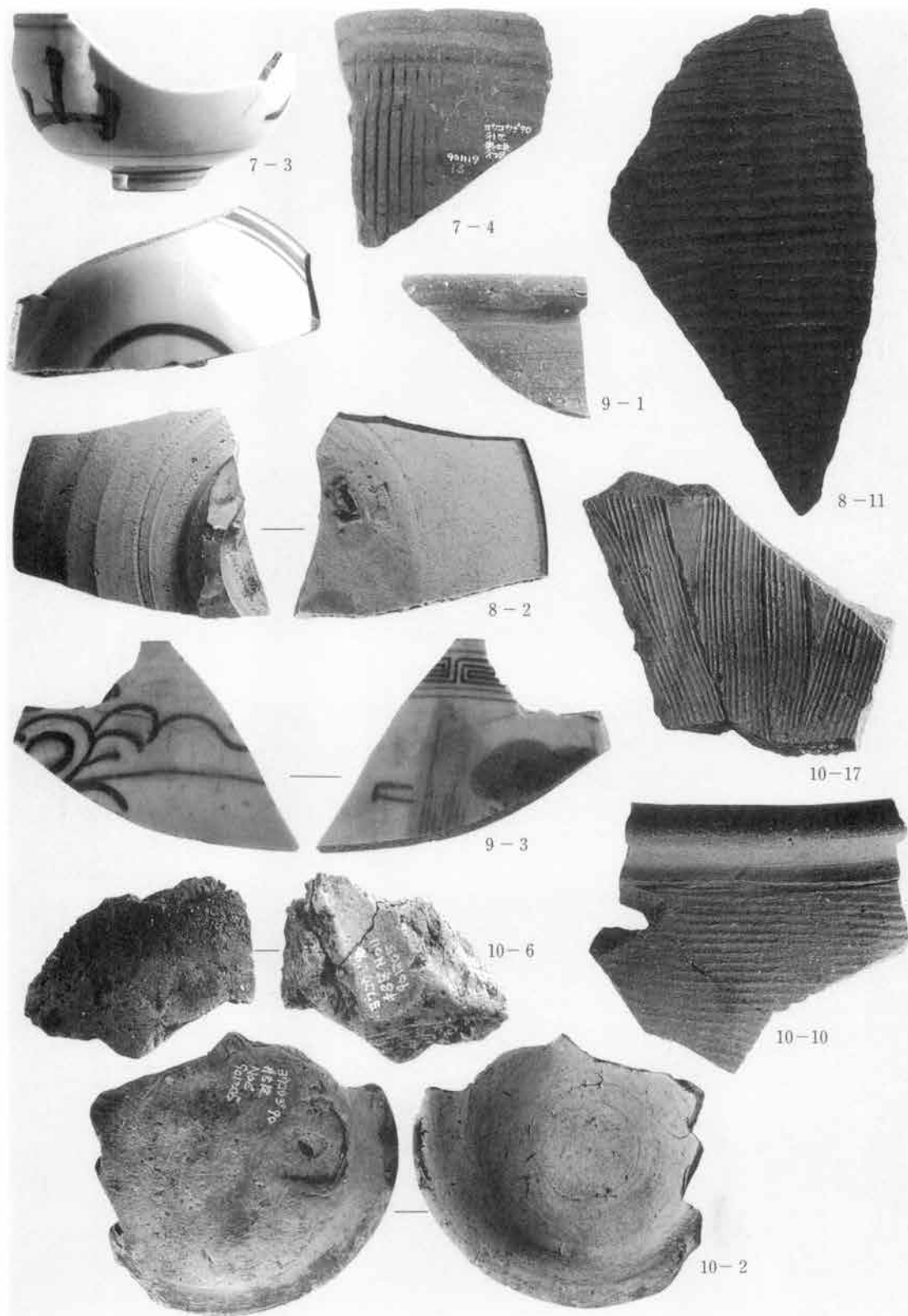


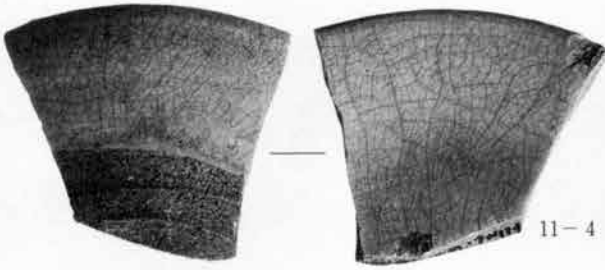
第Ⅷ区の垂直写真



第Ⅷ区の全景

図版10 (1990年度)

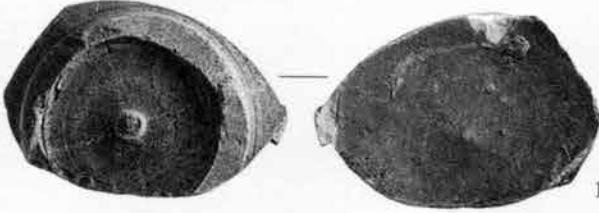




11-4



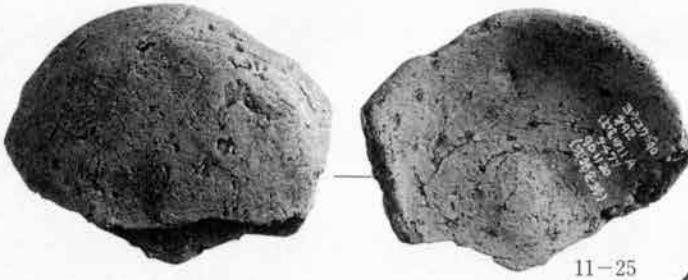
11-10



11-7



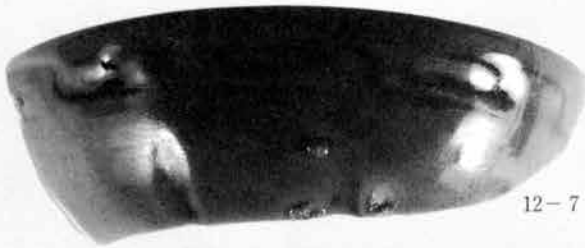
11-12



11-25



11-23



12-7



12-2



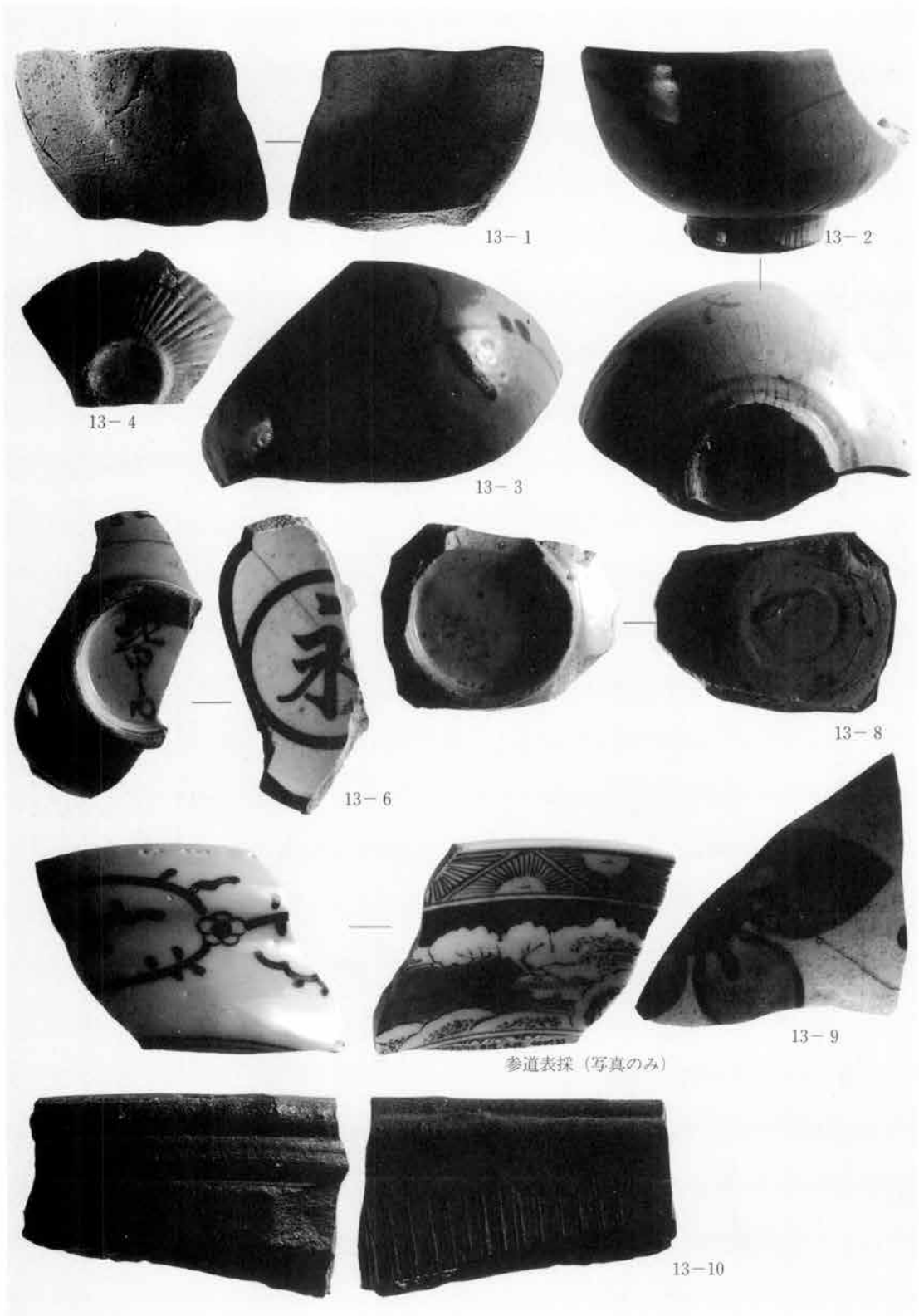
12-13



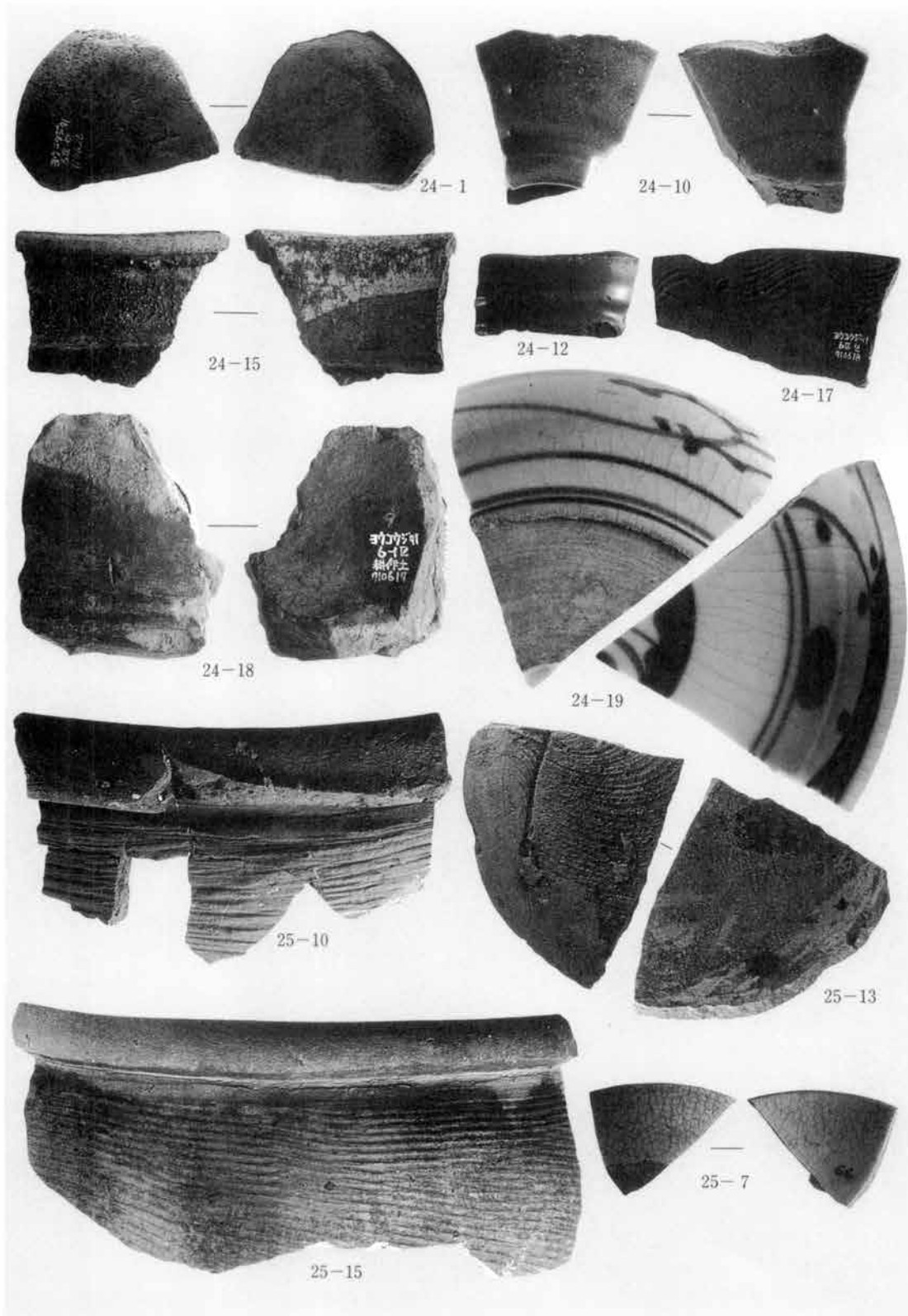
12-15



12-18



図版14 (1991年度)





26-3



26-6



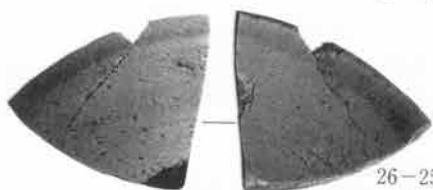
26-11



26-19



26-12



26-25



26-15



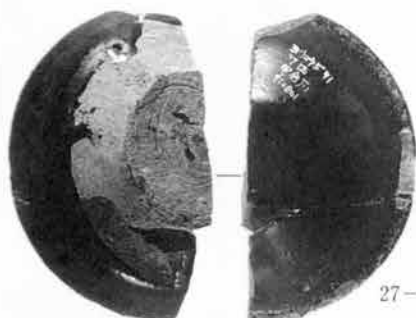
27-5



27-4



27-10



27-22



27-18



27-23

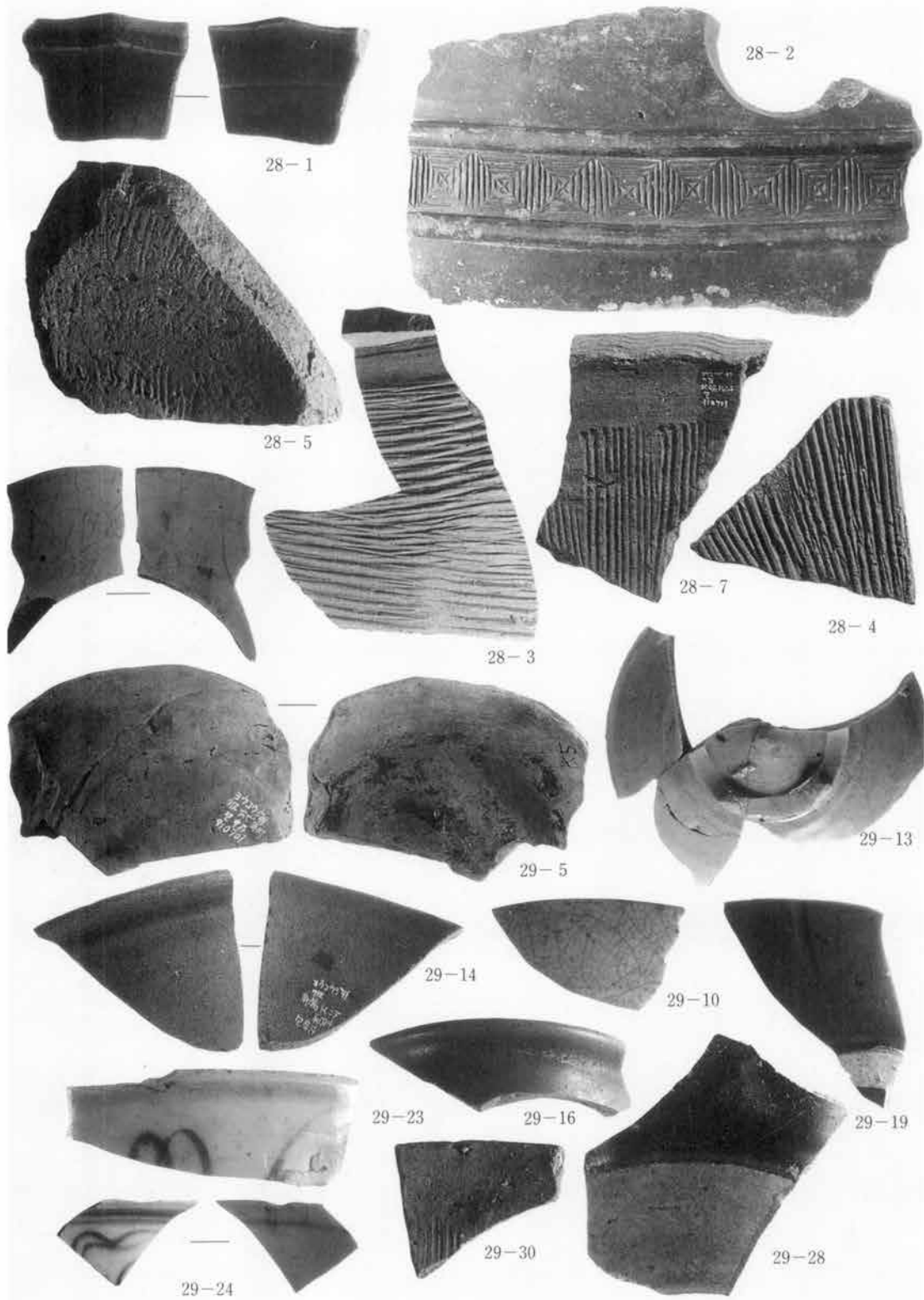


27-16



27-26

図版16 (1991年度)





30-1



30-2



31-3



30-6



30-7



31-13



31-22



31-23



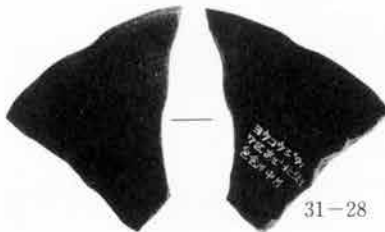
31-34



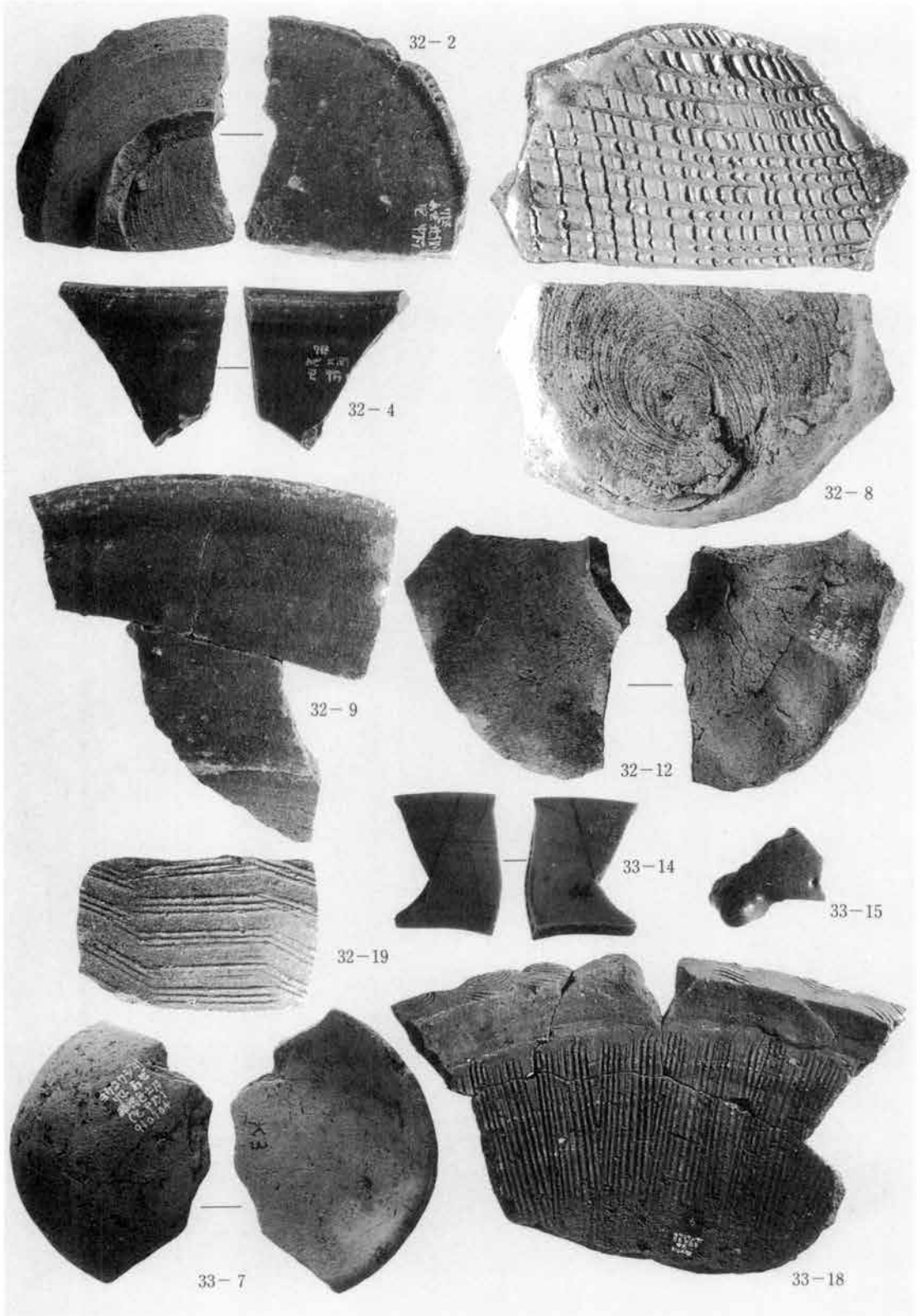
31-26

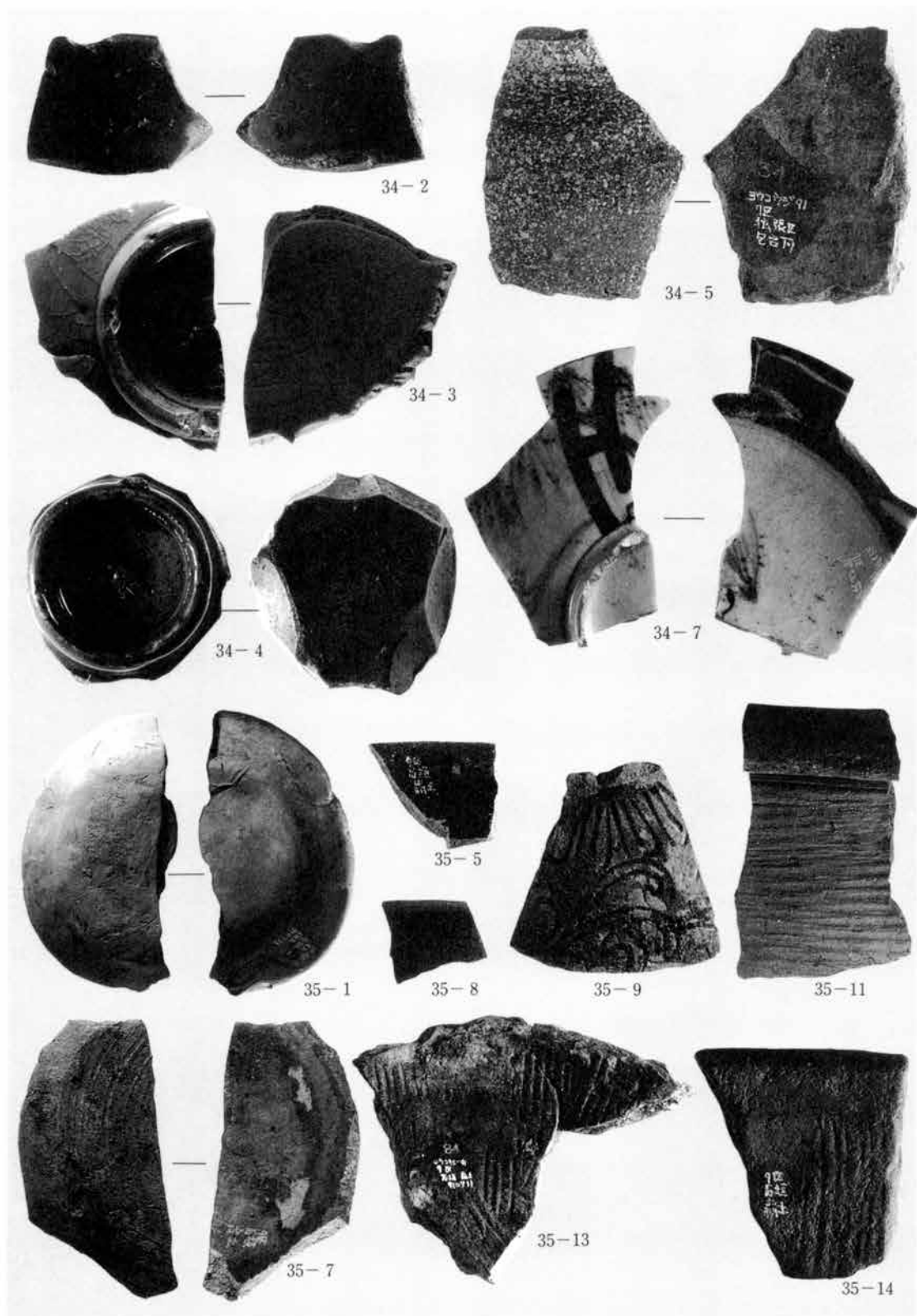


31-34



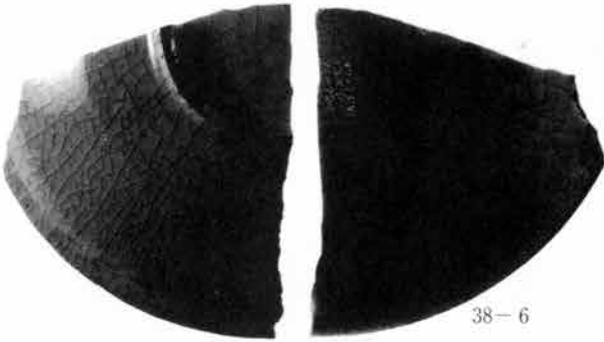
31-28





図版20 (1991年度)





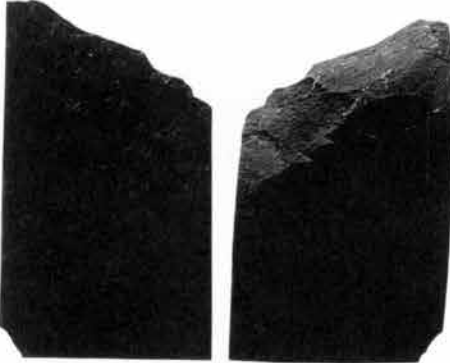
38-6



38-5



38-7



39-7



39-1



39-4



39-2



39-3



39-6



39-11



39-5



39-8



39-9

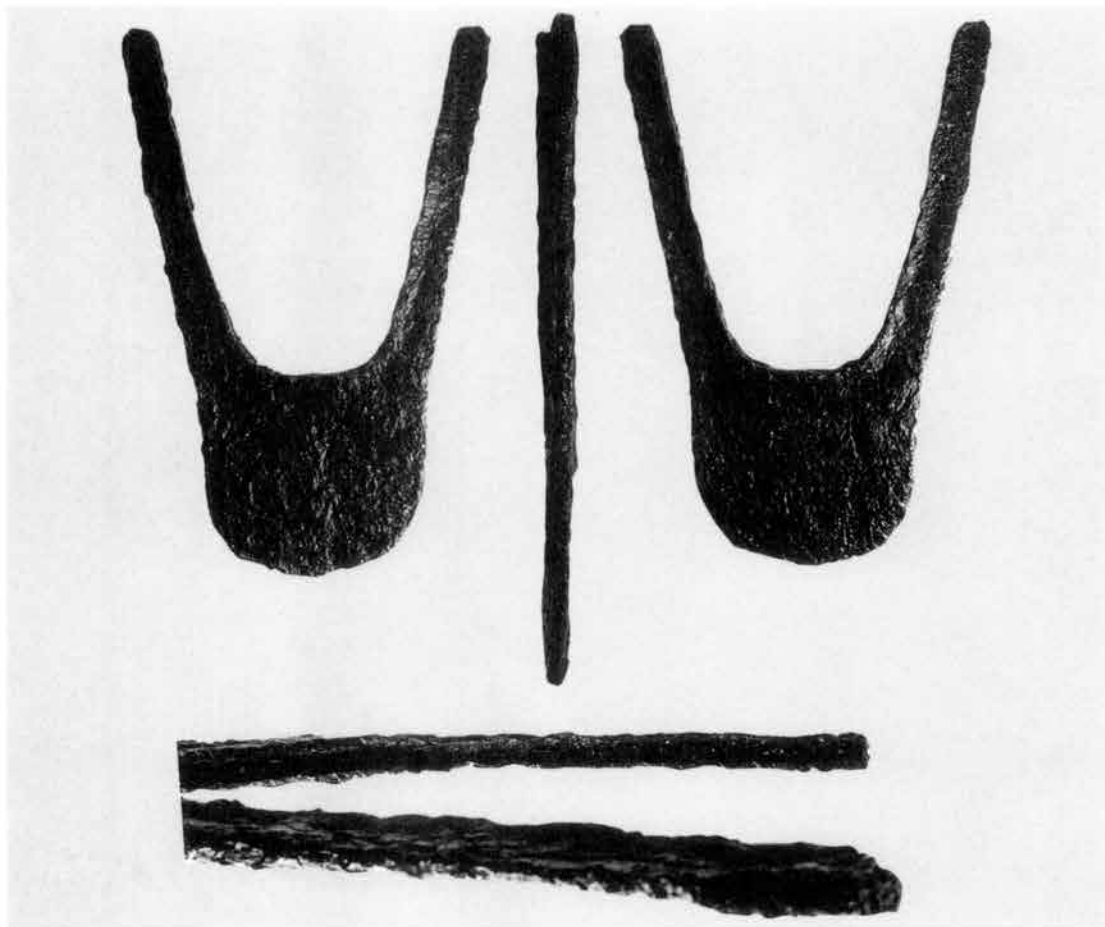


39-13



39-12

図版22 (1991年度)



鉄製鋤先



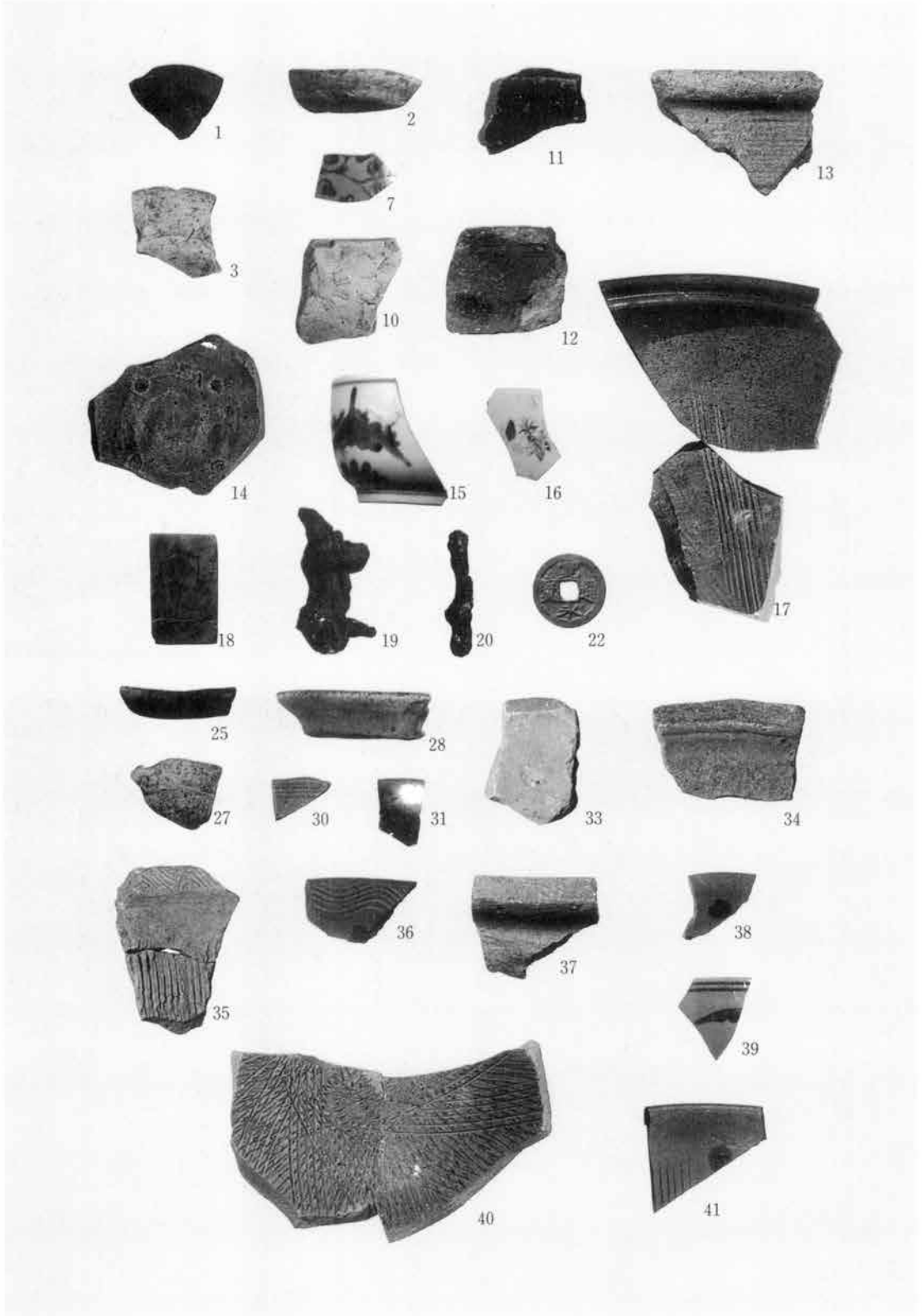
経筒蓋の出土状態



調査区全景 (東より)



落ち込み (南より)



出土遺物 (22はS = 1/2、その他はS = 1/3)



遺跡全景

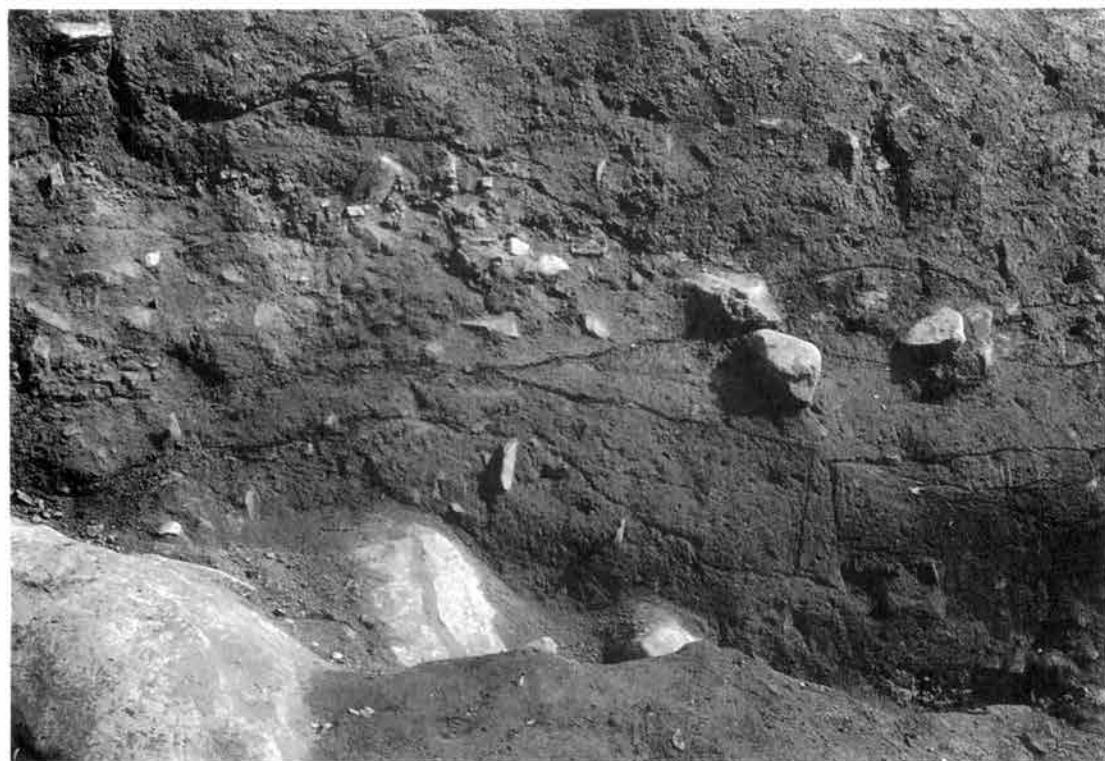


完掘状況(南より)

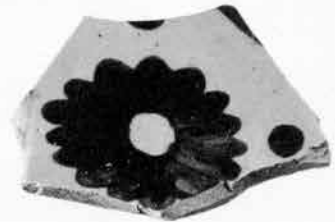
図版26 (1993年度)



完掘状況 (北より)



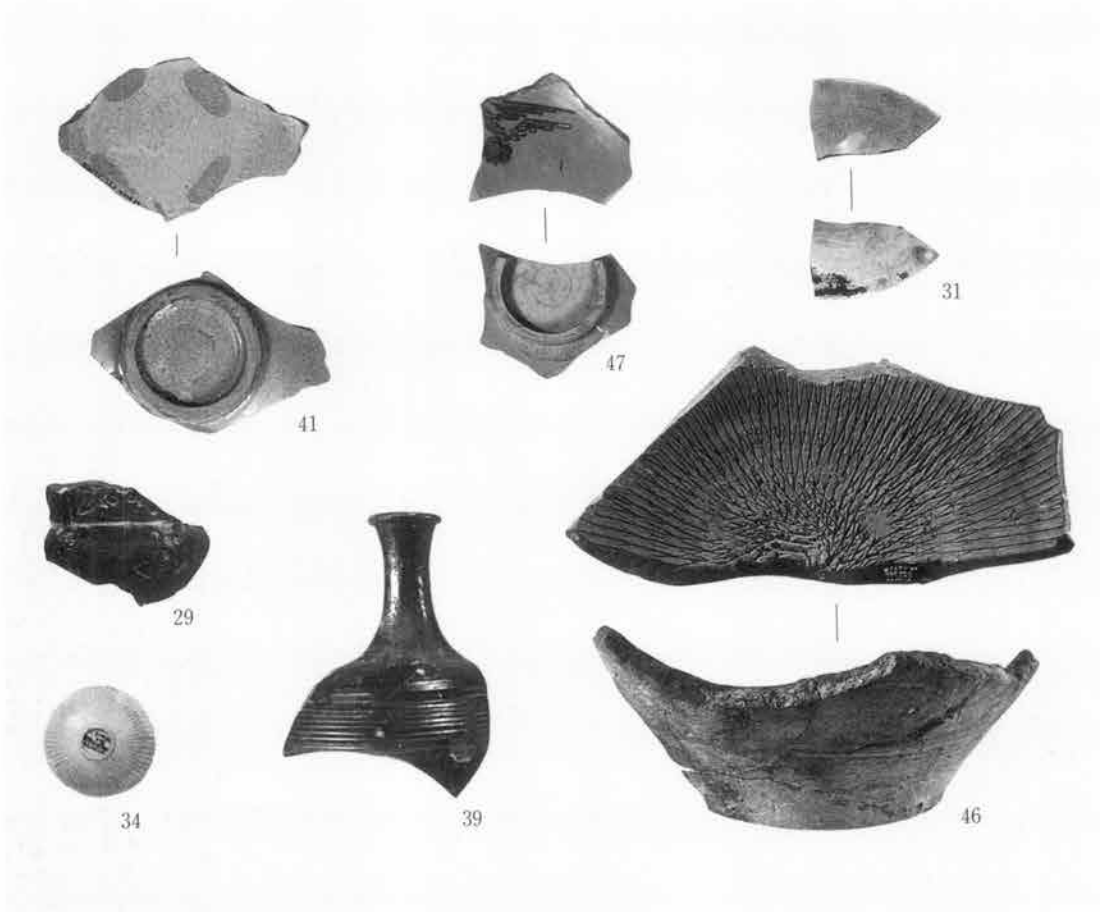
道状遺構断面



48

42

図版28 (1993年度)



1993年度出土遺物 (番号は、挿図第53図～第58図の番号による)



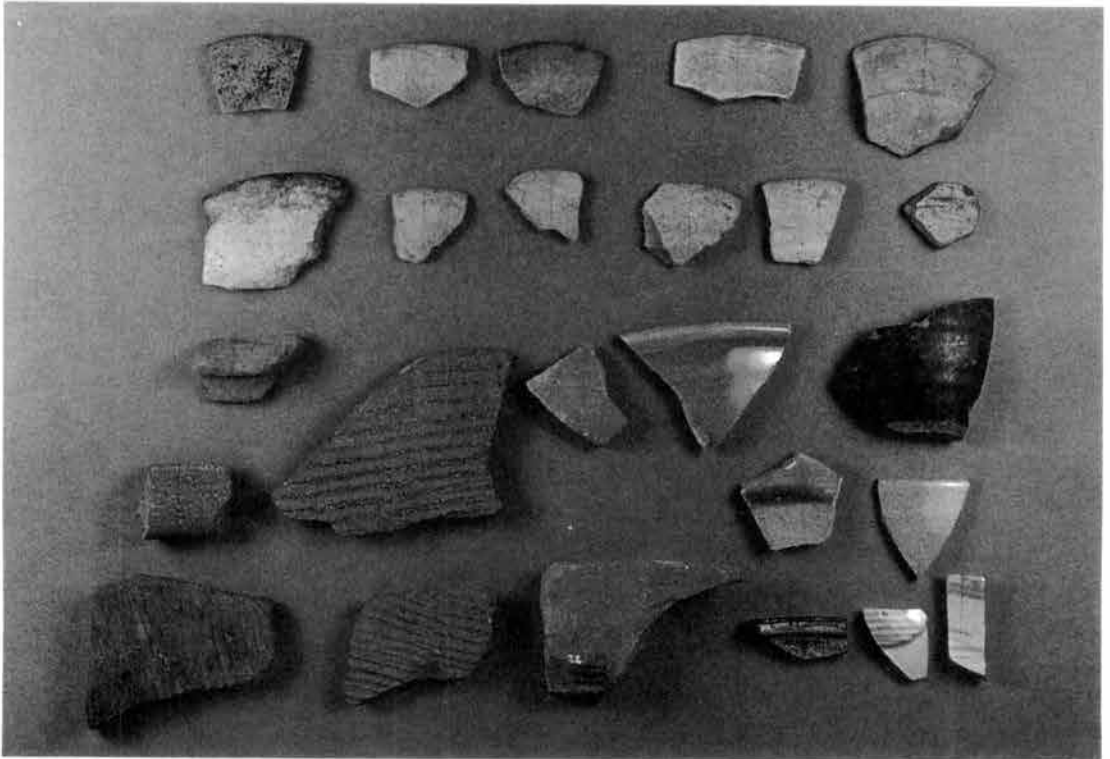
調査前風景 (西より)



調査区全景 (北西より)



調査区近景 (西より)



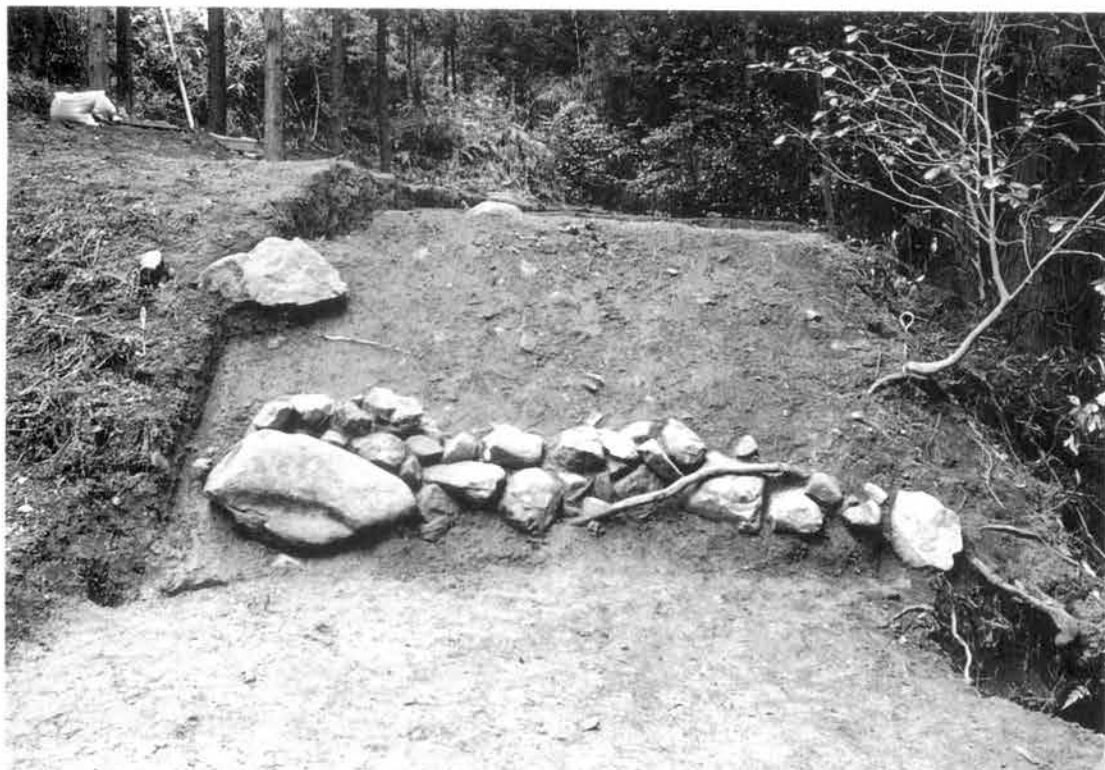
出土遺物



調査前の遺跡（上段、東から）



遺跡全景（下段、西から）



石積遺構 (西から)



出土遺物

永光寺遺跡

— 境内地の発掘調査 —

平成 9 年 3 月 25 日 印刷

平成 9 年 3 月 28 日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉 4 丁目133番地
〒921 電話 (0762) 43-7692番

印刷 ヨシダ印刷株式会社
〒921 石川県金沢市御影町19番1号
